
あの日

春桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日

【Nコード】

N 6 1 1 5 M

【作者名】

春桜

【あらすじ】

井上織姫とアランカル、ウルキオラとの間に生まれた、双子の兄の心と妹の心春は高校1年生。妹を愛してやまない心に現れたオレシジ髪の転校生……。彼は父を一度倒した男の息子だった！

1 好敵手（前書き）

完全妄想小説です（^^;）織姫とウルの子供の話・・・ウルは今
回できません><よければ読んでください！

1 好敵手

父は、化け物だった。
母は、人間だった。

「待つて〜シン〜！私も行く〜！」

「はやくしろよ。遅刻する。」

心春^{こはる}は双子の兄である心^{しん}を呼んだ。

シンはため息をつきながらも心春の鞆を持ってやる。心春は一生懸命に靴をはく。

「大丈夫？二人とも。」

エプロン姿の母、井上織姫が玄関に駆ける。

「大丈夫です。心春のことは俺が責任を持って学校につれて行きます。お母さんは家事頑張ってください。」

織姫は我が子ながらものすごくいい子だと改めて思った。

「いいお兄ちゃんだわ。シン。」

「できた！行つて来ます！」

「はい。行つてらっしゃい。」

二人はバタバタと走っていった。

「どうしよう。遅刻するかなあ。」

「多分な。本気だせよ。」

「やだ。」

なぜか二人には不思議な力があつた。教科書など一度見たものは忘

れない。怖いものや嫌なものは消去することも可能だ。そして運動神経も半端なくいい。50m走なら必ず全国一だ。二人は目立つのでいつの日か本気は出さなかった。勉強も運動もある程度できる。そんなただの学生だ。

二人は高校1年生。季節は10月の下旬。

いつの間にか、足が速くなっていたようだ。鐘が鳴る前についてしまった。

「なんで！？間に合っちゃった……。」

「素直に喜べよ。早く入ろう。」

二人は同じクラスだ。双子だが、クラスを別々にするなと頼んだ。頼んだ誰かは想像に任せる。

「おはよう。心春。」

「おはよう。美緒。」

彼女は心春の一番の親友、あいはらみお相原美緒。

シンはすぐさま席につくとクラスの女子、違うクラスの女子が一気に集まってきた。

「井上君。おはよう〜！」

声をそろえるように女達が言う。シンはいつもの如く無視してやる。それが悔しいのか嬉しいのか彼女達は鐘が鳴るとクスクス笑っていつてしまう。

「なんで無視するかなあ〜モテモテの王子様は。」

「黙れ。雪花。」

後ろに座っている爽やかなクラスメイト、ゆきはながある雪花薫が言ってくる。彼は唯一シンと話せる人物だ。シンは女にはもてるが男はあまり寄せ付けなかった。黒い髪に、黒い瞳。前に不良の奴に喧嘩を売られたのだが、たった一人で全部倒してしまった。全員病院送りになったそう。

その点、妹の心春は違った。明るく、髪の色も母親似で性格もおっとりとした性格で決して嫌いにはなれない性格だ。シンが兄という

ことで嫉妬もまざり女から陰口も言われていたことがあるが気にしなくていい程度だ。彼女は顔も可愛いので男にモテる。しかしシンは告白やストーカー行為をするやつをことごとく撃退した。それに気付いていないのは心春だけだ。なので最近では心春に近づく輩も減った。彼女を手に入れるのは至難の業だとさっているからだ。

「今日は転校生が来るんだってよ。いつもより先生がくるのが遅い訳だ。」

「転校生だと？男か？」

鐘が鳴って数分たつても教師が来ないのはそれか。転校生などには興味はないが男なら話は別だ。

「うん。男。」

雪花は前の少年が殺気を放ったのを感じた。彼が男かを気にするのは心春に近寄ると思っているからだ。それほどまでに妹しか頭にな

い。
しばらくして教室のドアが開いた。まだ歳若い教師と、一人の少年が入ってきた。少年はわりと整った顔立ちをしていた。細身だが喧嘩は強そうに見える。髪の色は染めているのか、オレンジだ。シンは彼とどこかであったように感じた。

「今日からお前達のクラスメイトになる……………」

「黒崎 一です。よろしくおねがいます。」

頭をさげた男……………。シンは一目見てこいつは厄介な奴だと思った。

2 決闘

「はい。終わり。いつものお薬出しますから。」

「ほいほい。ありがとうね。井上先生！」

目の前の老人は悪戯に礼を言う。

「いいなあ。やっぱり井上先生の奥さんは可愛いなあ。ナース萌えだね。」

横にいた織姫はいつものからかいに戸惑った。こういうのはやはり苦手だ。

「無駄口ばかりたたいてたら、その頭に乗せてる鬘、燃やして海に捨てますよ。さつさと帰れスケベジジイ。」

ウルキオラは冷たく一喝する。この会話もいつものことだが織姫は「ちよつと！患者さんになんてこと言うの！？」

と怒る。

「へへ。優しいなあ。奥さんは。じゃ、また来週な。先生。」

「二度と来るな。」

老人は笑って帰っていく。

「もう！ウルキオラ！そんなんじや患者さん減っちゃうよ！」

「別に。そんなのどうでもいい。だがお前にセクハラ発言するクソジジイはクソジジイで十分なだけだ。」

白衣を着て、眼鏡をかけたウルキオラは名医で有名だった。もう十何年も前のことだ。二人が結ばれたのは。彼は人間になりえた。それはまたのべるとして。彼は仕事に医者を選んだ。それは人を救うからだ。ウルキオラは言う。そして勉強してあつという間に医者にな

なった。今は個人のクリニックを経営している。織姫も夫の助けになればと看護婦になった。

「本当に不器用なんだから。」

微笑んで織姫はウルキオラを見る。

「悪かったな。お前も俺をわかつているだろう?」

「わかつてる。そんなとも全部好きよ。」

「なら、いい。」

ウルキオラは仕事だといって椅子に座り直す。ウルキオラは顔が赤くなっていた。それは喜びの現われだろう。

「雪花。」

「ああ?」

「お前はゴミだがマシなゴミだ。俺の友として認めてやろう。」

「.....お前。マジ大丈夫か?」

「何がだ。俺がお前を使ってやると言っている。あの男を調べろ。」

「なんでだよ。俺は情報屋でも探偵でもねえぞ? 転校生初日で心春ちゃんに手出さないだろ.....って!!」

雪花が驚いて立ち上がるとその指先には黒崎 一が心春と話していた。

シンの冷気が熱気と変わる。

「雪花。」

「は、ひゃい!」

「あいつを抹殺したい気分だ.....。俺の言ってる意味がわかるな?」

「駄目だつて！犯罪だつて！喧嘩ぐらいにしとけつて！」
シンは黒崎を睨んだ。殺気をこめて。しかし黒崎は何も感じないような素振り。本当に厄介だ。

休み時間。シンの元に女子がわいた。

「ねえ、シン君。今日カラオケ行かない？？」

「黙れ。失せろ。気色の悪いゴミめ。」

シンはひと睨みすると立ち上がる。後ろで見ていた雪花は背筋が凍った。

（まったくこいつら……！！何でシンが今日一番機嫌悪いときに来んだよ！）

シンは真つ先に心春の元へ行く。

「心春。」

「何？シン。」

心春は明るく言った。

「あの男と何を話した？」

「えっ？ああ、黒崎君？私が消しゴム落としたの拾ってくれて……
・これからよろしくって言うてくれたから私もよろしくって……
つてシン？」

うつむくシンに心春は神妙に訊いた。

（クソ。俺が心春の落ちた消しゴムにも気付かないだと……？最悪だ！！全てあの男の……。）

いつも心春を観察しているシンは心春がペンを落としたなら誰よりも早く拾いにいってやる。それが兄の掟だ。

「黒崎 ー！」

「何？」

めずらしくシンは声を荒げる。

「ちょっと来い。」

二人はしばらく睨み合う。

「いいぜ。」

二人はそろそろと教室を出る。

(やつ・・・やつべー!)

雪花はそれを必死に追いかけたのだった。

3 死神と化け物

二人が向かったのは屋上だ。古びてはいるがこの立派な学校は雪花も屋上が気に入っていたのだが・・。

（何で！！俺の気に入ってる場所でやっべー修羅場が始まるうとしてんだ！！）

雪花は走っていたのだが、もう二人はとくに屋上についていた。なんて足の速さだ。いや、中学のときからシンと一緒にだった雪花はシンの足の速さは知っている。しかし、それについていく転校生・・。

（何者だあ？あいつ。）

そう思いながら雪花は階段を上ったのだった。

「何？なんか用？」

耳をほじくりながら黒崎はどうでもいいようにシンと対峙していた。

「お前はどいつつもりだ。」

「はあ？」

「お前は人間ではないな？」

その言葉に黒崎はニヤリと笑う。

「何だ。妹さんのこと言われると思ったのに・・。案外、心配性だな。」

「心配性？そうではなかったら心春を守れないだろう？お前のような輩から。」

キッとシンは目の前の男を睨む。

「俺は馬鹿ではないからな。お前を見て感じたよ。お前とは一生相容れないとな。」

俺もだと黒崎も同意する。そう感じたのだ。こいつは危険だと。心に近寄らなくても、敵だと。多分、本能というやつだ。

「そついうてめえも。人間じゃないだろう？」

「ああ。化け物だよ。でも、死神よりマシだ。」

黒崎は動揺した。隠せない。そうだ。こいつは。

「いいか。一。お前は死神だ。」

英雄と呼ばれる父は自分にそう言った。生まれたときからそんなことわかってる。

「俺達は現世のある町に行く。そこで虚退治だ。わかってるな。」
うん。と頷く。

「そこで、闘ってはいけねえ奴がいる。そいつから霊力を感じるだろうが闘うな。絶対な。」

何故だ。と訊いた。

「それは、死神でも、人間でも、虚でもねえからだ。そしてそいつはお前と絶対に出会う奴だ。避けては通れねえ。いいか。そいつの名は――。」

「井上 心。アランカルと人間の子か……。」

『虚閃』

不意にシンは黒い輝きを放った。それは儚いもの……。

「俺の虚閃は効かないか。さっさと消えろ。死神。」

今度は何もしなかった。ただ睨むだけ。虚閃を防いだ剣を。

「てめえとは闘わない。今日は帰るよ。シン。」

「逃げるのか。」

「そう思つとけよ。じゃな。」

黒崎は背を向けてシンから離れていく。その背を睨むと雪花の顔が歪んできた。

「何だ。雪花。」

「心配して見に来てやったんだよ！―てか、てめえら足はやすぎ！
！本当に人間かよ。」

「人間．．か。」

人間に生まれていたらどんなによかったか。

「で？心春ちゃんのこと、どうだったの？脅した？」

「あいつは厄介だよ。本当に。」

もしかしたら心春を守れないかもしれない。あいつの目的が俺達なら。しかしあいつは闘わないと言った。ではもう危害は加えないということか．．。

「シン？」

「雪花。調べてくれ。あいつのことを。」

シンがあまりにも真剣な顔をするので雪花は言葉に詰まった。自分でも見とれているのかもしれない。彼の顔を。

「わかったよ。親友だからな！」

「誰がお前と親友だ。お前を俺の奴隷か舎弟だ。対等な訳がないだろう。」

「ひつでー。本当にお前はツ・ン・デ・レ だな！」

「つんでれ？俺の辞書にそんな言葉はないな。早く行くぞ。下僕。心春に何かあるかもしれんからな。」

「きくー いちいちムカツク野郎だな！」

二人は教室に帰った。

「ね。ウルキオラ。」

「何だ。仕事中だぞ。」

織姫は暗いような明るいような顔をしていた見たことが無い顔だ。

「どうしたんだ？」

ウルキオラは織姫の髪にキスすると愛おしく妻の顔を見た。

「黒崎君がね。帰ってきたみたい。この町に。」

その時、ウルキオラが動揺したのを織姫は知らない。織姫はそれ以上で動揺していた。

3 死神と化け物（後書き）

なんか時間感覚が・・・わかりません。

4 嬉しさの犠牲

ウルキオラは織姫を抱き寄せた。それは強引ではなく包み込むように。

「別にあの男が帰ってきてても俺はあいつと戦うつもりはない。親しくはなれないだろうがな。」

「うん．．．ウルキオラは黒崎君のことを憎んでる？」

アランカルを。ウルキオラを一度倒した男。

「．．．いや。あいつと戦って俺は心がわかってお前を愛する事ができる。その点は感謝している。それにお前はあいつと戦ったら泣くだろう？」

織姫はためらったようにうなずいた。

「俺はお前を泣かせたくない。でも、あいつがもしも、お前を傷つけたら．．．。」

「わかってる。ありがとう。でもね、心配なのはシン。」

「心？」

「黒崎君の子供はシンと同じクラスみたいなの。シンは自分がなになのかわかってるから．．。」

「そうだな。今夜、俺が話す。」

鐘が鳴った。授業は終わりだ。

「帰ろうぜ！シン！」

後ろから雪花が声をかける。

「黙れ。一人で帰れ。」

「ええ〜？？冷て〜！！」

「俺は、心春と帰るんだ。誰が貴様などと。」
「そついうとシンは心春の元へ行く。」

「心春。一緒に帰ろう。」

「あつ、シン。ごめん。今日は美緒と寄り道して帰るから。お母さんにも言つといて。」

シンは硬直した。それを遠目で見ていた雪花は吹き出した。

「そついうことだ。一人で帰れ。行こう。心春。」

「う、うん。」

美緒はシンに一睨みするとさっさと行ってしまった。

雪花はプルプル震えているシンの肩を叩いた。

「はい。フラれたあゝ。帰ろうぜ。」

「クソッ！何なんだ、あの女は！！ゴミの分際で心春にくつついて！！心春の友達でなかったらとくに息の根を止めてやっていたものをっ…………！！」

シンは憤慨した。雪花は口笛を吹き、二人は歩く。学校をでたところで否定をした。

「でも、相原はお前が対処できないところでずっと心春ちゃんを守ってきたんだぜ？それにシンにあんな態度できる女は相原しかいねえし。」

確かに彼女は小学校の時から心春と一緒にいて守ってくれている。

「今日是最悪な気分だ。」

「な。シン。」

「…………。」

「あの転校生って何者？」

シンは足を止めた。

「雪花。」

「ん？」

「お前．．．霊力があるんだな。」

「はあ？どして？」

「ずっと空ばかり見ている。」

空には黒いデカブツの虚がいた。それと闘っている死神もいた。

「．．．．見えるっちゃあ見える。これがレイリヨクってヤツなの？」

「いつからだ。」

「ずっとーと昔から。お前が人間じゃないのも知ってるよ。なんか変なの感じるもん。転校生も人間じゃない。」

「知っててどうして俺といた？俺は独りでよかったのにお前は離れなかった。」

雪花は困ったように笑った。

「そつだなあ。俺はシンのこと怖いともなんとも思わねえし。ほかのレイリヨクがないやつは押し潰されそうなんだよ。あの女子どもは馬鹿だから気付かないだけ。俺はさ。シンといたかったんだと思うよ。」

シンは目を見開いた。嬉しいのか、よくわからない感覚だ。

「シンは見ててあきないし。楽しいしな。」

「雪花．．．．。」

「だからさ、レイリヨクがあってもなくてもきつと俺はシンの友達でいたかったんだよ。」

「気持ち悪い。奴隷が調子に乗るな。」

そういうと先にいってしまふ。雪花は笑って追いかけた。雪花にはわかっていたのだ。シンの顔が赤く染められていたことに。

「ただいま。」

「あ、おかえり〜シン。心春は？」

「．．．友達と寄り道だそうです。お母さん。父さんは？」

「父さんはリビングで休んでるわ。」

「そうですか。」

シンはリビングに向かった。

「父さん。」

ウルキオラは目を細めて反応した。

4 嬉しさの犠牲（後書き）

字間違いは勘弁w

5 宿命の輪廻

「父さん．．．話してください。」

ウルキオラはシンを横目で見る。

「何をだ。」

「黒崎一．．．。父さんを倒したことがある男の息子でしょう？
俺は虚閃をつかいました。」

「虚閃を？」

「はい。あいつは俺の敵です。心春に近づく輩は全て叩きのめしました。だけど、今度ばかりは違います。あいつは死神だ。」

ウルキオラは少し息をはくと、眼鏡をはずした。

「いいか。心。」

テレビを消す。

「お前に俺のことを話したのは、お前が俺に似ているからだ。虚閃を教えたのも、お前自身と心春を守るためだ。だけどな。お前は。」
ウルキオラはシンの肩をつかむ。

「化け物じゃない。」

シンの思考はとんだ。

「俺は化け物だ。だから死神と闘う宿命だった。だが、今は人間のつもりだ。人間のように仕事もなんでも人並みにこなしてな。だから、俺はもう闘わない。意味のない闘いは。」

「意味．．．？」

「守るためだ。お前も。守るんだ。大事なものを。それならどんなことをしても問題ない。相手がなんだろうが闘うだけだ。でも殺戮を楽しむような破壊はするな。つけこまれるぞ。」

「．．．．父さんは、なんなんですか．．．．？虚って何ですか。」

「俺はアランカルだ。哀れな虚だ。心。あいつは心春に絶対近付けるな。」

「何故ですか。」

「心春の霊力は本来強い。が、俺は心春が怖がらないように霊力を抑えて、虚を見ないようにしてきた。だがあの死神の息子が近くにいるなら霊力はあがり、もはや俺が抑えていた霊力も全て解き放つ。いやでも虚が見える。」

「わかりました．．．。父さんは憎みますか。そのあいつの父を．．．。」

ウルキオラは苦笑した。

「憎まない。心春を傷つけたら殺すかな。」

「それこそ、殺戮じゃないですか。闘わないって言ったのに。」

「それとこれでは話が違う．．．。心春があと5分で帰ってくるな。テレビをつけよう。」

「何故わかるんですか！？帰ってくる時間なんて．．．。」

驚いてシンは聞いた。

「足音を聞けばわかる。あと気配だな．．．。心。あと虚にも気をつける。お前には虚の血が流れていても人間なんだからな。あと、質問の答えだ。虚は何か。それはお前が見つける。いいな。」

「はい。ありがとうございます。」

5分後。

「たっだいまあゝ。お母さん！！ご飯はゝゝ？？」

「ハンバーグよ。今から用意するから着替えてきなさい。」

「はあいゝゝ！！！」

心春はバタバタと駆けていく。

「全く。心春は可愛いな。」

ウルキオラは小さく笑ってニヤニヤしている。織姫は内心、苦笑した。全く、この人の親馬鹿と叫びたがら呆れる。

「はいはい。ちゃんと手伝ってよ」。シン。悪いけど玄関に行つて、靴並べといて、あの子がめちゃうくちゃにしたから。」

「はい。」

シンは玄関に行き、靴を並べた。その時、父の言っていた事が頭によぎった。

自分は化け物と人間の子。。。あいつは死神。何故か、自然に殺意がわく。多分、アランカルや虚だったらもつとだろう。父は何食わぬ顔で殺意を殺しているのだ。心春を守りたい。それは絶対だ。だけど俺は闘うことを制御できない。もしかしたら心春は悲しむかもしれない。

（俺は。。。どうしたらいい？）

ピンポン。

（誰だ。）

扉を開けると今、一番会いたくない人物がたっていた。

「よつ。シン。」

「ななななつ。。。。」

シンは絶句した。オレンジ髪 of 転校生。。。。

「遊びにきた。飯食わせてくれ。」

「馬鹿か！！貴様は！！貴様は死神だぞ！？俺はアランカルの血をひいているのに何故貴様と飯を食わなきゃならんだ！！しかも人の家にあがりこんで飯を食わせるだ。。。？非常識だと思わんのか！馬鹿！！」

シンは息もつく暇もなく怒鳴り散らした。

「だって、メシ買う金もないし。俺、今日話した奴つてお前だけだし。」

「貴様つ。。。。」

「なあにシン？お客さん．．．って黒崎君！？」

心春が玄関に来た。最悪だ。先ほど、父に言われたばかりなのに。
「よつ。井上。飯食わせてほしいんだ。」

すると、心春の顔が輝いた。

「うん！いいよ！お母さんがハンバーグ作りすぎたって言ってたし！シンが友達連れてきたのも初めて！！私も黒崎君と話したいし。どうぞ、入って！」

「おつ邪魔しまあす〜！」

「ちょ．．．。」

シンは止めようとしたが、心春が黒崎を連れたため止められなかった。

シンはリビングにいったら父に瞬殺されるだろうと思った。

5 宿命の輪廻（後書き）

一君。非常識

6 最後の晩餐（前書き）

最後って・・・おおげさです（笑）

6 最後の晚餐

「心春？どうしたの？」

「お母さん、黒崎君と一緒にご飯食べてもいい？」

「黒崎君．．．？」

織姫は入ってきた一に言葉を失った。本当にそっくりなのだ。その時、ウルキオラは持っていた箸をぼきと折ってしまった。

「すみません。父も母も今日はいないので．．．一人で食べようと思ったんですが金もなくて．．．知り合いといえばシン君だけで．．．。」

「あつ。そうなの。私は全然構わないけど．．．ねえ、あなた？」

織姫は笑顔でウルキオラを見た。ウルキオラは頑張って笑顔をつくる。が言葉が何も思いつかない。今すぐ叩き出したい。

「ねえ。お父さん。いいよね？黒崎君困ってるし、シンの友達だし。」

心春がウルキオラの手を握って言った。ウルキオラはいいと言ってそれは幸せそうだった。

（父さんー！！！！許さないで．．．。）

シンの心の叫びも届かず、最後の晚餐は始まった。

「ねえ。おいしいでしょ？お母さんのハンバーグ。」

黒崎は心春の横に陣取った。シンのいつもの席は黒崎にとられたのだ。

黒崎はおいしそうに食べながら。うんと頷いた。

「お母さんは料理が上手なんです。俺、こんなにうまいハンバーガー初めてです。」

「あら。そう？嬉しいなあ。」

三十代とは思えない笑顔を織姫は浮かべた。シンは父を見た。それはそれは恐ろしい顔だった。表面的には無表情の父だから他人にはわからないだろうが、シンにはわかった。

「ねえ。黒崎君はどこから来たの？前の学校は？」

「ああ。俺は高校とか行ってなかったんだ。別にどうでもよくってさ。まあ親父がうるさいから高校はいった訳。」

「そうなんだあ。じゃあいつぱい思い出作ろうね！」

笑顔で言う心春はとても可愛い。そうだ！とその時心春が声を張り上げる。

「黒崎君、今日、泊まっていけない？シンの部屋広いし、全然窮屈じゃないよ。」

ウルキオラとシンは絶句した。この場を乗り切るのもできるかどうかかわからないのに泊まるだ！？

「それは・・・心春。俺はコイツと友達でも何でもない。家に泊めるのは人がよすぎる。」

「ええ？だって雪花君でさえ家に来ないシンの友達よ。友達でしょ？二人はなんか似てるもん。ね。いいでしょ？黒崎君はどう？」

「うーん。別に家に帰ってもやることないし。そちらがいいなら。ね。お父さん。」

「貴様にお父さんなどと呼ばれたくない。調子に乗るなよ。糞餓鬼。」

ウルキオラは思わず声にだしてしまったようだ。シンは凍りついた。心春は父のことをとても優しい父だと思っているのに。

「ふう・・・。井上。やっぱ俺帰るわ。すみません。ご馳走様でした。お母さん。お父さんもありがとうございました。」

黒崎は頭をさげると玄関まで行ってしまった。

「いいの？本当に？」

心春はとても残念そうな顔をした。

「ああ。迷惑だし。また明日な。井上。」

黒崎は扉から出て行く。心春はそれを見つめたが、シンが急いで玄関から飛び出ていった。

「シン．．．？」

「黒崎！！」

黒崎は振り向く。

「貴様．．．どういふつもりだ。何故こんなことを．．．。」

シンは殺気をぶるける。

「うーん。そうだな。挑発した方がいいと思ってよ。お前等親子．．

．．。アランカル。クアトロ・エスパード。元藍染の忠実な部下。ウルキオラ・シファア．．．。親父が言っていたのとは少し違うな。あんな無表情なのに人間らしさがある．．．。」

「貴様ツ．．．何が言いたい。」

「俺は死神。てめえは化け物。俺は化け物と闘って殺すことを目的にこの街に来た。この意味わかるよな？」

「．．．．．。」

「俺は、てめえも。てめえの親父も。てめえの愛しい妹も殺す。それが俺の仕事だ．．．残酷かもな。どこかの少年漫画だったらこんな直接的な言い方はしねえかもしれねえ。でも。俺は宣戦布告したぜ？」

「親父は関係ないだろうが！心春は虚も見えないんだぞ！？ふざけんのもたいがいしろ！親父は今、アランカルじゃない！人間だ！」

「．．．．人間？笑わせんな。あいつらは人間なんかじゃねえ。

化け物だ。俺は絶対に虚に情があるなんて認めねえ！」

黒崎もシンに負けなくらいに叫んでいた。

「俺は虚をぶっ潰す。小さい頃からそうやってしてきた。それはずつと変わらねえ。」

「俺は、人間だ。化け物じゃない。だが、貴様が俺を潰すならいつでもかかって来い。もし、俺より先に心春をやってみろ。絶対に貴様の息の根を止めてやるッ！」

「ああ。わかったよ。じゃあな。」

黒崎は背を向け帰っていった。シンは拳を強く握った。長い爪が肉に刺さって血が溢れ出す。

（守ってやる。そしてあいつを殺してやる。）
そう誓いながらシンは家に入った。

おまけ

「心春．．．？お父さん。あのな．．。」

ウルキオラはてんぱった。心春に嫌われてしまうかもしれない。

「お父さん．．。」

「何だ？」

「黒崎君。私と仲良くなってくれるかな？」

不安そうな顔で心春は言った。ウルキオラは優しく言ってやる。

「大丈夫だ。心春を嫌うはずがない。大丈夫だ．．．。」

後半はかすれて聞こえなかった。

織姫は祈るように手を胸にあてた。

「黒崎君・・・。」

心春に聞こえないように織姫は言った。

6 最後の晩餐（後書き）

やっと一日終わり・・・。
おまけは本編入っているのか？

7 鎖の螺旋

心春は朝早く目覚めた。何故か頭がさえていた。黒崎が転校してきて一週間がたっていた。もう11月。結構寒くなっていた。

（．．．5時かあ。）

うちの家は基本的に朝に弱い。だからこんな時間に誰も目覚めていない。いつも何かと完璧に全てこなす兄も朝には弱かった。心春はベットから起き上がり、制服を着る。お腹は空いていなかった。窓の外を覗くとまだ暗い感じだ。

心春は外に出た。まだまだ学校に行く時間ではないのだがなんとなく出たかった。部屋でおとなしくしていたら心が暗くなる。

「初めてだなあ。こんな早くに外に出るの．．．。」

あたりには誰もいない。たまには誰にも見られないこの場所がいいと思った。

心春は学校の方向に歩いていた。何故かはわからないが学校に行ってしまう。

心春はうつむきながら歩いていた。風がひどく冷たい。

「これは．．．。」

何度も感じたことのある感覚。雲が割れるような．．．．何かを感じた。心春は感じた方を向いた。なにもなかった。

（また．．．何だろう？）

心春は一週間前くらいからこの奇妙な感覚に怯え、悩んでいた。日に日に何かをみてしまうような気がして怖い。

しかし。誰にも言えなかった。シンにも心配かけたくない。

（きつと．．私の気のせい。だから大丈夫。）

自分に言い聞かせ、心春は歩いた。

「井上！」

振り返るとオレンジ髪の少年がいた。

「黒崎君．．？どうしたの？こんな早くに．．。」

「井上こそ。どうしたんだ？こんな早くに。」

「えつと．．なんか家にいても暇で。もう二度寝もできそうになりから。」

心春は必死で笑顔を作る。

「そっか。でもまだ明るくねえし。家族が心配するだろ。家まで送るよ。」

「ううん。いいの。学校の用意はもってきたし．．。黒崎君も答えて。どうしてこんな早くに？」

「．．．．井上がいる気がしたから。」

「えっ？」

驚きすぎて変な声をだしてしまう。顔も熱い。

「何でもねえ！んじゃ。話でもするか。」

黒崎は公園を指差す。心春はぎこちなく頷いたのだった。

二人はブランコに座った。心春は重い口を開けた。

「どう？学校は慣れた？」

「うーん．．。まだ一週間だしな。だけど井上んちに夕飯食わせてもらった以来、シンの奴。まるつきり話してくれねえからな！」

心春は少し苦笑した。

「シンは．．人見知りっていうか。あんまり人と関わりたくないんだよ。私には優しいけどほかの女の子は嫌いとか言ってたし．．シンはね。妹の私が言うのもなんだけどかっこいいからモテるんだけど女の子達が私によく頼んでくるの。ラブレターとか色々さ。私はシンも恋愛とかすればいいのにーって思うけど、でもやっぱり寂しいんだよね。シンとは生まれたときからずっといるもの。クラスも離れたことないし．．私の一部っていうか。だけど私．．ずっとシンに頼りつきりで自分が情けない。だからシンに迷惑かけたくない。私も強くなりたいなあ。」

「井上．．．。」

「ごめんね。自分の話になっちゃった。黒崎君？」

黒崎は何故かうつぶんでいる。

「井上。」

「．．．？」

「お前。幽霊って信じるか？」

「ゆづれい．．．？」

黒崎は真剣な顔をしていた。心春は唾を飲み込んだ。

「信じるよ。」

本当に信じる。そう思った。

「そっか。」

黒崎は立ち上がり空を見上げる。もう朝日が見えるころ。

「綺麗だな。」

「うん。」

二人はしばらく朝日を見つめていた。黒崎は心春の横顔を見る。

「井上．．．。」

「なあに？」

「もし、困ったら自分で抱え込むな。シンに迷惑かけたくないなら俺を頼れ。」

心春は衝撃を受けた。男の子はシンにびびったのか心春に話しかけ

るどころか近寄ろうともしなかった。心春は仕方が無いと思っていた。シンは自分のために何でもしてくれたから感謝していたし、なんとも思わなかった。．．．ふりをしていただけかもしれない。しかし、彼は心春をこんなにも見つめてくれる。ずっと目を合わせてくれる。

（思ったら．．．こんなに長く話を男の子としたの初めてかも．．．）

告白はよくされたけど話したことも無い相手ばかりだった．．．このとき、心春は恋に落ちたことを知るのはまだ先の話だった。

シンはいつもと同じ時間に目覚めた。支度をすれば充分学校に間に合うという時間。シンはトイレに行ってからリビングで朝食を用意してくれている母に挨拶をした。父はまだ眠っているのだろうか、姿はない。

「お母さん。おはようございます。」

「ああ。シン。おはよう。もうご飯できてるから。父さんはいいから心春を起こしてきてくれる？」

「はい。」

心春を起こしに行くのはシンの担当だった。シンは心春の部屋まで行き扉をノックする。

返事はいつもない。

「起きろ．．．．．心春？」

心春の姿がどこにも見つからなかった。シンは本気で玄関までダッ

シュした。織姫は目をふせてシンが行ったのを感じた。するとウルキオラはリビングに姿を現した。

「あの糞餓鬼．．．。やってしまったほうがいいかもな。」

「物騒なこと言わないで。黒崎君の息子さんよ。絶対に駄目。子供の命を奪われるのがどれだけ辛いか。いい？ウルキオラ。あれはあの子たちの問題よ。心春もシンも一君も。あの子達は死神と虚の宿命の闘いの中を彷徨ってるの。私達みたいに。誰かが干渉してもっとひどくなる。あなたや私が一君を殺したら黒崎君は私達を殺しに来る。そうでしょ？全てが憎しみになる．．．あなたは絶対に干渉しては駄目だよ。」

織姫はウルキオラを見つめて言いきった。ウルキオラは躊躇せずに織姫の唇に軽くキスしてテレビをつける。

「わかってる。俺は守ることをあいつに託した。俺達は見てるだけでもいい．．．。」

織姫はどこか切なそうに頷いたのだった。

7 鎖の螺旋（後書き）

長くなるのでこの辺で・。

8 シャーマニズム（前書き）

PSPで字間違いを編集したら大変なことに・・・全部消しました
>
<

8 シャーマニズム

シンは心春を捜した。しかしどこに行ってもみつからない。気がつく
と学校の前にいた。すると心春の後ろ姿があった。横にはあの男。
「心春！」

「シン……。」

心春は振り返ると申し訳なさそうな顔をした。

「黙ってどこに行っていた！心配したんだぞ。しかもなんだこの男
は！何故一緒にいる？」

「ごめん。黙って出て行ったのは謝る。けど、私が何しようがシン
には関係ないよ！ほつといて！行こう！黒崎君。」

心春は怒っていた。シンは硬直した。彼女が怒っている姿など見た
ことが無かった。

「井上……いいのか？」

「いいの。私はシンに迷惑かけたくないの。シンは自分の幸せを考
えればいいの。」

「おっはよう！シンくん。」

雪花は机についているシンに挨拶したが返事は返ってこない。

「テンションひくいねえ！いつものことか。どうせ心春ちゃんのと
だろ？」

「うるさい。黙れ。」

「おお。こわ。せっかく黒崎のこと調べたのに。苦労したんだよ。」

あいつ学校とか行ってる形跡がなくてさ。ええとゝ実家はクロサキ医院。まあ父方の親父がまだやってるらしいけど．．．これだけしかわかんなかった。な？聞いてる？聞いてます？シスコンのシンくん？」

返事はなかった。

雪花は遠目に心春を見て溜息をつく。

「なるほどねゝ。いいの？心春ちゃんに近付く輩は叩き潰すんだろ？くつついてるよ？」

なおも答えない。

（これは重症だな。俺の出番かな。）

またまた雪花は溜息をついたのだった。

休み時間。雪花は心春に声をかけた。

「心春ちゃん。ちょっといい？」

「？」

心春は何かわからず雪花について行っただった。

ここは誰もいない屋上だった。

「黒崎と仲良いの？朝からずっと一緒にいるみたいだけど。」

「うーん。今日ね。朝早く目が覚めて、外に出てみたら黒崎君が偶然いて．．．。」

（偶然．．．ねえ。）

「話してる内に楽しくなって．．．。」

「惚れた？」

心春はぎよつと顔が赤くなった。

「いや。あの．．．好きとかそんなんじゃない．．．。」

「ふゝん。心春ちゃんは人を好きになったことある？」

「告白はされたことあるけど．．．好きになつたことはないかな。」

「そっか。」

「雪花君はあるの？」

「あのねえ。男つてのは女もそうだけど、幼稚園の時から恋してんの。色々乗り換えたりすんの。」

「へー。そうなんだ。雪花君も好きな子とかいるの？」

「いるよ。」

「へー。だれだれ？乗り換えたりしたの？」

「乗り換えたことなんかしたことはないよ。ずっと好きな子はいるよ。」

雪花は切なそうに目をふせる。

「ずっと？告白しないの？」

「言っちゃったら、壊れちゃうからさ。」

雪花は切ない笑顔を見せる。

「何が．．．？」

「今までと、この先さ．．．さっ戻ろう。」

「うん．．．。」

「あつ。大事なことひとつ。」

雪花は人差し指一本立たせる。

「？」

「シン。君が思ってるような感情はないよ。」

「えっ？」

「シンは君が一番大切なんだよ。君のためなら命なんかいつでも捨てる。今どき、こんな兄貴めんどくさいかもしれないけど、大事にしてやって。」

雪花は背を向け教室に帰っていく。

「何をしていた。」

不機嫌な顔でシンは雪花を睨む。

「いい加減それやめろよ。マジで心春ちゃんとられるぞ。殺されるかもしれない。」

「なんだと．．．。」

「心春ちゃんとちゃんと話せ。どこでもいいから。わかったな。」

雪花は眠ってしまった。授業中はいつも寝ている。シンは真っ直ぐ黒崎をみすえると思った。心春はあの男が死んだら自分を許さないだろうと。そして心春に憎まれたならば自分は生きれない、と。

「ただいまあゝ。」

「おかえり。何か言うことは？」

「ごめんなさい。勝手に出て行って。」

「いいわよ。」

織姫は微笑む。

「ねえ。お母さん。」

「ん？」

「私。黒崎君のこと好きになっただかもしれない。」

驚くことなく織姫はそうと頷いた。

「でも。よくわからない。好きだけどうしたらいいのか．．．。」

「そうね。告白も一つの手で待つのもいいかもしれないわね。」

「うん。なんとなくわかる。けど．．．。」

「シンのこと？」

「うん。」

「私。ずっとシンに頼りきりだからシンにもうこれ以上迷惑かけたくないの。だから．．．。」

「だからシンから離れるのね？シンはどうなるの？シンはあなたと
いたい。あなたがすごく大事で大好きだから。あなたといること
がシンの幸せなのよ。」

「本当に？」

「ええ。昔ね。あなたはよく熱を出したの。風邪をよくひいてね。」

シンはずつと言ってた。どうしてこの子なんだろう。どうして自分
じゃないんだろう。どうしてこの子を守れないんだろう。って。
シンはあなたのそばを離れなかった。」

「……………」

「だからシンの気持ちも考えてあげて。いい？」

「うん。わかった。すっきりした！あつ。お母さん。明日授業参観
があるの。」

「えっ！？授業参観！？いきなり？」

「うん。先生かなりいい加減で手紙くばるの忘れてたんだって。来
るの？」

「あの人が行くから。行くわ。」

「そっか。私。着替えてくるね。」

心春は自分の部屋へ向かった。

着替えているとき無性に悲しくなった。自分はシンが大好きだった。
いつも一緒にいてくれるシンが。でも永遠に一緒にはいれない。そ
れがわかっていて悲しくて。それなら自分から離れてしまおう
と思った。でもそれは自分のためではない。今度は自分に腹が立
った。

「心春。いいか。」

シンの声がドアの外でする。

「どうぞ。」

「心春……………」

二人は目を見合った。黒い碧眼の二人の目が合う。

「俺はどうしたらいい？教えてくれ。」

「私が悪いんだよ。シン。ごめんね。」

悲しそうな心春を見てシンにはわかってしまった。自分は自分のために心春を守ったのだ。心春のためじゃない。自分がしたいからだ。彼女は拒絶する権利がある。

「私は自分のことしか考えてなかった。だから私はシンにお願いする。」

「.....」

「自分のために自分がしたいことをしてほしい。それを悪く思わないで。私は拒絶なんかしない。私はシンの妹だから。私はシンの幸せを想うから。」

彼女の笑顔は嘘なんかなかった。彼女は自分の生き方に何も言わないのだ。彼女は誰かのために犠牲になるのかもしれない。

（俺は.....幸せだな。このままでいい。だが。あの男を殺したら――。）

「心春。約束する。俺は永遠にお前の兄だ。なにがあってもだ。」

全てを破壊しても。大切なものさえ壊しても。彼女だけは守る。そのための力。

「うん。ね。シン。幽霊って信じる？」

「は？」

「信じる？」

シンはためらってから頷いた。

「信じるよ。」

奇妙な感覚を言うのは近いうちだろう。それでも心春は怖かった。真実を知るような気がして。

「メール？」

雪花は携帯が光っているのに気がつく。

『俺はあの男を殺すだろう。だが自分も死ぬ。心春が悲しむだろうから。貴様には礼を言っておく。』

「初めてのメールでこの内様かよ！」
と独り言でつつこむ。

「純粹だなあ。人間は複雑だよ。」

人間なのに虚が見える自分を呪いそうだった。

9 授業参観（前書き）

どうしても授業参観ネタがやりたかった・・・。

9 授業参観

「何。授業参観？」

ウルキオラは織姫の言葉に振り返った。

「うん。明日ね。行くの？」

「当たり前だ。今回は心春も来てもいいと言っているんだろう？病院は一瞬閉めれば問題ないだろ。」

「そうだけど．．．。」

「何だ。俺が行ってもいけない理由でもあるのか？」

ウルキオラは目を輝かせているので織姫は諦め、もう何も言わなかった。

「おっはよーシン！あれ？昨日と変わらずテンションひくいねえ。」

シンは重い雰囲気で机についている。昨日よりも落ち込んで見える。「どしたの。メールくれたじゃん。ふっきたんだろ。」

「．．．．．今日が何の日か知っているか。クソ花。」

「雪花です！あ？今日って．．．ああ。授業参観．．．．．って！授業参観！？」

雪花の全身の力が抜けた。ヘナヘナと自分の椅子に座る。

「ま、まさか．．．お前の父ちゃんと母ちゃん来る．．．？」

「心春が拒否しなかったからな．．．。来る。」

「げえええ！??マジかよ．．．。」

雪花が絶句しているのには訳があった。

シンたちが小学1年生のときだった。その日は子供たちが待ちに待った授業参観の日だった。授業が始まると共にあの夫妻が現れ、子供の母親はウルキオラにみとれ子供をまったく見ず、また子供の父親は織姫にみとれ、あげくのはてにはクラスの全員がこの夫妻に心を奪われてしまった。その担任は女の人で完全に目がハートマークであった。結果、授業がまともにできずに終わってしまった。心春は気付いたのかわからないが授業参観にもう二人を呼ばなかった。それでも中学校にあがった時もう大丈夫だろうと呼んだが結果は全く同じであった。

「なんで呼ぶんだよ！？中学の時なんか、隣のクラスからも見に来る親がいて大変だっただろうが！もう俺ら高校生だぜ？中学の頃より悪くなるって！」

確かに歳が上がることに異性を気にするのが人間である。あの二人にいろんな虫がたかるのは目に見えている。

「俺にあの人を止められる訳が無い。お前がいけ。ゴミ花。」

「ゆゝきゝばゝなでーす！！俺にできるか！死んだほうがマシだ！ボケ！」

「なら騒ぐな目障りだ。」

「何騒いでるの？二人とも。」

不意に心春が現れた。雪花はビックリしすぎて椅子から落ちた。

「いやいや・・・あのねえ・・・心春ちゃん。なんでもないのよ・・・？ホラ。今日授業参観だから舞い上がっててさ。」

「そうなの？今日ね。お母さんもお父さんも来るんだって！ねえ。シン？」

「あつ・・・そうだな。」

シンはぎこちない返事をした。その時黒崎が現れた。

「おーっす！」

「あつ。黒崎君おはよう！ねえ。黒崎君の両親は今日来る？」

「ん？ああ。親父だけな。まあ俺のためじゃねえけど。」

（俺のためじゃない・・・？）

シンは不思議に思ってから思いきり睨んでやった。

なにはともあれ。時間は進むわけで・・・。

昼休み

「うわゝ次かゝもう俺絶対寝る！起こすなよ！シン！」

「貴様。主がおきているにもかかわらず寝るつもりか。許さん。絶対起きてろ。」

「はあゝ！？いつも何も言わねえくせに！なんだよ！てか誰が主だっつーの。」

「いいから起きてろ。」

シンは静かに言って腕を組む。雪花は昼飯を食べながら真剣な話に話題を変えた。

「マジなのか？あいつを殺して、自分も死ぬって・・・。」

「ああ。俺は心春に憎まれたら生きる価値もなくなる男だ。しかし今は時期ではない。あいつはまだ仕掛けてきていない。父には近付けるなと言われているがな。」

「じゃ。近付けさせなければいいじゃん。何で許してやってんだ？」

「・・・心春が話したいと思っているからだ。俺は今まで心春のために守ってきた・・・そう思っていた。だが違う。俺は俺がやりたいことをした。心春が俺に望んだことなど一度もない。だが俺は守らなければならない。心春をな。」

「意味わかんないねー！心春ちゃんのために守ってんだろぅが！ま

あたしかに自分の自己満足かもしれないよ？でも守れるのはお前だけだろ？」

「……………」

鐘が鳴った。

「まあ。心春ちゃん次第だろ。心春ちゃんが自分の存在を知ってどう行動するか。それをお前が導けばいい。」

シンは何も言わず、授業は開始された。

数十分前。

二人は腕を組み学校の廊下を歩いていた。

「さっきからジロジロ見られるような気がするのだが……気のせいかな？」

「そうね。気のせいよ。」

織姫は人々の視線は全てかっこいい旦那に向けてだと思っているので無自覚であった。女が好きな男の目は織姫にいつていることも全く知らない。

ウルキオラはファッションについては全く無頓着である。そのため似合う服を織姫が選んで買ってくる。言うなればすべて織姫に任せられている。

「まだ授業は始まらないみたいね。ちらほらご両親がきてるけど。」

「そうか。この学校も変わらないな。」

「えっ！？知ってたの？」

「ああ。お前をさらう時にお前のことは全て調べたからな。」

織姫は顔が赤くなってそのまま何も言わなかった。カシャッ。シャ

ツター音が鳴った。

「チッ。何やらここは気分が悪い。屋上に行くぞ。」

「えっ！は、はい！」

屋上に行くと言った。誰もいないはずだった。

「黒崎一護か。」

「黒崎君！？」

オレンジ髪の男性がいる。死神の姿ではない。

「よう。久しぶりだな。井上。ウルキオラ！」

笑顔で一護は言う。

「織姫。黒崎と話がしたい。離れていてくれるか？」

織姫は何も心配しなかった。彼を信じているから。織姫はうなずき、ウルキオラは前に進み出た。

「久しぶりだな。死神。」

「そうだな。ウルキオラ。」

寒い風が吹く。髪が風にさらわれる。

「貴様に息子がいたとはな。」

「俺もビックリしたぜ。お前に子供がいたなんて。」

「貴様の息子は少々厄介だな。俺の可愛い娘に近付くんだがどういうことだ？貴様のしつけがなっていないのか。」

「うーん。心春ちゃんだろ？知ってる。一は死神だからな。仕方ねえよ。」

「仕方ないだと・・・？笑わせるなよ。黒崎一護。俺はもはやアランカルではない。人間の魂を喰わなくとも生きれる。俺はアランカルもどきだ。子供はもう血は薄くなっているのだ。」

「それでも命令は絶対だ。一はこの町を任された。俺が見るかぎりお前の息子は強いみたいだな。」

「斬魄刀も使えんのに何が強い？貴様ら死神は馬鹿極まりないらしいな。今すぐやめろ。虚なら溢れんほどいるというのに。」

「確かにな．．．でも俺は何も言わない。一が処理するならそれでもいい。まあがんばってくれよ。」

一護は立ち去ろうとした。

「待て。俺は貴様を憎まない。」

「．．．！」

「だがな人間というのは愚かでな、大切なものを奪われたら悲しみは憎しみに変わり憎む者を必ず喰らう。」

眩くようにウルキオラは言った。

一護は何も言わず織姫にあいさつして帰っていった。

「ウルキオラ．．．。」

「心配するな。俺は．．．大切なもののために生きるのだ。昔とは違う。今は．．．闘わなくていい。」

今は．．．壊せていないから。そして守るのは彼の役目で決めるのは彼女だ。

授業が始まったと同時にウルキオラと織姫は入ってきた。例の如く人々は二人を注目し授業どころではなかったのである。雪花は結局熟睡しあとでシンに殴って起こされた。シンは黒崎の父に気付き、彼が強い死神だとわかった。シンは拳を握り締め何か怒りのようなものを感じた。

「一。」

「どうしてきた。親父。浮竹隊長が仕事が多いからしばらくこちらへはよこせないと言ってたのに。」

「行かせてくれたんだ。それより、一。どうなんだ？」

「何が。」

「シンと闘ってみて。」

「．．．生命力を感じた。元々虚にはそれがある。あいつは強い。強い意志を持ってる。」

「殺すのか？」

「わからねえよ。今はな．．．。」

一護は何も言わず息子のおとを付けて家に帰った。

おまけ

「すみません！写真一緒にいいですかあ？」

「サインくれませんか！サイン！」

ウルキオラは女子高生からも母親からも熱い視線をくらい、更にベタベタと彼女たちがよってきてしまった。

（何だ．．この豚共は。俺を何か勘違いしているのか。）

幸い織姫はトイレに行っていたのでやきもちは妬かれずにすみそう
だ。

ウルキオラは長年医者をやっている。なので猫かぶりはできる。

「すみません。俺はそんな身分ではありませんのでできません。」

と言って、微笑をくらわせる。どこかのドラマかマンガのように彼
女達は崩れ落ちた。ウルキオラはその隙をねらい織姫の元へ行くの
であつた。

織姫のいるトイレの前に来ると無数の男達が廊下の隅にいた。ウル
キオラはずんずんと男たちの前に現れ最初は笑顔で言った。後半は
恐ろしい顔で。

「俺の嫁に何か用か？」

「い、いえ．．。」

「俺の嫁に近付いたら命はないと思え。汚い臭いがうつつたらどう
する？ゴミが！」

「す、すいませんでした！！」

男達は騒々しく駆けていった。

「ふん。」

「どうしたの？ウル？」

トイレから出てきた織姫が聞いた。

「何でもない。ただの掃除だ。」

「？」

織姫にたかる蠅は掃除するのが使命だと彼は思っているらしい。

10 真実の絶望

「まただ。」

「何？」

心春は美緒と帰りにカフェに寄りお茶を飲んでいた。季節は11月の最後の日。

心春はお茶をこりと飲んで空を見上げた。もう、はっきり見えるあの黒い生き物。誰かが退治している。遠くてよく見えない。

「まあ、いつか。そろそろ帰ろうか？プレゼント買ったし。」

「プレゼントって本気でそれ渡すの？」

「そうよ。当たり前じゃない。せっかく買ったんだから。」

「．．．．．ずっと思ってたけど心春の趣味わからん。まああなたの父ちゃんだから喜ぶと思うけど。」

心春は何か侮辱されているような気がした。

「どこが変な趣味！？このペンギンちゃんの可愛さがわからないなんて美緒おかしいんじゃないの！」

現物を見せる代わりにチラシを美緒に見せる。美緒は苦い顔をする。

「あんたねえ．．．父親の誕生日プレゼントに安売りの100円ペンギンを誇らしげに見せられても．．．。」

「安売りだから価値があるの！安く手に入れたほうがいっぱいおいしいもの食べれるし。てかこれ元々2000円のやつが1000円になってておじさんにまた安くしてもらったんだから。自慢ものでしょー！」

「あー。はいはい。そりゃすごい。ペンギンちゃんも心春に安く買われて喜んでるよ．．．．．じゃ。」

美緒は背を向けていく。

「じゃって．．．美緒！一緒に帰らないの？」

「ちよっくら寄るとこあんだ。ごめん。また明日ね。」

「うん。ばいばい！」

心春は店を出て家に帰るべく歩きだした。

「うわっ。さむく雪降るかも．．．」

心春は手に息をふきかける。明日は12月1日。父の誕生日だ。

心春はるんるん気分で帰った。

しかし。歩いているのにまるで人の気配がない。心春は何故か人の気配には敏感だった。どこに何人の人がいることもわかる。だが今日は全く感じられない。さっきまで都会にいたからか。

「おかしい．．．。どうして？」

キョロキョロしても誰もいない。後ろを振り返る。誰もいない。諦めて前に向いた瞬間――。

目の前に顔のようなものがある。ひどくでかい。何かの本でありそうな顔。誰が見ても化け物と呼べる生き物。それは何度も空に浮かんでいた黒いでかぶつの生き物だった。

化け物の息遣いが聞こえる。涎をたらして心春をじつと見つめている。心春は恐怖のあまり足が動かなかった。目がひんむくほど出ている気がした。心春は目を泳がし化け物を見た。気が付けば化け物には無数の魂のようなものがついている。みな、助けてくれと叫んで――。

「何なの．．．」

自分でも驚くぐらいに冷静な声が出せた。足は震えているのに頭では恐れていないような。

化け物は自分の長い一本の腕をのばし、その爪で心春の腕を切り裂く。幸い避けることが反射的にできたので制服が破けてすこし血がでただけだった。

心春が化け物を睨み、腕をおさえると痛みが消えた。見ると傷が治

っている。

(どうして・・・?)

何故治ったのかよくわからなかった。しかし完全に腰をぬかしてしまった。化け物はどんどんこちらに来る。

化け物が腕を上にあげる。もう駄目だ。と思ったその時――。心春は瞑っていた目を開けた。自分は死ぬはずだった。

なのに。

目の前に現れた大剣を持つ、黒い着物姿の男。オレンジ髪が目立つ転校してきた少年。

「く・・・ろさき・・・くん・・・?」

少年は何も言わないがその瞬間空気が変わった。風がおこったような感覚。次の瞬間には化け物は消えていた。彼が剣を振り払ったのだ。彼はこちらに向くとすまなさそうな顔をして手を差し伸べた。

「大丈夫か。井上。」

優しいような怖いような。ためらうようにその手をとる。

「黒崎くん。答えてくれる?」

黒崎は背を向けたときに声を出した。

「今のは虚。俺は死神。俺は虚を退治する任務を背負ってる。だから倒した。それだけだ。」

「なにそれ・・・。」

心春は怒りが芽生える。

「なによそれ!!意味わかんないよ!ホロウ???しにがみ???ちゃんと説明して!!」

自然に涙がでる。

「ごめん。俺。お前を傷つけなきゃならない。」

「どういうこと・・・?」

「いずれわかる。」

「待って!」

黒崎はどこかに去っていった。

「おかえり。道中何もなかったか？」

家に帰ると玄関でシンが出迎えてくれた。シンは微笑んでいる。心春は自分がどんな表情かもわからなかった。

「ん？心春？どうした？何で笑ってる？」

「えっ？」

（そうか・・・今私・・・笑ってるんだ。）

「シン。」

「？」

心春はシンに抱きついた。きつく抱きしめる。シンの胸で涙を流す。声を出して泣くのは何年ぶりだろう。

「うつ・・・。つつつ・・・。」

シンは何も言わずに腕をまわして強く抱きしめ返す。離れたくないように。シンは目を伏せて心春を感じる。大事なものがちゃんとある。

気が済むまで泣いた後。心春とシンはシンの部屋へ移動する。

「話したかったら話してくれ。話したくないならそれでもいいから。」

シンは優しく言ってくれる。心春はまた涙を流して重い口を開ける。

「シン・・・知ってる？」

「何を？」

心春はごくりと唾を飲み込む。

「ホロウとしにがみ。」

シンは一瞬思考がとんだ。しかしすぐに戻し、口を開ける。

「知ってるよ。」

「教えて。黒崎君のことも知ってるでしょ。」

「・・・・・・・・。」

「私は何なの？」

彼女が真実を知るときがきてしまった。

11 怖くない

「ずっとね。感じてた。とても悲しいものが私を見ていた。いつからか完全に見えるようになった。黒くて醜いもの……。幽霊になって思ってた。けど違う。もっと恐ろしいもの。そして今日。私は襲われた。その化け物に。そうしたら黒崎君が現れた。死神と名乗って。」

シンは目を伏せた。彼女に知られては嫌なこと。しかし彼女は知る権利がある。誰よりも。

「虚は人間が死んでこの世界にいたいという邪念で生まれる化け物だ。幽霊は人の姿をしている。それはプラスだ。虚はマイナスとなり人の魂を喰らう。そしてプラスをソウルサエティという死神の世界に連れて行くのが死神の仕事で人間を喰らう虚を退治するのも死神の仕事だ。」

「……黒崎君は私を傷つけないといけなかったよ。」

（あの男は……。くそつ。）

シンは拳を太ももに打ち付ける。

「それは……。」

言葉にするのが怖かった。

「俺達が虚と人間の子だからだ。」

心春は目見開く。シンはうつむいて心春の顔を見なかった。何分たっただろうか。数時間はたったような気がした。

「ありがとう。シン。話してくれて。私は普通の子じゃなかったんだね。わかった。だってドジだしめねな私が勉強だけではできてなんか知らないけど運動もできて……。普通じゃないもん。」

彼女はずっと自分が怖かったのだろうか。とても悲しい顔をする。

だから話したくなかった。心春にはずっと笑ってほしいから。

「ご飯食べないとね。もう診察終わったよね。明日は休みにするから結構夜まで診察の人入れるって言ってたけど。下に行こう。」

心春は扉を開けて階段を下りていく。シンは自分の手のひらを見た。そして握る。シンは決めた。父に聞いていなかったことを聞いてみよう。

「ごめんね。心春、シン。遅くなっちゃって。すぐご飯作るから。」
織姫はあわててリビングに駆け込んできた。シンはテーブルを見せる。

「俺達が作りました。メニューは聞いていたので食べてください。」
子供がご飯を作ってくれることなんて初めてだったので織姫は感激した。

「え！ありがとう！二人とも。私より料理うまいんじゃない？お父さんも喜ぶわ。」

織姫は嬉しそうに席に着いた。遅れてウルキオラがやってきた。ウルキオラは何も言わず微笑んで食べる。相当疲れているとシンは思う。

心春も食べ始めたのでシンも食べ始めた。無言だがテレビの音だけが響く。もう食事もある頃心春が口を開く。

「お父さん。お母さん。」

二人は心春を見た。

「私は虚と人間の子なんだね・・・。」

「・・・！！」

「教えて。お願い。お父さんとお母さんが出会って何故結ばれたのか・・・。」

織姫はウルキオラを見た。ウルキオラはこちらを見ずに頷いた。

「わかったわ。心春。まず謝っておくわ。今まで黙っていてごめんなさい。ちゃんと話すわ。」

そうして織姫は話し始めた。黒崎一護のこと。死神のこと。自分の能力のこと。旅禍のこと。破面のこと。ソウルソサエティ。ウエコムンド。そして彼との出会い。

「私を助けに来てくれた黒崎君とラスノーチエスを守ることを命じられたお父さんは闘った。そしてお父さんは消えたー！ー。」

ウルキオラは織姫の手を握る。

「俺が話す。」

そういうと真っ直ぐにわが子を見つめた。

「俺の名は井上時雨いのうえしぐれなんかじゃない。」

時雨というのはウルキオラがこの世界で名乗っていた名前だった。

「俺の名はウルキオラ・シファア！。今は破面でもなく完全な人間でもない存在だ。」

「・・・それがお父さんの本当の名前なんだね。」

「ああ。」

「どうして黒崎一護さんに負けたんでしょ？消えたはずなのに・・・。」

「そうだ。俺は消えた。ウエコムンドから。だが俺は・・・。」

ウルキオラは思いにふけるかのように目を閉じ話し始めた。

12 闇の王族（前書き）

前書き 私の妄想です。ウルキオラが復活するのならこうしようという・・・。
世界観が伝わりにくいと思います・・・。

12 闇の王族

『俺が怖いかな？』

俺は問いかけた。目の前の女に。

『こわくないよ．．．』

女は言った。泣きそうな顔をして。俺は何故手をのばしたのだろうか。彼女に触れたいと思ったのか。何故今こんなにも笑うのかわからない。でもわかった。

これが心だと。

俺は生きたいのだろう。心がわかったからきつと今までのような虚無ではなくなる。この体に心はなかった。どこにもないと思っていた。しかし心はきつと誰にもあるのだ。俺が誰かを消したいと思うこと。女に問いかける質問．．．それは感情がなければ生まれることはない。決して。

もしまた彼女に会えるとしたら俺の心は必ず彼女にむくだろう。人間が言う信じるといふ類は不確かなものでしかない。だが今ならそ

れをどんなものより力になると思う。
そして虚は――――。

人間に憧れていた。

ウルキオラは目を開けた。目に映ったのはシャンドリア。ガラスに反射した光が輝く。ウルキオラは目をうつろにさせ左に向いた。部屋はかなり広いようだ。黒い部屋。黒いカーテン。大きな窓があった。雨がふっていた。ザーザーとかすかに聞こえる。よく見えないが窓の外に明かりがある。

ウルキオラはゆっくりと元に戻り天井を見て右に少し傾くと白い肌に黒い髪。黒いスーツ。そして輝く紅い瞳の細身の男がベットのそばに座っていた。

「目が覚めたか？ウルキオラ。」

ウルキオラはここがどこかとかお前は誰だとは聞かなかった。ただ彼を見た。

「……。大分ダメージがあつたからな。気分が悪いだろうが我慢してくれ。」

そういつて布団をかぶせる。それもまた黒い色の布団だ。

男は少し微笑んでいたがその目は笑っていない。優しい言葉に見えて棘があるようだ。とても低く囁くように言う。

「君は死んだね。ウルキオラ。」

ウルキオラは頷く。

「君の元主、藍染惣右介も死んだね。」

彼は続けた。

「ここは時の塔と呼んでいる俺の家だ。この世界は藍染が望んだ世界だ。わかるな？」

「．．．王族が住む世界．．．」

「そう。哀れだね。藍染は。たくさんの部下を失っても崩玉を使つてここに来たかったみたいだが．．．無駄なことだ。ここはそう簡単にあいつに渡せる世界でもない。」

「ここは．．．」

「ここはウエコムンドでも、ソウルソサエティでも、現世でもない世界だ。そしてこの世界は全ての真理。この王になれば全て思い通り．．．確かに世界制服はできるな。」

彼は面白そうに言った。

「ここはね。太陽は昇らない。ずっと月が出ていて雨が降っている。闇が支配する世界だ。だけどウエコムンドよりも素敵な場所さ。人間がいて食べ物も現世の連中と変わらない。このほうがよっぽど綺麗な世界だけ。」

「あんたも．．．人間か？」

「そうだよ。この世界は人間がいる。地獄と連動してるところもあるから魔物もいるけどね。だいたい人間が基礎なんだから。人間は神の人形だった。そして人間は神が消えたあと団結し文明を広げた。すごいだろ？君もずっと昔人間だったんだよ。死神もね。」

「．．．．．」

彼は立ち上がり窓のところまで歩く。

「人間は哀れで脆くて強欲で．．．弱くてサイテーだと思っているだろ？だけど自分もそもそも虚になったのは人間に憧れていたからだ。元はみーんな人間だったんだ。そうだろ？ウルキオラ。」

ウルキオラの目から涙が溢れた。ウルキオラ自身は流していること

を知らない。彼はほんの少し笑い、指をパチンと鳴らす。すると鏡が現れる。彼は鏡を渡す。

「見てご覧。」

ウルキオラは自分の顔を見た。あんなに白い肌は人間のような色をしていた。頭の殻はなくなり仮面紋もなかった。これはまるで――

「そう。君は人間だ。霊圧は少しだけ残しておいた。虚閃なら少しつかえる程度。斬魂刀はない。ほとんど人間。すこし虚つてどこか

「あんたは……。」

「俺はシオン・フォン・アレス・ハデス。この王族が住む世界の王だ。」

シオン王は紅い瞳を細めて笑った。

「さあ。君に聞こう。君は死んで何がわかった？」

ウルキオラは穴がふさがっていた胸を見た。

「心がわかった。俺はあの女が言ったことが少しわかった。女は俺が消えるとき涙をながしていた。その意味が……俺の勘違いでないなら人間というものがわかる気がする。」

「うん。だから俺は君を選んだ。見ていてイライラした。あの藍染惣右介という男。本気で王鍵を造ろうとしていたからな。犠牲を出してまで自分の欲のために何でもする。君が人間が嫌いだと言っけど藍染のほうがよくばどサイテーだ。今ならわかるな？」

「はい。」

シオンは笑う。ウルキオラは人間ということを自覚した。もうこの

男に従うしかない。きつとこの男に誰も敵わない。

「君はきつと誰よりも人間になれそうだったし面白そうだったからね。さあ。君は心がわかったなら望むはずだ。」

「俺は．．．あの女に会いたい。」

ウルキオラが生きる目的はそれだけだった。

「そう。じゃ。勉強しよう。」

「は？」

13 シンクレティズム

「君は知識がなさすぎる。まあ虚は元々脳なしなのに破面は頭脳があった。君は結構ある方だね。だから人間の知識なんてすぐ覚えるさ。」

シオン王はワインをついで飲んだ。ウルキオラは黙っていたが彼の言っていることがわかった。

その時、部屋の中の階段から誰かが上る音がした。

「シオン様。」

凜とした女性の声が聞こえた。女性は赤い髪の巻き毛ですらつとした雰囲気的女性だった。女性はおじぎをして続ける。

「お客様がおいでになっております。下のロビーでお待ちになっております。後、伝言を預かっております。『何で学校さばりやがる。はやく部屋に入れるバカタレ。』……と。」

シオン王は苦笑した。

「ありがとう。メディア。どうせあの馬鹿3人組だろう?」

「はい。シオン様のご想像どおりです。あとウラノス様をなんとかなさってくださいね。しつこくてわたくし殴りそうになりました。」

「はは。君が殴ったら世界が壊れそうだ。」

「笑い事ではございません。お願いしますね。シオン様。」

「ああ。わかったよ。」

メディアは立ち去ろうとしたが階段を下りるところで立ち止まった。

「シオン様。明日の会議は忘れないでくださいね。」

「わかってるよ。全く。君は心配性だな。」

「わたくしはシオン様に仕えるもの。当然のことでございます。」

「そうだな。ああ。すまないがウルキオラの服をもってきてくれ。何でもいい。」

「かしこまりました。」

優雅におじぎおして今度こそ彼女は階段を下りていった。

ウルキオラは呟くように質問した。

「この家は．．．。」

「高層ビルだ。窓の外にも見えるだろう？この世界は裕福な人間が多いんだ。貧乏人は道路で生活しているけどもうほとんど残っていない。魔物に食われるから。まあ魔物を退治するのも俺の仕事なんだが中々うまくいかない。上役のじいさんどもは俺を信用していないからな。」

「だからあなたは誰も信じないのか．．．。」

シオン王は不思議な顔をした。

「俺は信じているよ。少ない人数だけど。君も何かを信じるのか？」
「信じる．．．。」

そんなものありはしなないと思っていた。あの女が言う、仲間を信じるなどはただの戯言だと．．．。きっと心のどこかで．．．裏切られるのが怖いかもしれない。人間も虚も死神さえも。仲間をつくれば失うことや裏切られることが極端にこわくなる。だけど信じることは強くなることもできる。

「信じてる。あなたも．．．。」

ウルキオラのうつろな目が輝きを増す。シオン王の紅い瞳が笑った気がした。

その直後、また階段のほうから足音が聞こえた。今度は数人の足音。
「よう。シオン。なーにさぼってんだよ！」

金髪の青年が腕をシオン王の首に回す。

「ウラノス．．．離せ。気持ちが悪い。」

「てめーが悪いんだよ。俺達の許可もとらずにさぼるなんて。」

「ウルキオラを助けたんだ．．．ウルキオラ。紹介する。」

三人組は綺麗に並んだ。礼儀作法というかなんというかすごい。綺麗に歩く。

「この金髪馬鹿がウラノス・ガーニア。ガーニア家は代々ある自動

車メーカーでその3男。とにかく馬鹿で女好き。泣かされた女は山ほどいる。」

「泣かしてねえよ。みんなと遊んでるだけ。何が悪いんだよ！」
金髪のウラノスは銃を取り出し振り回す。ショットガンのようだ。

「まあ。ほつといてこちらはカーティス・ヴァルーナ。ヴァルーナ家はパソコンとか電気系の仕事をしてる。この国の電気はヴァルーナ家が管理している。その御曹司。」

カーティスは眼鏡をかけて黒髪のオールバック。髭が少しあって大人の男だった。

「よろしく。ウルキオラ。君のことは知っているよ。」

彼の声は美声だった。

「で。こっちが女みたいだけど男です。口調も女みたいだけど気にしないで。」

「なんていいようです。シオン。」

紫の髪の色をした男性が割ってはいる。声も女のように魅力的だ。

「名前はエルフ・サメリア。サメリア家は食料に力を入れてる。ここは農作物は育たないから人工の食料をつくってるんだ。」

ウルキオラはあまり言っている意味がわからなかったが、全員シオンの友達で金持ちで、美少年ということだけはわかった。

「あまり気に入らない自己紹介の仕方ですね。シオン。」

エルフは甘い淡い紫の長い髪を後ろにやりながら言った。よく見れば瞳はピンクで肌も白いので女にしか見えない。

「まあまあ。学校に行かなかったのは謝るさ。お前等も来たなら協力しろ。」

「勉強か？現世にいきたいんだろ？」
カーティスが言う。ウルキオラは頷く。

「わかった！俺達が協力してやる。ずっとあの戦いは見ていたしね。うん。あれはなんか泣けたね。ま。こう見えても俺達学年でもトップのところだから安心して。」

「頭悪そうに見えるのはお前だけだ。」

「全くです。僕と君と同じようなものだと思われたくありませんね。君はすっこんでくださいね。僕たちだけでウルキオラに勉強教えますから。どうせ君は女の子の口説き方しかわからないんでしょからね。」

カーティスとエルフの嫌味にウラノスは反応した。

「なんだとー！俺は女の子の口説きが趣味なだけだ！パソコンオタクと動物オタクよりましだー！ボケー！」

「パソコンのこと悪く言うんじゃないやねえ！この馬鹿！」

カーティスはウラノスの耳をひっぱる。
「そうですよ。動物はこの世界で貴重な生き物です。君なんかよりよっぽど価値がありますよ。」

エルフの氷の微笑にウラノスは完敗した。

「すまない。ウルキオラ。お前等も喧嘩するな。始めるぞ。」

シオン王の言葉でその場は静まりシオン王がパチンと指をこすり鳴らすと本が出てきた。

「ではビビシイこうか。」

そうして人間になるべく勉強は始まる。

4人の教え方はうまくウルキオラは頭もいいし目の能力があったのでたった数時間で数学などの基本は覚えた。言葉の意味もだいたいは覚えたがまだまだわからない。

「言葉は言葉。思いとかと違うから。よくそういうのも人間自身がわかってない。」

そうシオン王はどこか遠くを見ていった。心や愛そういうものは言葉ではわからない……。

そうしてウルキオラの勉強は順調に進みつつも難しいものにも直面し人間という愚かな生き物を理解していった……。

「本当に頭がいいようですね。どこかの馬鹿とは違います。」

エルフがちらりと見たのはついにメディアに平手打ちをくらったウラノスだった。

メディアはウルキオラの服をもってきてくれたついでにお茶もいれてきてくれた。そしていつもの如くウラノスが口説くのだがどうやらメディアの理性はどこかの彼方へ消えたらしい。

「何なんですか！あなたは！もうわたくし限界です！シオン様のご友人だから仕方なく家に入れています！聞いてください！シオン様！！この人ったら使用人の侍女たちを全員口説いているんですよ！いったい何人がわたくしのところに泣きついてきたか！！いい迷惑ですわ！」

「あ．．．うん。いや。ごめん。」

「何故シオン様が謝るのです！！もうこの能無し男！今度口説いてきたら本気で殴ってあげますからね！ふん！」

メディアは最後まで怒鳴り散らしふんふんと去っていった。いつもあんなに冷静なメディアを怒らせるのはウラノスだけだろう。

「うゝゝ。やべ。俺完全に嫌われた??」

「それは．．．前からだろ．．．。」

「もしかして．．．ウラノス．．．メディアが本命？」

「ずっとそうだよ。ああ！シオン。てめー手だしてないだろうな！」

「はあ？そんな訳ないだろ。お前がふざけてるからだ。」

「そうかもしれないけどさー。俺は彼女がどこか遠く見てるの知ってるから。なんかいつも無心なんだよ。だけど俺がここに来て女の子と話していると怒ってきてどこか生気がわいてるから．．．。」

シオンは溜息をついてウルキオラに向かう。

「こいつは見なかったことにしてくれ。こいつは問題アリだから。」
「はあ．．．。」

ウラノスはかなり落ち込んでいるようでほかの人は呆れてしまった。

「じゃ。明日。昼から行く。」

「わかった。お邪魔しました。」

三人は階段を下りていく。

「王。」

「？」

「俺．．は一人の女を愛す。」

シオン王はふっと笑みを漏らした。

「それがいいと思うよ。」

13 シンクレティズム（後書き）

この世界は東京のイメージでビルしかたっていないません。昼は昼の時間ですが太陽は決して昇りません。

14 生きる意味（前書き）

生きる意味なんて誰にもわからないけど意味を求めて生きるのが生きることなのかと思う。そして人が一番苦しくて辛いのは孤独。忘れられること――。

14 生きる意味

翌日。シオン王は昨日と少し違うスーツで現れた。

「おはよう。まあ天氣的には変わっていないが。」

シオン王は面白いように言う。

「体はどうだい？」

「．．．今のところ前と変わったのは霊圧がわからんこと．．．です。」

「ふうん。そうか。その内虚閃くらいはうてるかな。ていうか勉強してたのか？」

シオン王はウルキオラの手に持っている本を見ながら言った。

「はい。」

「そうか。早く現世に行きたいんだね。」

ウルキオラは押し黙って答えなかった。

「もう大分覚えたから大丈夫だと思うよ。近いうちに君は彼女の元にいけるよ。」

「はい。」

ウルキオラは誰にも気づかれないうちに笑った。

「さあ。俺は行くけど君も行くよね？」

「どこに行く？」

「会議。俺は一樣王様だからね。」

二人は歩く。部屋を出て高速エレベーターに乗る。

「まあじいさんばつかで楽しくないから。君は待ってていい。メデアはずっと昨日から不機嫌だから休んでるみたいだし。」

一階に着いた。エレベーターを降りると使用人たちが並んでいた。

「シオン様いつてらっしゃいます。」

使用人がいっせいに言う。シオン王は軽く微笑んだだけだった。ピ

ルを出ると黒いリムジンがとまっていた。

「はい。どうぞ。」

ウルキオラを先に乗らす。シオン王が乗ると車は動き出した。

シオン王は頬杖をついて車の外を見ていた。ウルキオラはいい心地がしなかった。何故勝手に動く？

「どうしたの？ウルキオラ。そわそわしちゃって。」

「．．．．．虚響でいったほうが早い．．．。」

「ははは。駄目だよ。人間の世界の乗り物になれなくちゃ。現世に行けば車もいっぱいあるよ。勉強はしたよね？」

「しましたが．．．。」

それでも納得がいかないというような顔。

「うーん。まあ現世に行くなら慣れとけてことか。人間は強欲な生き物だから。便利なもの。楽なもの．．．．．そういうのを作る知識をもってるんだよ。君が虚無という殻に閉じこもり人間はただの愚かな生き物と罵っていても生きることをやめない彼等がいたんだよ。今もこのときにも死んでいるものや生まれるものがある。そうやって世界は廻っていくんだよ。君はもう人間だから君は自分を罵ることはしてはいけない。」

「君は生まれたんだ。記憶を失っていなくとも君は新たな君になれる。いい。」

シオン王は優しく言った。新たな自分．．．．．その言葉が頭によぎる。

「さあ着いた。ちょっと行って来るよ。散歩でもしてて。」

王は車から降りていった。

ウルキオラは車から降りて公園に足を踏み入れた。夜の世界だ。ウエコムンドよりも明るくて心地がいい気がした。ウルキオラが足を進めて歩くとベンチに人が座っていた。

ブロンドの髪を綺麗にのばし、黒いような青い瞳は輝いている。白いパーカーを着ている女性。白い服は確か禁止されているはずだ。ウラノスが言っていた。

彼女はウルキオラに気づいたのか立ち上がって近づいてきた。

「あなたは不思議．．．。」

「？」

「知っていますか？」

「は？」

「あれ。」

彼女が指差すのは公園の噴水だった。何かの銅像がたっていたが知らない。

「何が見えます？」

「何かの銅像．．．。」

「やっぱり。見えるんですね。」

彼女は嬉しそうに笑った。

二人はベンチに座り、銅像を見上げた。

「あれは普通の人には見えません。」

「．．．何故。」

「あれは死神です。もちろん。ソウルソサエティの人たちのことは知っています。けれど私達は元々ハデスという神様のことを信じています。ハデス様の部下。冥界、または地獄の使者を死神と呼んでたんです。けれどハデス様はいなくなって死神も消えました。そうして今のソウルソサエティが死神．．．。それが普通です。でも私は見えるからずっと守ってくれていると思うんですよ。」

よくわからないがこの世界にはウルキオラの知っている死神と違う死神がいたということらしい。

「そして．．．死神は限られた人しか見えない。私をいれて二人だったけどあなたもでしょ？」

「意味がわからん。」

「そうですね。わかりにくいですよね。すみません。」

彼女は慌てて立ちあがる。

「ごめんなさい。いつてらっしやい。気をつけて．．．。」

彼女は踵を返したその時、ウルキオラは彼女の肩を掴む。

「なんで俺がどこかに行くとかわかった？」

「．．．だつてあなたはここの人間ではないもの。あなたには行くところがあるそうでしょう？」

彼女は首をかしげて言う。ウルキオラが手を離すと彼女は歩いていく。

「ウルキオラ。ここにいたのか。」

シオン王がウルキオラの背後から歩いてくる。シオン王はウルキオラの向こうの女性に見覚えがある。

「フィーリ．．．？」

シオン王の声が聞こえたのかフィーリと呼ばれた女性は振り返った。

「さようなら。シオン様。」

彼女は憎悪の顔を浮かべると今度こそ闇夜に消えた。

「あの女は？」

ウルキオラはやはり聞いていた。

「彼女は俺の初恋の人だ。けど彼女は俺のことを憎んでる。」

「何故？」

「彼女が選ばれた人間だからだ。彼女は．．．。」

シオン王はそれ以上何も言わなかった。

「ウルキオラ。今から行きなさい。」

「王．．．。」

「今から現世に送る。君はこれ以上いても君の特にはならない。」

「．．．．．。」

「いいか。ウルキオラ。君は人間だ。人間は脆くて弱い生き物だ。けどいいものを持つてる。それが愛とか友情とかそういうものだ。

それを意味の有るもの無い物で判断しないで愛は感情の中でも強いものだ。そして同時に邪悪なもの．．憎しみ。悪．．。人間が愚かな理由だ。人間は人間をも殺す。同じ人間なのに．．。残酷で冷酷なものもある。けど憎しみも何もかも人間はあるけどきつと君の力になる感情もある。今までどうでもいいと思っていた人間．．。だけど、君は君の生き方を見つけて誰かを愛して．．。意味を見つけてほしい。生きる意味を。迷うこともあるだろう。けどそれが生きる道で君だ。そしてきつと誰かが君を助けてくれる。そして誰かを君が助けることもできるはずだ。」

「俺にはわからない。愛とかそういうものは．．。必要ないものだと思ってる。今もだ。だが俺があの子に求めた感情は．．。きつと。」

「君にはわかってる。俺は心配してない。人間がきつと嫌いになる。嫌いになるのは簡単だけど、好きになるのは難しい。」

「．．．．．。」

「そして最後に。人間が一番恐れていて．．一番辛いこと。それは『孤独』。孤独は辛くて死んでしまいたいぐらいだ。だけど死んでも孤独だ。孤独は全てを無にしてしまう。君は孤独にならないで、そして彼女を一人にしないことー。いいね。」

そして霧がかかる。白い霧で何も見えない。

『生きるために．．．生きてほしい。』

それが王の最後の言葉だった。

現実。

「俺は王のおかげで現世に行き、織姫と再会した。そして結ばれたんだ。」

ウルキオラは目を開け現実に戻った。あの後、王はどんな気持ちなのだろうか。

「お父さんは．．．満足してる？お母さんと結婚して息子と娘がいて．．．。」

「ああ。幸せだ。ずっと幸せだ。」

幸せという言葉がどれほど愚かに聞こえただろう。でも今は素直に思える。

「ありがとう。話してくれて。私は私だから。いいの。化け物でも私は私。」

心春は笑って見せた。

「お父さん。お母さんを一人にしないでありがとう。私のお父さんでいてくれてありがとう。」

心春はそれだけ言い残し自分の部屋へと去っていった。

残されたシンは何も言わず両親の顔を見た。嬉しそうな顔だった。

「俺．．も部屋に戻ります。」

シンは何を言えいいのか迷い去るときに呟くように言った。ありがとうと。

「今日はよくありがとうと言われるな。」

病院での患者や自分の子供にも。

「心春は強い子だから。虚なんか怖くないのよ。怖いのはきっと大事なものを失うときよ。そうでしょ？」

ウルキオラは頷く。

『君の名は時雨。時の雨。仮の名でもいい。俺を忘れないで。』

王の声が蘇る。自分に名をくれそして忘れないでと言った人。

「人間が恐れることそれは孤独と．．．自分が忘れられること。」

「うん。」

「俺を忘れないでくれるか。」

織姫はウルキオラに抱きついた。ウルキオラはかなりびっくりした。

「馬鹿ね。死んでも忘れなかったじゃない。ずっと忘れないわ。ずっと愛してるもの。」

ウルキオラは目を見開く。

「ありがとう。」

ウルキオラは強く抱きしめる。ただ嬉しかった。

14 生きる意味（後書き）

過去編終わり・・・疲れた・・・。
まとまっていなくて申し訳ない。

15 闘う少女

翌日。心春は目覚めて階段を駆け下りる。

「お父さん！誕生日おめでとう！」

心春は大きな声で言った。ウルキオラは実に嬉しそうに微笑んだ。

「ありがとう。心春。」

ウルキオラは心春を撫でてやる。小さい頃はよく心春をだっこしてあやしたものだ。

「心春。今日は帰ったら夕飯はごちそうだからね。ケーキ買ってきて。」

「・・・・・・。」

織姫の言葉に心春は反応を見せない。

「今日は学校休む。病院も休みだし。お父さんと一緒にいたいのに。」

織姫は固まった。ウルキオラは眉根を寄せる。

「おはようございます。あの・・・・なにか？」

シンはリビングに入ってきた。全く何が起こったのかわからなかった。

「そんなの・・・・だ・・・・。」

「織姫。」

ウルキオラは小さく言って小声で大丈夫だと囁いた。

「心。今日は一人で学校に行け。」

「は？」

「今日は俺の誕生日だ。」

ウルキオラはニヤリと笑う。

そうだ。決定権は自分にはない。今日は。ていうかいつもだがシンの負けは見えている。

「わ。わかりました。誕生日おめでとうございます。父さん。」

「ありがとう。」

ウルキオラは微笑する。シンに向けてするのはあまりないので変な感じがした。

「織姫。出かけてくる。心春と。」

「・・・わかった。お昼ごはんは外で食べてきてね。さっ。朝ごはん朝ごはん。」

織姫はせつせと台所へ向かう。心春はうつむいていた。シンはそつと心春の肩に手を置いた。

「今日は父さんと思いつきり遊べよ。」

シンは優しく言ってやる。心春はうなずいただけだった。

「おっはよーシンくん。元気ないですねえ。」

雪花はいつも通り自分の席に座っているシンに呼びかけた。

「黙れ。元気はある。阿呆。」

「うそこけよ。てめえの目死んでるぜ？鏡見てみ。」

「うるさい。」

雪花は座って心春のいる席を見る。

「今日心春ちゃんは？一緒に来てないのか？」

「休みだ。」

「び、病気が!？」

「違う。ピンピンしてる。今日は親父の誕生日なんだ。」

「ああ。父ちゃんの・・・。お前の父ちゃん心春ちゃんを溺愛してるからなあ。お前もだけど。まあ病気じゃないならいいや。」

「・・・貴様・・・。何故心春のことをそんなに心配してる？」

「はあ？同じクラス。俺達幼稚園から一緒なんだぜ？心配にもなるっつて。」

「そうかもしれんが．．．」

「ああもう。いいって。お前が俺の何倍も心配してんのは知ってるよ。ま。あの父ちゃんのことだ。休むの許可したんならそれなりの理由があんだろ？」

シンは後ろを向いて雪花を見る。何故馬鹿なくせにこんなに勘だけはいいのか。

「雪花。」

「ああ？」

「後で．．．話す。お前も来い。」

雪花は何も聞かなかった。ただうんと頷く。

（あの男．．．。）

シンは黒崎を鋭く睨んでいた。

「どこに行く？心春。」

9時くらいウルキオラと心春は外に出かけていた。心春は何故か昨日は眠れなかった。自分が知ったことの重大さがわかってきた。そんな簡単な問題ではない。確かに自分は自分だし今までのことが全て意味無く嘘のものだとは思わない。けどやはり彼が気になってしまっ

「お父さん。黒崎って．．．黒崎一護さんって．．．」

ウルキオラはいつきに無表情へ戻る。この顔はきっとアランカルのと

「いいか。心春。」

「？」

「今日は俺に付き合ってもらっぞ。」

ウルキオラは心春の手をひくともものすごい足の速さでいってしまっ

「○○ズニーランド!？」

心春がつれられたのは有名な遊園地だ。あつという間に着いた。

「そういえば来たことなかっただろう?」

ウルキオラは名医で有名だったので仕事が忙しい。だから旅行なんて滅多に行かない。覚えているのは地元でキャンプ・・・それぐらいだった。

「俺も初めてだ。」

「お、お父さん!待って。」

手をひっぱられ遊園地に二人は入った。

「何か乗りたいか?」

「うーん。あれ!」

心春が指差したのは山にそびえるジェットコースター。

「では乗ろう。」

ということに乗ったのだが・・・。

事後。

「お父さん。大丈夫・・・?なんか無言だったけど・・・いやなんか放心状態みたいだったけど・・・。」

「ぞ、存外妙な感覚がくる・・・ものだな・・・。いや。びっくりした。」

かなり驚いているようで・・・自然と笑顔になる。

「怖かった?」

「い、いや、だ、断じてそんなことはない。妙な感覚なだけだ。」

「じゃ。ほかのも乗ろうよ。」

ウルキオラはもうこの先ジェットコースターには乗らないと誓った。

「楽しかった。もう夕方だね。」

心春は嬉しそうに帰り道に言う。ウルキオラは微笑む。

「元気がでたな。心春。」

「お、お父さん．．．。」

「この間家にきた少年．．．黒崎一とかいったな。お前が思っている通りだ。黒崎一護の息子．．．。」

「だから死神で．．．。だから私を傷つけなきゃならないのね．．．。」

ウルキオラは頷く。

「お父さん。あのね私、虚に襲われたとき怪我したの。でも腕に手をやったら治ったの。」

「．．．それは．．．。織姫の能力だな。俺は超速再生ができるがきつとお前は織姫の能力だろう。そっくりだからな。お前と織姫は。」

「お母さんはそっか回復ができるんだよね．．．。」

「そうだ。」

「．．．私はやっぱり普通じゃない。でも私は私だから。黒崎君がもし私を傷つけることが仕事なら仕方ないと思う。でも．．．。心春は真っ直ぐウルキオラを見つめる。

「私のこの命簡単にはあげられない。私はもっと生きて生きておばあさんになるまで生きたい。だから．．．。」

「私は闘うよ。」

たとえば好きになった人でも。好きでも。私は生きたい。だから彼の

ために死ぬ訳にはいかない。

「お父さん。ケーキ買おう！プレゼントも帰ったら渡すね。」
心春は走って先にいく。ウルキオラはその背中を見て本当に強い子だと思った。そして自分達の子だと。

数時間前。

「黒崎。」

雪花とシンは黒崎を呼びかける。

「来い。」

黒崎は二人を睨み、おとなしく立ち上がったのだった。

16 二人が

黒崎が転校してきた日にシンと黒崎が対峙した屋上。そこで再び戦いが行われる。

「貴様．．．昨日何故心春を助けた？」

シンは睨みながら静かに言った。いつもと調子は変わらないように見えてあきらかに慎重になっていると雪花は思った。

「．．．．．」

「答える。」

黒崎は目をそらして答えようとしなかった。雪花はそこに割つてはいる。

「助けたって．．．。何だよ。」

「昨日、心春は襲われた。虚という化け物にな。お前にも見えているんだろう？あの黒いでかぶつの生き物だ。心春は霊力が強いから狙われやすい。俺の不注意だ。反省はしている。」

「はあ？てめーが反省したって意味ねえんだよ！最近反省ばっかしやがって！で？虚が心春ちゃんを襲つて黒崎が心春ちゃんを助けたそれってよ。黒崎に礼を言わなきゃなんねえんじゃねえか？」

雪花はいらだちながら言った。

「コイツは心春を助ける義理なんてない。コイツは心春を殺しに来たんだからな。」

「はあ！？」

雪花は驚いてシンの腕を掴む。

「どういつことだよ！何で心春ちゃんが．．．。」

「離せ。気色悪い。俺もだ。そして俺の親父も。」

「．．．．．わかった。なんとなく．．．お前は普通の人間じゃな

い。心春ちゃんも違う。お前の父ちゃんも．．．。もしかして．．．
お前は．．．。」

「お前の思う通りだ。俺は半分虚の血がある。そしてこの男は死神だ。」

それきり雪花は深く黙った。

「答える。黒崎一。お前の父親もこの街にいるんだろう?」

「．．．!」

「何故あそこで心春を殺さなかった。」

シンは殺気を放つ。

「自分でもわかんねえよ。俺は殺しに来たんだ。虚もアランカルも．．．。お前の母さんが隊長たちの知り合いだってことはわかってる。でもアランカルだ．．．。魂を喰らうに決まってる。人間を喰らうに決まってる．．．。なのに．．．井上を殺せないんだ。俺が一振りすれば死ぬ。わかってる。わかってんのに．．．。」

「甘ったれるな。貴様ツ．．．!」

シンは胸倉を掴む。

「貴様は俺達の気持ちを考えたことがあるのか?俺達がどんな思いで生きてきたと思う?母がどんな思いで俺達を産んだと思う?親父がどんな思いで母と結婚したと思う?殺しに来たならさっさとやれ!貴様等死神は馬鹿ばかりだ。」

シンは手を離す。黒崎は力尽きて尻をつく。

「何故．．．。今なんだ。どうせ殺すなら赤ん坊の頃にでもしておけ。そして．．．。俺達は今の生活を変える気は無い。殺せばいい。だが自分も死ぬぞ。」

シンはそういつて背を向けて去っていった。

「黒崎。」

雪花は黒崎と共に教室に帰るためゆつくりと階段を下りた。

「お前は霊力があるから見たことあるだろ？俺のこと。」

「アフロのおっさんは見たことあるよ。死神か。なあお前は本当に本当は心春ちゃんを殺したいけど殺せないのか？」

「．．．．わかんねえ。」

「あのさあ。黒崎。」

「．．．．！？」

次の瞬間には壁に押し付けられ胸倉を掴まれていた。

「お前．．．もしシンと心春ちゃんをやってみろ．．．俺が絶対に許さねえ。それに心春ちゃんを傷つけてみる。シンの前に俺が殺す。ただの人間だからって甘く見るんじゃないぞ。」

いつもの雪花には考えられない顔と声で雪花は言う。黒崎は恐怖していたのかもしれない。初めての感覚だった。本気の目。彼の信念はシンより強いかもしれない。

「ま。俺は争いごととは好かないけどさ。人間だから憎しみとかってすつごくわくわけ。とっとと帰ったほうがいいかもね。」

雪花は立ち去ろうとするが黒崎は呼び止める。

「雪花．．．．お前は井上のこと．．．．」

「好きだよ。世界で一番。でも俺シンのことも世界で一番好きなんだ。だから．．．俺はシンを傷つけたくもねえし心春ちゃんのことも傷つけたくない。俺は守りたい。だから容赦はしねえ。悪いな。」

黒崎。」

雪花は淡い笑みを浮かべていた。だから言ってみたくなくなった。

「俺は．．．どうしたら．．．俺は井上を殺したくない！」

「ならさ。しなくていいじゃん。誰も悲しまなくていいんだから。」

雪花は優しく笑った。そしてもう振り返らなかった。

「ただいま。」

「あっ！シンおかえり〜！ご飯すごい豪華だよ！ケーキも買ってきたから！」

シンが家に帰ると心春が迎えてくれた。シンは屋上から雪花ともあまり話していない。雪花は一日中寝ていた。

「心春．．．。」

「ん？」

シンは心春を抱き寄せる。

「シ、シン！？」

「兄ちゃんを守るから．．．大丈夫だ。」

昔から．．いじめられたり悲しいことがあったりするとこうして抱きしめられた。それが嬉しくて嬉しくて．．．嫌なことも忘れられた。

「ありがとう。」

もう怖くないから。全部。闘うって決めたから。

「シン。早くリビング行こう！お父さんね。私のプレゼント喜んでくれたよ！」

心春は笑って言う。シンもつられて笑った。やっぱり自分は心春が大好きなんだ。そして家族が大好きなんだ。とシンは心のどこかで思い、それは忘れることはなかった。

16 二人が（後書き）

次あたり過去しようかな・・・。

17 神よ私に幸福を

両親は生まれた時からいなかった。事故で死んだのか捨てたのか．．．そんなもの知らないが顔もしらない。祖父母に育てられたが祖母は無感情で仕方なく世話してるといった感じだった。祖父母も俺が小学校に上がると同時に死んでしまった。別に悲しくは無かった。

ずっと独りだ。ずっと．．．だから同じような奴を見ると嬉しかったんだ。

「おはよう。先生。」

「ああ。薫くんおはよう。」

俺の名前は雪花薫。幼稚園薔薇組の5歳。幼稚園というのはしょうもない場所だが仕方なく行っていた。

「さあ。みんな外で遊びましょう。」

「はあい！ー！！！」

いつせいに園児たちは外に駆け走っていた。二人を除いて。

「薫くん。シンくん。お外で遊ばないの．．．？」

俺は答えなかった。だがシン．．．井上心のことを見ていた。彼はどこまでも黒い瞳だが明るい瞳の色をしていた。友達も一人もいないらしくずっと椅子に座っている。全部俺と似ていた。そして彼

はこう言った。

「別に。このクソ暑いのに外で遊ぶ気力がないだけです。」

幼稚園児とは思えない声色と顔で彼は言つてのける。今は夏だが冬ならばこのクソ寒いのに．．．なんて言うんだろう。

シンは本とかも読まない。理由は聞いてないがこいつのことだから．．．『こんな大きい字は読めん。幼稚だ。』とか言つてかつこつけるんだろう。

「なあ。お前さ．．．。」

俺は初めてシンに話しかけた。シンは不思議そうな目で俺を睨んだ。

「お前は孤独なの？」

シンの眉がピクツと動いた気がした。

「お前。本当に5歳か？よくそんな言葉を知ってる。」

「お、お前だつて．．．。」

「俺は希少なんだよ．．．孤独か。お前悲しい奴だな。」

この頃のシンは．．．結構感情があつたかもしれない。今よりも。

「俺は本当に独りなんだ。俺にはお前も．．．。」

シンは机を叩き立ち上がった。

「くだらない。俺はお前とは違う。俺は家族がいる。お前と一緒にするな。ま。一生孤独なお前には俺の気持ちなんて一生わからないだろうがな。」

「ちよつと！シンくん！」

その時先生が声を張り上げた。

「薫くんはご両親がいないのよ！？そんな言い方．．．。」

シンは女の先生を睨んだ。

「あんたには関係ないだろう？．．．あんたにも一生わからないんだ。こいつの気持ちだ。俺もだが。家族。友達。恋人．．．そんなものがなきゃ生きられない女が口を出すな。」

先生は啞然として声が出ないようだった。それはそうだろう。こんな幼稚園児いないって。

「なあ。お前．．．幸せか？」

「面白いことを聞くな。雪花薫。そうだな。お前にはわからない幸せだ。だがお前が孤独から抜け出すことはできるだろう。そのときにわかるだろう。」

「お、俺が．．．。」

シンは少し笑った。

「お前は勇気があるな。俺に話しかけるなんてな。そこは褒めてやる。だから俺はお前の幸せを願ってやる。」

その日から．．．俺はシンにくつついていった。幸せを願うから。その言葉が忘れられなくて嬉しかったんだ。

シンは双子の妹の心春を大切にしていた。シンは基本的に外に遊びたくはないようだが心春にせがまれると断れないようだった。ある日。心春が俺に話しかけた。

「ねえ。ゆきばなくん。」

「心春．．．ちゃん。」

シンの視線を感じ、ちゃんをつける。

「シンとおともだちになつてくれたの？」

「えっ？」

俺は早くうんと答えられなかった。

「シンといっしょにいてくれるでしょ？シンはあんまりあそびないから。ゆきばなくんといると楽しそうだから。」

俺は言葉に詰まった。シンが楽しそう．．．？

「ありがとうね。」

俺は心春ちゃんを見た。その笑顔はシンと双子には見えないとびきりの笑顔だった。彼女がすぐもてるのがわかった。

そして恋に落ちたんだ。一生叶わない恋に。

だからきつと家族はできない。シンはどこまで俺の幸せを願ってくれるんだろう？

どこまで俺は独りなんだろう．．．でもとつくに気付いてた。俺は．．．。

もう独りじゃないって．．．。

小学校に入ると俺は友達を作った。六年間で．．．同じ学年のやつと全員話したな。だけどきつと俺が嫌いな奴もいたんだろうな．．．。でもどんな奴といたって孤独を感じた。どこかみんな他人で一番大切なのは家族だって．．．でもシンは家族が一番大切なはずなのにそんなこと微塵も思わせなかった。不思議だけど独りじゃない気がしたんだ。

中学に上がった時．．．。俺は不良になった。なんかどうでもよかったんだ。友達とか．．．。俺は中学はなめられると思った。不良に。そんなの嫌だったんだ。

「本当雪花怖いよね。」

「他校の奴に喧嘩売られても負けなしだって。」

「でも雪花がいると授業中も静かだし私は別にいいな。かつこいいし。あんまりからかったりしないじゃない。」

俺はシンの前の席に座りながらこんな会話を聞いていた。中学に入
って話しかけるのは不良のやつらだけだった。

「楽しそうだな。」

シンがそつと呟いた。

「楽しいか？うーん。どうだろ？タバコ、シンナー……。女。こ
れが楽しいって？」

「俺には一生わからないな。だがお前が顔色悪くて毎日過してる
のが楽しそうだと思ってるな。」

「相変わらず嫌味な言い方。」

知ってるか？俺このときすげえ嬉しかったんだ。だってお前から話
してくれただろ？

でもさ。まだ俺……。我儘だから満足してないんだ。

「ゆ、雪花君！」

そう。心春ちゃん。俺の叶わない恋の相手さ。

「あの……。」「

「何？」「

俺は冷たく態度をとった。

「もう三年生だよな……。」「

「そうだね。」「

「雪花君は……。どうして不良になっちゃったの！？」

いいとこ聞くな。そう思ったよ。

「うーん。俺の我儘。退屈なんだよ。中学と違って。俺は自分が今
大事なんだよ。」

「どういうこと？今まで自分が大切じゃなかったの？」

「うん。大嫌いだっただ。でも今はマシだよ。で、心春ちゃんが言い
たいことってそれなの？」

「えっ。いや。私ね！シンの一番の友達に雪花君だと思うの！私の
思い込みかもしれないけど……。だから雪花君とシンは同じ学校

に行ってほしいの！」

俺は．．．シンの友達か。心春ちゃんはどこまでも綺麗な心の持ち主だ。どれだけ女を抱いても心春ちゃんを忘れられなかった。どうして俺はこんなに我儘なんだろう？俺はずっとこの言葉を待ってたんだ。

「心春ちゃん。」

「？」

「ありがとう。俺。不良やめるよ。」

そして俺は不良をやめた。当時彼女が4人いた。不良の女。オタクの女。いじめられっこの女。女教師．．．。全員ふった。そして真面目に勉強して．．．俺はシンと同じ高校に入ることができた。

俺はどれだけ馬鹿なんだろう。とつくに幸せだったのに．．．。

俺はどこまでも孤独だ。友達がいくらいたって．．．。

俺はシンが友達になってくれたことが人生最大の幸せなんだろうな。俺は．．．。一生結婚できないんだろうなあ。

（ま。一生童貞よりましか。）

「雪花君？」

「．．．こ、心春ちゃん。」

季節は12月24日。クリスマス・イブだ。こんな日に学校なんてどうかしてるが終業式だった。冬休みが明日からはじまる。あれから．．．黒崎は心春ちゃんと普通だった。普通の会話で．．．どこまでいっても普通だったから。シンも安心しているようだった。いや。今が問題だ。なんで俺は昔のことを思いだしてたんだ？

「どうしたの？浮かない顔して熱でもある？」

そう言っただけ凍える手で俺の額に触れる。こんなところ見られたら殺されるだろうな。

「ありがとう。でも大丈夫だよ。そういや今日はクリスマス・イブだね。」

「そうだね。帰ったらケーキ作んなきゃ。あ！そだ！雪花君も家に来ない？ていうか雪花君しか呼んでないけど。」

「え？いいの？」

「うん。きつとたくさんできると思うし！」

どうしてこの子はこんなにも優しいんだろう？

どうしてこの子はこんなにも美しいんだろう？

俺は笑った。声をあげて。

「どうしたの？雪花君？」

「ん。シンは嫌がるだろうなあ。でも必ず行くよ。ありがと。心春ちゃん。すっげえ嬉しい。」

俺が彼女を見てみると後ろから気配がした。やばいやばい。

「俺先行くわ！じゃ。」

俺は走って逃げた。

一生俺は孤独だろう。

でも孤独じゃない。

一生二人のことを愛すから。

17 神よ私に幸福を（後書き）

雪花君の過去です．．．。いきなりクリスマス。クリスマスだから
といって特別なことはしないんですが．．．。

書きたいのに書けない部分が．．．。雪花君はすつごく二人がすき
なんです。心春は好きですがシンから奪うなんてできない。だ
から一生叶わない恋なのです。

18 聖なる日の悲しみ

学校が終わり、雪花とシンは一緒に道を歩いていた。

「お前。本当に家に来るつもりか？」

「え？何？やっぱダメなの？俺がいかなかったら心春ちゃんに申し訳ないじゃん。」

「別に来るなどとは言っていないだろう。だがうちの家にはあの二人がいるんだぞ。」

「そんなことわかってるよ。まあシンがいいなら俺は行くよ。」

雪花は笑う。シンは舌打ちする。

「チツ。まあいい。心春のケーキはうまいからなちゃんと味わえ。」

「へいへい。」

「なあ。黒崎は……どうだ？」

「何も無い。特に何もしてないから俺も迷ってる。あいつが殺しに来たのなら受けて立つが……こっちから仕掛けるなんてことは無意味だ。」

「……そつだなあ。あいつも色々あるんだろ。ていうかもし黒崎が上司に殺せませんでしたとか言ったらどうなるわけ？」

「違う死神が来るかもな。」

「……違う死神……ね。」

「あつ！雪花君いらっしやい。」

心春は口に生クリームをつけ玄関に二人を迎えに来た。

「おじやまするね。心春ちゃん。ありがとね。」

「いいよ！あつ。お母さん！！雪花君が来たよ！！！」

心春が大声で叫ぶと織姫が玄関にやってきた。

「あなたが・・・雪花君？」

「は、はい。雪花薫です。今日はありがとうございます。」

（やっべー授業参観で見たときより綺麗だ。心春ちゃんによく・・・いや心春ちゃんが母ちゃんに似てんのか。）

「いいのよ。さあ入って。雪花君今日は何時くらいまで家にいても大丈夫なの？」

リビングまで歩きながら織姫は聞いた。

「いえ。あの俺独り暮らしなもので・・・。両親はいないから別に何時でも・・・。」

「・・・！そう。」

織姫は切なそうな顔をした。

「そうだわ。じゃあよければ泊まっていけない？もう冬休みだし。」

雪花は瞬間シンを見たがいつもと変わらない無表情な顔だった。

「そうだよ！雪花君！泊まっていきなよ！」

心春が台所から言う。

「あの・・・じゃあお言葉に甘えて・・・。」

「はい。ゆっくりしていつてね。はい。お茶。」

織姫はお茶をだす。

「あ、じゃ私仕事に戻るから。」

織姫はさっさと行ってしまった。

「可愛いな～お前の母ちゃん。ほかの男から守るの大変だろ？」

二人はシンの部屋で茶を飲んでいた。心春を手伝うといったが心春は嫌がった。なので二人でのんびりしている。

「あの人をそれを怠ると思うか？」

「全然。お前の父ちゃん独占欲が強そうだもん。お前にそっくり。」

「どういう意味だ。」

「んにゃ別にいゝ。」

（無自覚なんだな。こいつ。）

「あの人は……いや。何でもない。」

「強いんだろうな。お前の父ちゃん。名前教えてよ。本当の名前。」

「……お前、本当に変わった奴だな。」

「変わってなきゃお前といねえよ。」

「全くだ。」

下のリビングに戻るとテーブルにはご馳走がそろっていた。

「おお〜うまそう〜。」

「へへ〜。」

心春は可愛く笑った。そこへ織姫とウルキオラが現れる。

ウルキオラは不思議そうに雪花を見た。雪花はウルキオラの碧眼の瞳を見た。メガネで見にくかったが。

「はじめまして。雪花薫です。シンと心春ちゃんとは幼稚園から一緒です。」

雪花は頭をさげる。

「知っている。参観の日に見た。」

（うつわ〜マジでシンだあ〜でもシンよりかけえな。）

「そ、そうですか。」

「お前は両親がいないそうだな。」

「は、はあ……。」

「お前はいい目をしている。一番わかっているんだな。」

「……?。」

「はい。みんな食べましょ！」
クリスマスのご馳走をみんなはいっせいに食べ始めた。

「ご、ごちそうさまでした。」

雪花は手をあわせてふうと息を吸った。シンも食べ過ぎたようで疲れた顔をしてる。心春はソファで寝てしまっている。
織姫は食器を洗っていた。

「お前。」

ウルキオラに雪花は呼ばれた。

「は、はい。」

「来い。」

雪花はシンを見ながらウルキオラのあとをついていった。

「お前は霊力があるんだな。」

「そうです。」

「心が恐くないのか？」

「怖い？」

「心は俺によく似ている。霊力もあるが・・・人間には辛い性格だろう？」

「別に。俺はシンのこと好きですよ。怖いと思ったことないッス。あなただって恐がられてないじゃないですか。」

「・・・！不思議な奴だ。お前みたいなのが心のそばにいてくれてよかった。感謝する。」

「い、いえ・・・俺は・・・。」

「俺の名はウルキオラ・シファア。お前のことだから俺がアランカ

ルだっで知つてゐるんだろう?」

「アランカルつて．．．虚ですよね?」

「そつだ。」

「ウルキオラさん．．．。俺を家に入れてくれてありがとうございます。いや俺。男だから入れてくれないかと．．．。」

「入れてくれるつて．．．いたじゃないか。まあいい。お前のよ
うな人間はわりと好きだからな。これからも二人を頼むぞ。」

ウルキオラは微笑んで去つていった。

「何を話した?」

「本当にお前にそつくり．．．だよ。」

「．．．．．。」

「はじめえ。」

金髪の男は一に微笑んだ。

「どつからわいてきたんですか。千石隊長。」

「窓からや。」

「何の用ですか。」

男は窓からやつてきた。死神の姿だ。歳若い顔の千石はかなりの宝
石好きでジャラジャラとつけているがそれが驚くほど似合っている。
金髪に黒いメッシュを入れてそれもまた似合っている。

「お前なあ。自分の仕事わかつとんか?」

「!!--」

「隠しても無駄やで。全部見とつたわ。ええか。一。お前はな。黒崎一護の息子や。それ以下でもそれ以上でもない。お前はまだ弱いねん。せやけどお前の親父がここに派遣したんならちゃんと仕事しなあかん。お前の仕事は何や？言うてみ。」

「アランカル．．．ウルキオラ・シファアとその子供を殺すこと．．．です。」

「そうや。藍染のしたことはまだ影響が強い。何故かまだ虚は強くなつていくし。ソウルソサエティもすくなくからずダメージ受けてそりやあ修復作業が遅い遅い。せやのにや。ウルキオラとかいうアランカルが生きとるいうやないか。そいつのおかげでこの町の虚は強なつてるんやで。無意識か知らんけどええ迷惑や。なあ。俺等は虚を殺すために存在してんねんで？それはわかるとるよなあ？」

「．．．．．。」

「殺されへんやつたらつれて来い。ソウルソサエティで処刑したるお前の手でどうしても無理やつたら連絡せえや。ええか。春になるまでにはせえへんかったら．．．。」

一は息を呑む。

「まあ。後は知らんけどな。お前はうちの隊ちやうし。でも俺はせっかちやから．．．どうなるかわかれへんで？」

千石は不敵に笑った。ぞくりと寒気がした。

「じゃ。一護よろしゅう。じゃあの。」

千石は消え去った。

18 聖なる日の悲しみ（後書き）

千石はオリキャラです。私に関西なものでいれたかったです。平さ
んたちを入れるのはどうかと思ひまして・・・。

19 使命（前書き）

時間がなくて間違えたままでした。

19 使命

「親父．．．。」

「は家に入り込んだ父親を呼んだ。たった今帰ってきたのだ。ソウルソサエティから。」

「どうした？。」

「さっき、千石隊長が来た。」

「龍沙が？」

「ああ。」

「なんて？」

「早くしろと．．．。」

「護は台所に行ってお茶を飲んだ。」

「で？お前は？命令に従わねえのか？」

「．．．わからねえんだ。どうしたらいいか．．．。」

「はつきりしろ。俺がお前を派遣した。できねえなら他の奴にやらせる。」

「親父．．．本当に本当に殺すのか！？シンの．．．母親は親父の友達だろ！？なのに．．．。」

「．．．」

「護は一に向き合った。そして胸倉を掴んで顔を向かす。」

「忘れたか？俺達は死神だ。虚を倒す。それが使命だ。なのに情に流されてアランカルを殺せないなんてことはあっちゃいけねえんだ。」

「．．．．．それでも俺は．．．あいつらを殺したくない！

！」

「護は目を細めてから一を離した。」

「なら。自分で上に伝えるんだな。俺は何もしない。」

「あんたはっ．．．！！！」

「一は叫んだ。」

「あんたは仲間を傷つけられないんだ！！口でそんなこと言っても怖いんだ！仲間に憎まれるのが！！あんたはそれでも英雄の黒崎一護かよー！！」

死神としてとてつもない力の持ち主。あの藍染惣右介を殺した死神。

「子供に自分ができねえことを押し付けて．．．何なんだよ！！」

一護は何も言わず聞いていたが何も言わず去っていった。

「クソツ．．．。俺は．．．どうしたらいいんだ．．．。」

『お前は黒崎一護の息子や。それ以上でもそれ以下でもない。』

一は拳を床に叩きつけたのだった。

はじめは殺せると思っていた。なんて簡単な仕事なんだろうと。でも．．．。

あの笑顔を。

あの少年から奪うなんてできやしないんだ。

あの母親から家族を奪うことなんてできないんだ．．．。

12月27日。

朝。

「おはようございます。織姫さん。あれ？ウルさんは？」

「あ。おはよう。雪花君。」

雪花は結局冬休みずっと家に泊まることになった。二人も雪花を可愛がってくれてよくしてくれている。

織姫は朝から元気で微笑んで、雪花をテーブルの席にうながした。

「お父さんはさっき行っただわ。」

「どこへ？」

「大学。医学部なんだけどね。医学部卒で病院で先生やってる人は集まらなきゃいけないの。ま。ちよつと遅い同窓会みたいなものね。まあ一年の反省会みたいなものもあるらしいけど。」

「へへ。でもウルさんならさぼりそうですけど。」

「あら。雪花君にはそんなふうに見えてたの？」

「あ。いや失礼でしたね。すいません。」

「うつん。いいの。私もそんなふうに見えてるから。でも私が行ってって頼むんだけど、あんまり嫌な顔しないでいつも行くから安心してる。」

「へー。まあ織姫さんが言うんならウルさんも断れないですよー。」

織姫は微笑んただけで何も言わなかった。

ウルキオラは医学部に來ていた。この東京でも一番の大学。ここにこれるのは相当頭がよくないといけない。今日は午前はこの冬休みなのに来ている熱心な生徒に向けてのお言葉会。午後からは医者の方省會。夜からは飲み会というなんとも不愉快なプログラムだ。

ウルキオラは目をつむって織姫の言葉を思い出す。

『ちゃんと行ってね。年に一度だけだし。遊んできて。』

（遊びではないのだが……。）

ウルキオラは少し笑いながら大学に入った。

「やっぱり君も来ていたんだね。」

後ろから声がした。振り向くとやはりこの顔。

「石田雨竜か。また俺に話しかけるとはな。」

「変わってないね。一年前と。」

毎年行われるこの会。またこの男と出会ってしまう。石田は大病院を継ぎ、地味的には石田のほうが上だが石田はウルキオラを医者としても認めているので何も言わない。石田とはあの戦いからの付き合いだ。同じ医学部卒業。織姫と三人でよく授業をうけていた。

「井上さんとちゃんとうまくやってるのか？」

「貴様に心配されなくとも俺達はいつでもラブラブだ。．．．貴様こそ。もう三十も過ぎたくせにまだ結婚もしていないのか？」

「君には関係ないだろう。だいたい君達が結婚するの早すぎなんだ。井上さんは16歳だっただろ。」

「だからなんだ。法律には何の問題もない。」

「そういうことじゃ．．．．．。」

「貴様も早く女を見つけた。」

「むかつくな。君は。井上さんがもし僕の元に泣きついてきたら君なんかにもう返さないからね。」

「何をぬかす。織姫が貴様の元に泣きつく訳あるまい。ま。俺が地獄の果てまで追いかけて奪い返すがな。」

何を言っても顔色を変えないウルキオラ。石田は結構この会話は好きだった。

「早く行こう。遅れるよ。」

「別に遅れてもいいだろう。織姫のために毎年来ているがこんな会どうでもいいんだ。早く帰って心春にも会いたいものだ。」

「そういえば君の子供にまだ会ったことないな。会わせてくれよ。」

「誰が貴様などに。心春にくっつくに決まっている。絶対に会わせん。貴様の病院にもいかせんからな。」

（よっぽど大事にしてるんだな。）

今まで子供の話はしたことなかったが石田にはウルキオラという人間がわかってる。

ウルキオラはさっさといく。織姫に言われてきているのは本当だが実は石田の顔も見なかったなどと死んでもウルキオラは言わないだろう。

「本当に懐かしいね。ここ数年は大学にも入らなかったし・・・。
だいたい10年ぶりか。」

中の階段を上つておるときに石田は少し嬉しそうに言った。

「まさか井上さんが僕と同じ医学部に入るなんて思いもしなかったな。」

「貴様と同じじゃない。俺と同じだ。」

「はいはい。わかってるよ。でも井上さんがあんなに勉強頑張ったなんて少し信じられなかったんだよ。」

織姫は看護婦になるために必死に勉強していた。ウルキオラは別に無理をするなど言つたが織姫は決してやめなかった。

「織姫は・・・強いからな。」

自分を恐くないといった女。ウルキオラに心くれた女。

ウルキオラは少し笑つて先に行った。石田は彼の背中を追いかけこつた。

（井上さんは幸せになれたんだな。）

ある教室で生徒達が集まっていた。

「なあ知ってるか？今日、卒業生の石田雨竜が来るんだぜ。」

「石田雨竜って・・・あの大病院の？」

「そうそう。かなり優秀な成績だったし医者として尊敬するべき人だ。」

男子は雨竜派（？）だった。

「あとさゝ注目はやっぱり井上時雨でしょ？」

「ああ。あの下町のクリニツクの！ていうかあれ本当に日本人？外人に見えない？」

「私さゝ風邪ひいた時にあそこに行っただけどめちやくちやかっこよかったゝ！！！！うっかり熱があがつたもん！」

「石田さんもかつこいいけど井上さんは異常だよねゝ！一番の成績で卒業したっていうし！」

きやーきやーと女子は騒いでいたが男子は女子を睨んでいた。

その時おっさんの教師がはいってきて卒業生。今回集まった20数人の人を呼んだ。シーンとあたりは静まり返る。

ウルキオラは熱心に集まった生徒を見た。

（今年は生徒が多いな。よほど暇なんだな。）

（・・・そうなのかな。）

やがて前の卒業生の話が終わりウルキオラの番になった。

「では井上時雨さんよろしく願います。」

ウルキオラは前に進みでた。

19 使命（後書き）

今日のジャンプの一護かつこよすぎました！！惚れました！！

もう少し雨竜とウルのターンが続きます。実は医学部で三人は仲が良かった設定。クインシーはまだやってるよ。一護とはかかわってないみたいですけど。

20 汝が子に真実を語れ（前書き）

昨日のジャンプ・・・。39号のところでしたね・・・繋げない
といけなかったので来週号も買わなければ・・・。

20 汝が子に真実を語れ

ウルキオラは静かに机の前に立った。生徒達を見回す。そして静まる教室で凜とした声で言った。

「お前等は．．．どうやってここに来た？」

「．．．？」

ウルキオラの言葉の意味は誰にもわからずハテナのマークを空中に浮かばせた。

「親の金で来ているのか。」

ここは大学だ。医学部は相当な金が必要だ。貧乏人は誰もいないだろう。

「お前等は何のために医者になる？金のためか。親のためか。自分のためか？」

生徒達はぐくりと唾を飲み込んだ。

「どんな理由であれ医者になればこちらのものだ。そうだ。別に何も間違つてはいない。だが。それでは医者じゃない。医者という仕事をしているだけだ。医者とは患者のためにある。患者は病と闘う。しかし剣がないのだ。その剣を託すのが仕事だ。助けるのが仕事だ。そんなこともわかってないだろ？お前達は。」

生徒達は言葉も出ないようだった。

（本当に。ウルキオラ．．．。

君は人間なんだね。）

「これから人間という生き物をお前等は助けなければならぬ。だが絶望が付きまとう。死を毎日見ることになるだろう。人間は死ぬ。それは変わらん。だがお前等は少しでも人間を救いたいと思うなら・
・必ず医者になれ。なる気がないならやめろ。親に申し訳ない。以上だ。」

ウルキオラは教室から出て行った。次は石田の番だったが石田はウルキオラを追いかけた。

ウルキオラはベンチで一人で座っていた。何も考えていないような目。元々彼の表情は変わらないからわからないが。

「何で逃げるようにここに座ってるんだい？」

「うるさい。」

石田はウルキオラの隣に腰掛けた。

「君。中々かつこいいこと言ったね。」

「・・・・俺は自分で・・・自分の金でここに入った。ホストとか・
・織姫が絶対に喜ばない仕事をして・・・子供の顔も毎日見れなかった。必死で・・・医者になった。」

「そこまで・・・。」

「俺は心がわかったんだ。人間を好きになれたんだ。だから救いがあった。」

ウルキオラは目を伏せる。これが・・・。今の自分だ。
医者という人間を救う仕事。

前までは人間をゴミのように扱い喰らってきたのに。
そして今を・・・あいつらにもその意思があれば。
きっと人間が笑って生きれる。

「君は本当に矛盾してるな。」

「そうかもしれない。人間のことは大好きだが大嫌いだ。」
それは．．．全ての真実のような気がした。

「お母さん。シンたちは？」

心春が起きたのは１２時がまわっていた時間だった。織姫は昼ごはんを作っていたところだった。

「二人は遊びに行った。心春も早く起きればよかったのに。」

「起きたかったけど昨日はテレビ見てたから．．．あつ！もしかしてシン。今日発売のゲーム買ってきてくれるのかな！？」

「ふふ。そうかもね。」

実はシンは本当に心春が待ちに待ったゲームを買いに行っているのであつた。

「もしそうなら早く帰ってきてくんないかな？めっちゃくちゃ面白そうだったし。楽しみ。」

「はいはい。で。昼ごはん食べる？」

「うん。ちよーだい。」

心春は席について昼ごはんを食べ始めた。

「ねえ。お母さん。ずっと聞きたかったんだけど．．．。」
「なあに？」

「お父さんが戻ってきてお母さんと結ばれたって言うてたじゃない？あれ。もつと詳しく聞かせてよ！」

「えっ？そんな・・・。」

「いいじゃない。どんな気持ちだったの？お父さんが現れたとき。織姫は少しためらって息を吸うとゆつくりと話し始めた。」

「あれは・・・春になった時だったわ。」

桜が満開の季節。春。新学期を向かえ。織姫は二年生になっていた。日番谷たちは現世とソウルソサエティを行き来していたのであまり学校には登校しない。現世は冬の戦いの爪あとが少なからず残っておりソウルソサエティも時間がものすごくかかる修復作業にとりかかっていた。現世は一刻も早く修復作業をとり行うべく死神たちが動いていた。

織姫は元の生活に戻ることができた。たつきたちは藍染の顔を覚えていたが一護の活躍により藍染は死亡。それからは死神の仕事をあまり追求せず元の学校生活に戻っていた。

そして・・・自分が一番望んでいた生活のはずなのに・・・。
私は・・・どこかに穴が開いてしまっていた――。

20 汝が子に真実を語れ（後書き）

過去編に入っていきます。織姫とウルの大恋愛ですね（？）
どんな感じになるかは未定です。

いつも読んでくださってる方ありがとうございます！

勝手ながらもう20話に突入。今日で夏休みも終わりなのであまり
投稿できないかもしれませんがよろしく願いします。題名はマス
クドからいただきました。

21 汝、灰から還りても

どうしてあのとき――。

手が届かなかったんだろう？

もしあのとき届いていたら彼のことを本当にわかったはずだ。

彼はとても寂しい人だった。

本当はわかっているのにわかっていないのだろうか？

自分が優しい人で――。

何もないわけなのに。

織姫は目を開けた。何度も瞬きをした。目から涙がでていたようにで濡れている。また同じ夢。

「織姫？うなされてたみたいだけど大丈夫？」

「乱菊さん……。」

隣には乱菊がいて心配顔でのぞいてくる。

乱菊は自分の手を織姫の額にあてる。

「だ、大丈夫です．．．今日は学校に行くんですか？」

織姫は立ち上がって適当にパンをつまんだ。

「あ．．．今日は帰らないといけないの。だから行けないわ。」

「そうですか．．．。」

「本当はもっと早く出発しなきゃいけないんだけど織姫が心配だったからね。」

乱菊は微笑んだ。どうしてこんなに優しいんだろうか．．．。

「すみません。もう大丈夫ですから．．．。早く行ってください。」

織姫は必死で笑顔を作った。

「じゃあ．．．いつてくるわ。」

乱菊は苦笑してから消えていった。

織姫は制服をきて外に出てとぼとぼ歩いていた。最近はずっととしていて頭がおかしかった。いつもドジなのにますますドジになった。

「黒崎くん．．．。」

遠くのほうで黒崎一護の姿が見えた。織姫は黒崎を無意識に避けていた。

わかってる。私が弱いからダメなんだ。

彼は何も悪くない。私が悪いんだ。

あんな姿になってまで私を守ってくれた。

だから．．．。私は彼のことが大好きなはずなのに．．．。

今ではもう．．．そんな資格もないんだ。

彼はみんなに好かれている。だから私もその一人で――。

それ以上は求めない。

ごめんなさい。黒崎くん。私強くなれなくて――。

ごめんなさい。

最近は何もできなかった。そしてあの人の顔も忘れてしまおうと思
った。

だって辛いんだよ。苦しいんだよ。

そんな思いするなら忘れてしまおう――。

でも出来ない自分がどこかにいた。

「井上。」

「く、黒崎くん……。」

「大丈夫か？最近上の空だぞ。」

「うん……。」

黒崎は織姫の席に近づいて言った。

織姫はうつむいて彼の目を見れなかった。

「私。ちよつと……。」

「おい！井上！」

織姫は全力で逃げた。黒崎が追ってくる気配はなかった。クラスメイトが止めてくれたのか。

逃げた先は学校の屋上。すると授業のチャイムが鳴った。

（もういいか……。）

織姫は屋上で空を見た。雲がところどころにあって何とも好きじゃない空だ。空はどこでも美しいのに――。

（ダメだ。ダメだ。）

今、思い出そうとしてしまった。忘れると決めたんだ。

織姫は頭をブンブン横に振った。すると風が吹いた。とても強い風だった。痛いほどの。

「井上織姫様ですか？」

「へ？」

後ろから綺麗な声がしたので振り返ると瞳はブルーの瞳だが黒みがかかって印象的。髪はブロンドの美女が立っていた。服は学校の制服だったのでこの学校の生徒なのだろうか。美女は微笑んでまた聞いた。

「井上織姫様ですか？」

様と言うのに違和感を感じ織姫は頷くだけだった。

美女はまた微笑んで優雅に一礼した。

「お会いできて光栄です。井上織姫様。お時間よろしいでしょうか？」

織姫は訳もわからず硬直し、なんとか頷くだけだった。

22 汝が見知らぬ瞳

美女はその瞳を織姫の瞳に向けた。

「伝言をお預かりしております。」

「でんごん．．．？」

織姫は首をかしげる。この人は見たことがない。霊力も感じられない．．．。死神でもなければアランカルでもない。そして人間でもない感じがした。

「忘れないでください。」

「えっ？」

「ウルキオラ・シファア様。そしてアランカルの人々を。」

「！！」

「あなたが忘れてしまったては誰もが彼らを忘れてしまうのです。とても辛いことは忘れられることです。それはアランカルも同じなのです。確かに彼らはあなたの仲間を傷つけたかもしれない。ですが彼らは悲しい生き物でした。虚はどれも悲しい生き物なのです。だから忘れないでください。」

織姫は声がでなかった。

「そして素直にウルキオラ様のことを思ってあげてください。彼が好きなのでしょうか？」

「そんな．．．。」

美女は全て見透かしていた。

「あなたのお兄様のことも存じております。忘れられるのが一番恐れたことなのです。誰もがね。」

「．．．．．。」

「ウルキオラ様はきつとあなたのことを思っております。そして心

を理解しようとしている。わかってくれますね？」

彼女の不思議な瞳には何かが隠れている。

「では織姫様。二度とお目にかかることはないでしょうがどうぞお元気で。お幸せに。」

「ま、待って!!」

彼女は織姫をしつと見つめた。

「あなたは・・・どうして知っているんですか？」

「頼まれたからです。私が最も世界で愛し、そして憎んでいる方から。」

彼女は先ほどとは全く違う悲しい顔をした。そして風が吹いた。目を思わず瞑ってまた目を開けたら彼女はどこにもいなかった。

「今思えば・・・あれはお父さんが話したフィーリさんだったと思うの。」

「ふん。」

心春は夢中になって話を聞いていた。

「本当に私は馬鹿だったな・・・。」

呆れ半分で織姫は呟いた。

「それで！お父さんとはいつ再会したの？」

「それは帰り道だったわ・・・。」

夕方。先ほど彼女に言われた言葉を繰り返してその日をすごした。そ

してフラフラと自宅までの道を歩いていた。

『忘れないでください。』

「私はどうしたらいいんだろ？」

目を伏せて彼の顔を思い出す。とても寂しくて冷酷で無表情な彼。けれどとても暖かい人。

そして恐い。黒崎一護が死んでしまう恐怖。あの絶望。そして彼が．．．。

でも。どんなに彼が黒崎一護を倒しても恐くなかった。だって知っているもの。

真実を。

織姫は自然と笑顔になる。真っ直ぐ道を見た。綺麗な夕日――。

「あれ？」

誰がいる。夕日に照らされているので顔は見えない。織姫は歩いた。彼の顔が見てみたい。

織姫が近づいたとき――。

「久し振りだ。女。」

誰の声？誰の？知っている。ずっと求めてきた声。忘れられない声。

「ウルキオラ．．．さん。」

織姫は大粒の涙を流して彼の名を小さく呼んだ。

涙を流しているのに視界はよかった。

彼の顔を真っ直ぐに見た。おっとりとした目は変わらず輝いて。髪も綺麗に整って。涙のような模様はなくてどこから見ても人だった。彼は微笑んでいた。アランカルのように最後――。あの瞬間に見たあの微笑。

「人なの．．．？」

「そうだ。」

彼は頷いた。織姫はそっと彼の頬に手をそえる。

「私っ！ずっと会いたかった！でも．．．あなたは敵で．．．

黒崎くんの敵．．．なのになのに！私は！あなたに甘えてしまった！優しさに甘えてしまった！わかってる！私が弱いからだ。だから苦しいから忘れてしまおうと思った。けど．．．けど．．．。」

叫んだ織姫をウルキオラはそっと抱きしめた。彼がああウルキオラでないなんて微塵も考えなかった。

「俺は．．．ここにいます。」

「．．．．．っ。」

「大丈夫だ。」

彼はどこまでも優しくて。織姫は涙が止まらなかった。

23 汝、死ぬまで忘れるな（前書き）

申し訳ありません。

更新もあまり早くできず、疲れもたまり駄文の上に題名の数字を間違えました。

誤字が多いですが読んで頂ければ幸いです。

23 汝、死ぬまで忘れるな

そして織姫はウルキオラと共に家に住むことを決意した。まず乱菊に話した。

「・・・それは難しいんじゃない？」

「どうしてですか？」

「彼はまだ虚だから。私達が黙ってない。」

「そんな！もう彼は死神と闘う力も持ってません！それでもですか？」

「・・・それでも虚よ。死神は虚をほおっておく訳にはいかないわ。」

乱菊は真剣な顔をしていた。織姫は今にも泣きそうだった。

「織姫。」

乱菊は織姫の頭を撫でる。

「私は織姫が好きよ。だから織姫の応援する。」

「ほんと・・・？」

「彼のことを黙っておきなさい。そうすればしばらくはばれないわ。でもいつかわかってきつと追手がくる。大丈夫よ。私は口が堅いからね。」

「ありがとう・・・。乱菊さん。」

織姫の部屋で二人は壁に背中をつけて座っていた。

「ウルキオラさんは．．．どうして私のところに現れたんですか？」

「面白いことを聞く。女。」

「女じゃなくて織姫！です。」

「ではお前も敬語はやめろ。」

織姫は言葉に詰まって赤くなった。

「答えは．．．俺は心というものを理解したい。お前といればそれがわかると思った。この感情というものが特別ならな。」

「．．．それって。」

「死んでも忘れるな。織姫。俺がただ一人愛す女はお前だけだ。」

織姫はきょとんとした。何と言われているかわからない顔だ。

「うん。」

ウルキオラは織姫の頬に触れる。そしてそつと引き寄せると優しく口付けた。織姫はそれがとても強い意志に感じた。そして自然に涙が流れた。

「織姫。」

「えっ？なにこれ？」

ウルキオラが差し出したものは指輪だ。綺麗な紅い宝石が散りばめられキラキラ輝いていた。

「人間は一生その女と添い遂げるときに結婚するのだろうか？そして指輪を男が渡す。」

「．．．それって私と結婚するってこと？」

「俺はお前の他に愛す女などいない。一生傍にいるのだから別に結婚してもいいんじゃないか？」

ウルキオラはなんのためらいもなく言った。織姫はうつむくだけでその指輪をじっと見ていた。

「いやなのか？」

「ううん。嬉しすぎて。ありがとう。ウルキオラ。大切にする。」

織姫は指輪を指にはめた。よく似合っている。

織姫は正直迷った。心のどこかで。黒崎一護。守ってくれた人。誰よりも強い人。決して彼とはもう結ばれない。ずっと願っていたことだった。

でも。

今ではウルキオラが誰よりも好きになってしまった。

5回生まれ変わっても彼を好きになると想っていたのに。

「ええ〜〜〜！！織姫が結婚！？？」

クラスメイトに正直に話すともものすごく大きな声を出された。

「どうして〜〜よ〜姫〜！！」

千鶴が泣いて叫んだ。

「井上さんが結婚。」

「ねえ。織姫。私知ってるやつと結婚すんの？」

たつきが心配顔で言った。

「知らないと思う。今は会わせられないかもしれない。ごめんね。たつきちゃん。」

「わかった。織姫。泣かされたら私にいいな。私がやり返してあげる。」

「ありがとう。たつきちゃん。」

「その一年後に二人を妊娠したのよ。」

「すごい。お母さん。私とあんまり歳変わらないのに。」

「私は早すぎたけど。心春はゆつくりしなさい。」

「へへ。」

「はい。お話おしまい。恥ずかしかったわ。」

「ありがと。お母さん。あゝ。シン早く帰ってこないかな？」

「その内帰ってくるわ。お昼ごはんは家で食べるって言ってたから。」

「うん。テレビ見とこ。」

織姫は黙っていたことがあった。

結婚して子供を生んだとき。彼はお金のためにホストの仕事をした。でも織姫は何も嬉しくなかった。すぐにナンバーワンになったから家にも帰ってくるのが遅くて・・・ずっと寂しかった。

ウルキオラはこうも言った。

「俺は自分が好きになれない。」

なんて寂しい言葉なのだろうか。

「心春は可愛いが。シンは俺にそっくりだ。だから好きになれないかもしれない。」

「お願い！自分を嫌いにならないで！私はあなたが好きだから！」
そう泣いてしまった。彼はちゃんと抱きしめてくれた。

どんなに自分が醜くても嫌いにならないで。

誰も幸せになんてならないから。

23 汝、死ぬまで忘れるな（後書き）

過去編・・・終わり？まだ27日のままです。

24 過去を断ち切れ（前書き）

パソコンを買いました。なので更新が早くなると思います。パソコンが届くのは来週のどれかなので・・・なんとも言えませんが（＾

＾：）平日もなるべく更新します

24 過去を断ち切れ

「でも、以外。心春ちゃんてこんなゲームすんだ？」

雪花は本気で驚いていた。シンが珍しく出かけると言ったので聞いてみたら心春のゲームを買いにいくというのだ。そのゲームといえは心春が年齢に合わないアクションゲームでグロテスクな表現が含まれるものだった。

「俺もこのシリーズ全部やってるけど……。まさか心春ちゃんがね。心春ちゃんてどうとかポ○モンとかやりそうなのに。」

「別に心春が喜ぶなら何でもいい。クリスマスプレゼントとして前から約束していたしな。」

シンはマフラーで口を隠しながら言った。

寒い歩道をテクテクと二人は歩いた。冬という季節を空がものごとっている。雪花は空を見て目を細めた。

「何だ？ 貴様。さつきから。」

「ん？ いや。また歳とるんだな。って思って。一年なんかすぐに過ぎてこのままジジイになるんだな。って。ま。別にいいけど。早く帰ろうぜ。」

雪花は先に行く。シンは一瞬声をかけようとしたがやめた。

「雪花君？」

「？……上田？」

シンと雪花の前に一人の少女が現れた。あまり可愛いとはいえない顔で派手な感じではない。シンは実はクラスメイトの顔は覚えていた。今のクラスは覚える気はさらさらないが卒業したクラスは思い

出して覚えている。そう彼女は上田綾子だ。

「覚えてる？井上君も．．．。」

シンに目を向けるがシンは興味ないように目をそらした。

「どしたの？こんなところで。」

「そこでゲーム買ったの。」

「あ。君、そっついえば好きだったな。俺達もだよ。」

綾子は微笑んだ。前髪が長くて目が見えにくい。

「ねえ。雪花君。今度ゆっくり会える？」

「どうして？」

「どうしてって．．．えっと．．．お互い違う学校に行ったしたまには．．．お話とか．．．。」

「それって友達としなよ。どうして俺なの？」

「それは．．．。」

「俺にはまだ君が俺に気があるみたいに聞こえるよ。」

「！！」

綾子はすごく悲しそうな顔をして泣きながら走り去った。

「なんだったんだ。」

「あれ？覚えてない？」

「あの女は知ってる。一学期の前半いじめられてた女だろ。」

「そうそう。んでね。俺。彼女と付き合ったんだ。そしたらいじめは終わった。単純だよ。俺が不良だったからだろ？」

「そうだろうな。」

「俺。高校はいるために不良やめて勉強するから彼女ゼーんぶぶつたんだ。なのに今更会いましようって。ねえ？」

「俺に聞くな。」

「俺は誰かを傷つけないんだよ。俺誰も好きじゃなかったし。それで彼女に会ったら傷つけちゃうだろ。」

雪花は足を大腿にして歩く。

「お前は意味がわからん奴だ。昔から。」

雪花は嬉しそうに笑った。

「そうですか？」

「何、にやついてる。気色が悪い。」

「っるせ。」

その時パラリラ〜と音が鳴った。これは暴走族の奴等だと一瞬でわかった。

「雪花総長！！」

若い男が雪花に叫んだ。

「お久しぶりです！！雪花総長。」

雪花は声も出ない顔をして口をあんぐり開けている。と次の瞬間。
「何やってんだ！！てめえらあああ！！」

あまりにも大きな声だったので不覚にもシンは本気で驚いた。

「おい。山崎。俺を総長なんかと呼ぶんじゃないやねえ。殺すぞ？ああ？」

「す、すいません！！」

雪花は暴走族のリーダーと思われる人物の胸倉を掴んだ。

「てめえら。この年末にくだらねえことしやがって馬鹿じゃねえのか？アホ。ドアホ。俺が矯正してやろうか？ん？」

数十人の暴走族は言葉が出ないようだった。

「んで。てめえら何の用で俺に声かけた？くだらねえことだったら踏み潰すぞ。」

全員びびりまくっていたが山崎はちゃんと言った。

「じ、実は春高の奴等に狙われてて．．．逃げてる場所に雪花さんが．．．。」

「ああ？てめえらホントに暴走族か？俺より二つも年上か？俺に喧嘩ふっかけてボコボコにやられた奴等か？度胸もねえのか？」

「す、すんません。」

「西高〜！！」

違う暴走族がバイクに乗って登場した。雪花は舌打ちをして叫んだ。

「てめえら人気のねえとこ行くぞ。そこの倉庫だ。わかったな!？」
「はい!!」

雪花は走った。シンのことを気にもせず。シンは衝撃を受けた。全然知らない雪花がそこにいた。

倉庫には春高と西高の暴走族が集まった。雪花はその中心に立った。
「てめえは伝説の総長・・・雪花薫・・・。」

「はあ?勝手に総長にしてんじゃねえよ。俺は一人で喧嘩してたんだ。何処の誰かが勝手に言っただけだ。んで?こいつら潰したいのか?」

雪花は後ろの山崎たちを指差した。

「ああ。そうだ!俺のシマで馬鹿しやがってむかつくんだよ!」

「ふゝん。でもさ。いつからお前のシマなの?」

「いつからって・・・。」

「知らないの?弓場組の組長さんは昔。10年はシマをお前に守らせるって言ってくれたんだぜ?ま。俺は断ったけどね。」

「!!」

弓場組は東京でも有名な組だ。その組長が雪花にシマを預ける・・・。

「さようなら。」

雪花がニツコリ微笑んだ後。一瞬で事はすんだ。

「記憶消すぐらいに殴ったから。覚えてないよね」。後で復讐にこ

られてもすごい困るから！。」

（すげえ．．．。）

30人はいたであろう暴走族をたった一人でやってしまった。

「雪花！」

「シン！」

雪花は目の色が戻ったように我に返った。

「ごめん．．．。」

「ったく。腹が減った。帰るぞ。」

山崎たちはあんど口を開けた。

「貴様等。」

シンは冷たく言った。

「二度とこんなことに巻き込むな。」

二人は振り向きもせず去っていった。

「ごめん。」

「．．．．．。」

雪花はうつむいて5回目のごめんを言った。

「俺．．．自分がわかんない。まだ不良やってたのが残ってる。喧嘩も大好きだったし。女も大好きだった。なんか今戻りそうになった。なんでだろ？変わってないのに。」

変わったことはある。心春に好きな人ができて．．．殺されるかもしれないことがわかった。憎しみと悲しみが混ざっていった。

「お前はお前のままでいい。お前がお前と呼べる人物に。」

シンは小さく言った。それが雪花にははっきりと聞こえた。

「過去を断ち切れれば．．．自由か．．。」

「何だ？」

「ん？いや○F12でアー○エが言ってたな〜って知ってる？あれ俺何回もやり直した。面白いよー。」

「なんの話だ。」

「いやいや。あつ。見えてきた。あゝ腹減ったゝ俺にもゲームやらせてな〜。」

シンはすごく嫌な顔をして家に入った。

自由になりたいよ。

思い出はいつでも優しくないから。

現実よりも俺をズタズタにしてしまう。

でもそれを取り越えるのが人間なのかな。

何もできない人間の。

24 過去を断ち切れ（後書き）

意味わかりません。すいません。○ばっかで

25 永遠の名(前書き)

新しいパソコンはいいですね！土日更新できなくてすみませんでした！相変わらず誤字が多いですがどうぞよろしくお願いします！

25 永遠の名

「くそっ！こいつら強いな。心春ちゃん！ショットガン使って！俺ライフルで遠くからうつから！」

「はい！隊長！」

雪花と心春はゲームに熱中していた。シンは心春が嬉しそうなのでふっと笑った。最近黒崎や虚のことで彼女には辛い思いをさせていた。

「お母さん。」

「何？シン。」

「父さんはまだ帰らないんですか？」

「そうね・・・。飲み会って言ってたから遅くなるんじゃないかしら。」

織姫は落ち着いていた。

「君。飲みすぎじゃないか？」

石田は完全に酔っているウルキオラをゆすった。同じ医学部卒の彼らと飲んだ後、二人はまた飲んでいた。石田はあまり飲まなかったがウルキオラは強いのかたくさん飲んでいた。

石田は動かないウルキオラを起こした。そしてそのまま支えて自宅

へ向かうのであった。

ウルキオラの家は知っていたので迷うことなくいけることができた。ちょうど織姫や子供の顔も見えたかったのでちょうどいいと石田は思った。

「やだ！石田くん！？」

玄関につくと織姫が現れた。インターホンも押していないのに。

「久しぶり。井上さん。」

「うん！そうだね。それよりごめんなさい。ウルキオラが・・・。」

「なんか飲みすぎたみたいだね。家に来たんだけど・・・。」

「ごめんなさい！入って！」

織姫はとも申し訳なさそうな顔をした。

時刻は10時頃。雪花と心春はまだゲームをしていた。シンはあまりいい顔をしなくなりつつあった。

「お邪魔します。」

「！？」

シンは玄関から声がしたのを聞き取った。男の声だ。

シンが玄関に向かうと男に支えられている父がいた。

「シン！ちょうどよかったわ。お父さんを二階に運んでくれる？」

「は、はい。」

「僕も手伝うよ。井上さん。」

「ほんと？ありがとう。石田くん。お茶が何かだすからリビングに来てね。」

シンと石田はなんとかウルキオラを二階に運んだ。シンの力は強いのでどうってことなかったがこの男も強い。

「あの・・・。」

「ああ。自己紹介がまだだったね。僕は石田雨竜。君のお母さんとお父さんと同じ大学なんだ。井上さんとは高校から同じなんだ。」

「そう．．．ですか。たしかあの総合病院の．．。」

「あ。知ったのか。光栄だな。」

シンは警戒していた。この男からは靈力を感じた。

「ありがとうございました。」

シンはペコリと頭を下げる。

「いいえ。君は本当にお父さんに似ているね。ビックリした。」

「よく言われます．．．。」

石田は少しだけ笑って階段を下りた。

「石田くん！ごめんね！手間とらせちゃって。」

織姫は頭を下げた。

「いいや。僕も井上さんと会いたかったし子供たちも見なかったし。」

「

「きゃー！来たー！」

「大丈夫だ！俺が助ける！」

ゲームで回りが見えていない二人を石田は微笑んでみていた。

「ご、ごめんね。」

織姫は目を伏せ言った。

「いやいや。楽しそうでよかったよ。じゃ僕は失礼します。」

「も、もういいの？」

「うん。明日もまだ仕事があるから。じゃ。」

石田はさっさと玄関まで行って靴を履いた。そのときバタバタと足音が聞こえる。

「あの！すみません！ありがとうございました！」

雪花と心春は声を合わせて言った。

石田は微笑んで扉から出た。

「井上さん。」

「？」

「本当に君が幸せそうでよかった。」

「．．．．．ありがとう。」

「それと。」

「何？」

「ウルキオラ。少し様子が変だ。彼が酒を飲みすぎて回りに迷惑をかけるとは考えにくい。」

「そう言われればそうだ。ウルキオラの性格からして考えにくい。」

「じゃあ。さようなら。井上さん。」

「うん。」

石田と手を振りあいやがて姿は見えなくなった。

織姫は先ほどの言葉で心配になってウルキオラが眠る部屋へ行った。ウルキオラはまるで死んでいるかのように眠っている。織姫はその細い手をぎゅっとつかんだ。彼がどこかに行ってしまう不安で胸がいつぱいだった。

しかし突如織姫は引き寄せられた。ウルキオラの上に乗ってしまった。ウルキオラは小さく目を開けていた。ウルキオラの綺麗な顔が目の前にあった。織姫は顔が赤くなった。

「何を恥ずかしがってる．．．。」

「だって．．．。」

「すまなかった。」

じっと見つめられると何故か唇が動かなかった。

「夢を見てたんだ。虚に襲われる夢．．．。」

「・・・・・・・・。」

「俺は怯えていた。あのとき……。黒崎一護の姿があった。俺は戦える自信がない。守る自信もなくなっている…………。」

「どうして？…………ウルキオラは何も戦わなくていいんだ？私が戦うから。だから…………そんなこと言わないで。何でも背負わないで？私が一緒に苦しみだって幸せだって一緒に分け合ってあげるから。夫婦なんだから。」

「織姫…………。」

そつと二人は口づけを交わした。次第に強くなっていく。

何十年先だつて彼との愛は深まっていくだろう。

生まれ変わっても二人は巡り合うだろう。

ずっと…………ずっと…………。

続いていく。

25 永遠の名（後書き）

グダグダですいません。

26 死と希望（前書き）

火曜日と水曜日は更新はできないと思います・・・すみません。

26 死と希望

まだ一月の上旬。今日は学校が始まる日だ。

「心春！早くしろ。」

「まって〜！！もうすぐ〜。」

「何やってんの？心春ちゃん。」

「知るか。」

シンと雪花が待っているとかやがて心春が玄関にかけてきた。

「お待たせ〜あ〜遅刻！ダッシュで行こう！」

そついうと心春は一人ダッシュで行ってしまう。シンはすかさず心春の後を追った。

「遅かったな。」

「て、てめー。マジで本気だすなよ。コンチキショー。俺がお前らのペースに追い付けるとでも思ってたのか？」

雪花は大量の汗をかき、本気で走ったにも関わらず、まったく追いつけなかった。始業式の終わりの時間にやっと学校についた。もちろん、二人はギリギリであつたがチャイムが鳴る前に学校についたのである。

「それよりあいつが来ていない。」

「？誰？」

「黒崎一だ。」

「ああ。そついや。この冬休み、ずっと家にいたし……心春ち

「やんもあんまり話しかけなかったしな。どうしたんだろ？黒崎。」

「どうでもいい．．．が。あいつがまだ俺たちを殺すつもりなら話は別だからな。警戒して損はないだろう。」

「んだな。正月のあいさつでもしてくか？」

シンは沈黙した。

「シン？」

「わかった。あいつの家を知ってるのか。」

「知ってるよ。俺いやさ。元子分の奴がクラスの奴の情報とか調べてくれるの。だから連絡すればオッケーよ。」

シンは雪花を見たが何も言わなかった。

「きゃくく！！井上君！！あけおめくく！！」

女子が沸いてきた。

（やっぱシンはすげえな。正月早々きゃくだもんな。うらやましくね。）

雪花は少し笑ってやった。

「本当にこつちなのか？」

「だと思つよ。話ではそうだけど．．．。」

雪花とシンは完全に迷っていた。方向音痴ではないはずなのだが家が密集していてよくわからない。

「たぶん。アパートだと思うんだよ。うーん．．．弱ったな．．．人も全然いねえし。」

「雪花。」

「あ？」

シンは冷や汗をかいた。ひどく寒気がした。ひどい音がした。誰か

の叫び声のような…………。

「！！」

二人は反射的に後ろにとんだ。振り返った先には化け物がいた。涎のような汁を大量に流した化け物。

「ホロウ…………？」

「そのようだな。」

シンは冷静を装ったが冷静ではなかった。生まれて初めて虚と対峙したのだ。心春は知らなかったのだからもっと怖い思いをしたはずだった。

シンは奥歯を噛んで虚を睨みつけた。虚に動く気配はないが雪花でさえ簡単に食い殺してしまえるような気がしてならなかった。

「逃げる…………雪花…………。」

「シン！？」

「俺がなんとかする。早くいけ。」

雪花はシンを見ただけで何もしなかった。

「てめー本当にシンか？お前は俺のために何かする奴じゃない。」

「貴様ツ…………こんなときに何言ってる…………。」

「俺は逃げないよ。知ってた？俺、意外に頑固なんだ。」

雪花は笑って言った。その時。虚が動いた。

素早く気持ちの悪い腕を振るう。シンは避けながら虚閃を放っていた。シンの霊力から考えて3回しか打つことはできない。

腕は潰れることはなかった。効いているようにも見えなかった。

「くそっ！」

「シン！」

虚はズンズンと近づいてくる。その度に雪花は恐怖した。シンは何をしているのかわからず、虚閃を放つ。しかし効かない。2つうつともう出なかった。

（ここで…………死ぬのか…………。）

雪花は全然かまわなかった。でもシンは…………。

ドン！ものすごい音がした気がする。空気が重くなった。雪花は閉じていた目をゆっくり開けた。シンは目を見開き心底驚いていた。

「黒崎．．．？」

雪花は目の前の男を見ながら言った。後ろ姿で顔は見えないがオレンジ髪の死神．．．。

「黒崎．．．．。」

「シン？」

「黒崎．．．一護．．．。」

シンはその人を覚えていた。

26 死と希望（後書き）

短いです。

27 未来への手紙

「黒崎．．．．一護．．．。」

目の前に現れた死神は父を一度倒し、母の大切な人だ。シンは憎みも尊敬も何も感じなかった．．はずだった。

「一護．．．？」

雪花が呟くと一護は自らの剣で虚をなぎ倒していた。虚は一瞬で消え去っていた。

「大丈夫か？お前ら。」

一護は二人に言った。

「どうして．．助けた．．。」

シンは冷たく言い、彼を見据えた。

「どうしてって．．ピンチだっただろ？それにお前は井上の．．。」

「ふざけるな！！」

シンは大声で叫んだ。

「貴様の息子は俺たちを殺すといった！なら何故貴様は俺たちを助ける！？」

はあはあとシンの息遣いは荒くなった。

一護は唇をきゅっと結び口にした。

「あいつはあいつの仕事がある。俺は俺の仕事をしただけだ。」

「．．．．。」

「お前らを虚から守ることだよ。」

「！！」

そう言うと彼は消え去った。

「どういうことだ．．．シン？」

夕方。結局黒崎の家にはいなかった。家に帰っているときシンは無言だった。いつもそうだがあんなことがあった後だ。雪花も精神的に落ち着かなかった。だからもうはつきり聞いていた。

「あいつは．．黒崎一の父親だ。俺の親父を一度倒し．．俺の母の大切な男だ。」

「そうか．．．。なあ。シン。俺．．家に帰るよ。」

「．．．．そうか。」

「うん。もう冬休みも終わったしな。ありがと。またお礼にいくから。それと．．．．今日のことはウルさんと織姫さんに言うのか？」

「．．．．言わない。誰にもな．．．。」

「わかった。」

雪花はそのままシンと別れた。恐怖という感情を隠して。

数時間前。

「どこかな？」

心春はうきうきしながら歩いていった。片手には黒崎一への誕生日プレゼントが入っていた。彼の誕生日は自己紹介カードに書いてあった。担任は必ず書けという。教室の後ろにはつてあるがたいていの人間は気にもとめない。

心春はたまたま覚えていた。1月1日。それが彼の生まれた日だ。確かに彼に近づくのはよくないと思う。けれど好きになった人だ。今でも彼を思う。

「うゝ。わかんない。」

自分はかなり方向音痴だと心春は自覚していた。地図を持ってきても意味はなかった。

「井上!？」

「黒崎君!?!」

黒崎は何とも楽しそうなジャージを着ていた。とても薄着だ。

「黒崎君．．．寒くないの？」

「あ?別に．．．それよりなんでこんなところに．．．。」

「えっ?ああ．．．あのね。黒崎君が．．．今日学校に来なかったから．．．。」

「ああ。それで心配してきてくれたのか．．．?」

「あ．．．うん。」

「あんがとな。井上。」

「ううん。で。大丈夫なの?」

「何が?」

「だから何かあったのかと思って．．．。」

黒崎は考え込んだような顔をした。やがて真剣な顔をした。

「本当は会いたくなかったが．．．。井上。」

「は、はい!」

「話があるんだ。聞いてくれ。」

「．．．。」

そして黒崎は自分のアパートの階段を上った。心春はそれについて行った。外から見るとあまり綺麗なアパートではないが中に入っ

みるとわりと清潔感があつた。

黒崎はちゃぶだいの上にはつとお茶を出してくれた。暖房器具のこたつがある。だがつかっていないようだった。

「井上．．．俺が来た理由知ってるか．．。」

彼は神妙に話し出した。

「知ってるよ．．。」

「なら話は早いよな．．俺はお前たち兄妹を殺しに現世に来た。そして実行するつもりだった．．。」

「つもりだった．．？」

「．．．俺にはもう．．．できない。」

「ど、どうして．．。」

「わかんねえけどそんなことしたら俺は．．一生後悔する。そんな気がするんだ。」

「！」

「でな。井上。」

「は、はい．．。」

「俺と一緒にソウルソサエティに来てほしい。」

28 戦いの覚醒

「わ、私がソウルソサエティに．．．？」

「ああ。俺一人ではどうにもならない。だから井上が何も力を持ってないことを証明するんだ。死神はただの人間を殺せないからな。」

「．．．．．。」

「できれば今決めてほしい。シンは反対するだろうからな。」

「シンは！シンはどうなるの？」

「シンは．．．．井上が力がないならシンもないって思うんじゃないか？でもシンが行くならあいつの力は確実にあるんだ。だから．．．。」

「わかった。今から行きましょう。」

心春は決めた。シンのために戦うことを。

シンはとぼとぼと家に帰った。自分がそこにいないかのように。

「ただいま．．．。」

「あつ。シンおかえり．．．。」

「どうか．．．したんですか？」

様子が変な織姫にシンは首をかしげた。

「あのね．．．心春知らない？」

「心春？」

「お父さんが急に出て行ったから．．．。」

「！」

「私にはわからないの．．．。」

シンの思考は止まった。何もできなかった。自分は今まで無力だったのだろうか。

ウルキオラはずんずんと歩いていった。あの男のいるところに進んだ。そこはどこかの屋上だった。男は高いところから空を眺めている。死神の姿で。

「貴様。心春をどうした？」

一護は答えなかった。

「答える。」

ウルキオラは睨み続けた。

「答えて……。」

一護は振り向く。

「答えて何になんだよ？お前は子供なんかより井上のほうが何倍も大事だろ。」

「！……違う。」

「違わない。お前はきつと娘と井上の命をとるなら井上の命をとる。なんでも井上が一番だ。だからお前はなんもすんなよ。」

「……。」

「これはあいつらの戦いだ。」

ウルキオラは何も言うことはできなかった。

一護が言ったことは事実だ。自分はきつと織姫が一番だ。本当は織姫意外いらなかった。でも彼女が笑うから。だから子供もいいと思った。

心春はかわいい。織姫にそっくりだから。でも自分の血が流れている子供を哀れに思った。こんなアランカルが血が流れている子供。

心は自分によく似ていた。だからもつと憐れに思って悲しんだ。

これは子供たちの戦い。ウルキオラは何もできない。

「いいか。井上。」

「うん。」

二人はソウルソサエティにとんだ。

「ここがソウルソサエティ．．．。」

「井上。こっちだ。」

すると織姫は引き寄せられる。

「く、くろさ．．．。」

「黙ってくれ。今見つかるわけにはいかないんだ。俺は一樣隊員だから．．．ここに入れるけどな。」

「．．．．．。」

黒崎に抱き着く形で二人は歩いた。

浮竹の隊舎には見張りの人間はいない。なので簡単に入ることがで

きた。綺麗な庭に二人は入った。すると離れたところに浮竹がいた。浮竹は驚いたように目を見開き飲んでいたお茶を置いた。

「一。久しぶりだね。」

「はい。浮竹隊長。ご無沙汰しています。」

「で。どうしたんだ？その子は？」

うまく隠れていたつもりだったが無駄だった。

「はい。彼女が井上心春です。」

「ん？・・・ああ。井上さんの子か。お前が殺す子だろう？」

「はい。そうでしたが、彼女は敵意も力も何もありません。脅威にはなることはないでしょう。ですから彼女を殺す必要はないと自分は判断し、隊長の方々にも証明するため彼女を連れてまいりました。」

「・・・。命令したのは黒崎だったね？」

「はい。」

「俺には決める力はない。総隊長が彼に命じ、そしてお前に命じたなら二人に言いなさい。だが彼女には力がある。井上さんにそっくりな力が。彼女は先の対戦で大きな戦力にもなり我々の脅威にもなった。この意味がわかるか？」

「わかりません・・・。」

「脅威は消さなければならぬ。仮に・・・虚の力があるなら。」

「浮竹隊長！」

「俺は何もしないが勘のいい奴なら自分の手柄にしようと襲ってくるだろうな。」

「！」

「うゝきゝたゝけゝはん。」

二人が振り返ると金髪のジャラジャラとした宝石をつけた死神が立っていた。その死神はニヤリと笑うと近づいてくる。

「何や。一。もう連れてきたんかいな。」

千石は微笑む。

「可愛い娘やな。お嫁さんにしたいぐらいや。でも・・・。虚を

お嫁にはできんなあ。」

「千石隊長！彼女は．．．虚じゃない！」

「いやいや。プンプンしとるで敵意ってもんがな。多分無意識やと思っけど。この娘に宿ってる虚が俺らを殺したいと叫んどるんやろな。死んだほうが楽やで。この世界では息するのもしんどいやろ？」

「そんなこと．．．。」

心春は震える声で言った。

「大丈夫や。一瞬で綺麗に終わらせたるから。」

千石が長い腕を伸ばしたその時――。

黒い刀が千石の腕を切り落とした。

「！！！！！」

黒い服をまとっている目の前の男。

「だ、誰や．．．。」

心春は目を疑った。

「心春の兄だ。」

「シン．．．。」

28 戦いの覚醒（後書き）

誤字が・・・いつものことですがすみませんWWW

29 アイーアツプス（前書き）

死神がよくわかってません。ざんぱくとうのぱくって字もわかりません。

29 アイーアツプス

シンは死神を睨むと黒崎と心春を抱え一瞬で消え去った。腕を斬られた千石がぜえぜえと息をしていた。

「なんや．．．あいつ．．．。」

「彼は．．あのアランカルにそっくりだな。驚いたよ。」

「う、浮竹はん。腕は．．治るんかなあ？．．．。」

「わからない。君は四番隊に行ったほうがいい。」

「は．．．はあ．．．。あいつ．．．絶対許さんで．．．。」

浮竹は彼の目がギラギラと揺れ、殺気溢れているのに気が付いた。

「俺は．．．総隊長に知らせて彼らを搜索しよう。ほかの隊長格にも協力してもらおう。」

人目のつかない森で三人は空から降りた。シンは自分の剣を鞘に入れ、黒崎を睨む。

「シ．．．がはっ．．．!」

黒崎は思いつきりシンに殴られていた。黒崎は少し吹っ飛んで頬を膨らませる。

「シン！やめてよ！何するの！？」

「黙ってろ。」

シンは心春に冷たく言った。心春は初めてのシンの顔に心底驚いた。「貴様はこんなもので済むと思っているのか？全く心底自分に腹が立つ。貴様のような甘ったれな死神を心春の気持ちを汲んで生かしておくのが間違いだった。さっさと殺しておけばよかった。」

「・・・・・・悪い。」

「言え。心春を殺すつもりでここに連れてきたのか？」

「違う！俺はもう井上もお前も殺したくない！信じてくれ！」

「貴様の言葉など信じん。どちらでも結果は同じことだ。」

「どういう・・・・。」

「俺は貴様ら死神などに命をくれてやる気は毛頭ない。俺は心春をここから連れ出す。貴様は俺に利用されるのだ。貴様の価値は俺が決める。いらなと思えば俺が貴様を殺す。」

そう言つて黒崎の斬魂刀を取り上げた。黒崎は何も反抗しなかった。「わかつているだろうな。貴様が心春に危害を加えれば貴様の大切な人間すべて俺が消す。下手なまねはするなよ。」

「ちよつと待つてよ！シン！」

心春はシンの腕をしっかりとつかんだ。

「黒崎君は本当に私たちを殺す気はないんだよ！ちゃんとさっきの隊長さんのところで言ってくれたもん！どうしてシンは・・・・ここに来たのよ！私は私なりにシンを守りたくて・・・・だから・・・・だからっ！」

心春の目から涙があふれ出した。シンは見たくないのか目を閉じた。「心春・・・・。わかつている。お前がこの男を信用していることぐらい。お前はお前の力に屈しないぐらい強い。でも俺はお前ほど強くない。俺は弱い。今にも不安で仕方がない。いつこの心が壊れるかわからない。でも俺はお前が必要なんだ。俺はお前がほしい。俺

はお前を守る。そのためならどんなこともできる。だから俺はここに来た。」

シンは黒く輝く目を向ける。心春にはそれが赤く見えた。

「シン．．．。」

「黒崎。」

「何だ．．．？」

「今。貴様の考えていることはなんだ？」

黒崎は一瞬ふっと笑った。

「俺はお前と同じだぜ。井上をここから連れ出す。」

「いいだろう。貴様を信用はしていないが俺が貴様を飼ってやろう。」

「

「まずはここから動こう。多分。浮竹隊長は総隊長に知らせてるだろうからな．．．。まあ今の総隊長は前の総隊長より気まぐれだからな。大丈夫だとは思っ．．．。」

「何が大丈夫なの？」

「最悪なシナリオさ。総隊長が出て俺らを殺すこと。」

「！！」

「気まぐれだから来る可能性もゼロじゃないけど低確率。あの人が戦った姿を知るのは限られた人だけだ．．．。でも隊長格は俺らを探すかも。親父がやった旅禍の一件みたいにな。まああれは異例だけだな。」

「これからどうしたら．．．。」

「浮竹隊長が知らせたならもう俺の地獄蝶は使えないな．．．。」
そう言っつて黒崎は動き出す。シンは心春を抱いて黒崎に続いた。

「あの人に頼ろう。」

「？誰だ？」

「つきひめ月姫。」

「月姫？」

「俺の．．．母親だよ。」

29 アイアツプス（後書き）

某漫画のことじゃないっす。総隊長は引退しました。オリジナルな方がしております。今後出てくるかな？

30 囚われた者達（前書き）

昨日必死に書いてたのに全部消えました・・。

30 囚われた者達

「総隊長。」

浮竹は木の上でリンゴをかじっている彼女を呼んだ。

「何？浮竹。」

「一が標的の井上心春を俺の元に連れてきました。そして兄のシンが千石の腕を斬り逃走した．．．。」

「一？一ってイチゴくんの子供？」

「ああ。」

「あなたの隊だったよね？で。私にどうしてほしいの？」

「黒崎に命じたのは君だろ？如月^{きんぎょ}」

「そうだけど私はイチゴくんにやって欲しかったんだけど。一くん．．．か。彼は面白いんだけど興味ないんだよね。」

「如月．．．。」

如月はリンゴを上に取り投げた。

「確かにね。私は殺せと命じた。だから殺さなきゃなんない。でも一くんが浮竹に言った言葉は殺したくない．．．でしょ？彼女は敵意も何もないから．．．。」

浮竹はごくりと息をのむ。

「でもそれじゃダメでしょ。私が殺せって言ったんだから殺さない。と。私は何もしない。けどあなたたちが殺すならそれでもいいかな。龍沙も黙ってないだろうし。」

彼女は木から降り、リンゴを握りつぶした。

「面白いね。人間は。だから私は人間を護り、昔は喰らっていたのかな？」

彼女は微笑みを消すことなくその場を去って行った。

「母親だと？」

シンは思わず言葉にしていた。

「ああ。でももう死んだけどな。」

「どうということ？」

心春が聞いた。

「月姫は．．．。ソウルソサエティの一番大きな湖に囚われているんだ。だからもう出ることはない．．．。」

「どうして．．．。」

「月姫は親父の斬魄刀だったんだ。そしてソウルソサエティを護る精霊でもあったんだ。藍染の裏切りで．．．戦争があったとき．．．ソウルソサエティは戦いが終わった後もボロボロだった。親父はソウルソサエティを救う死神だ。この世で強い死神。親父の斬月は月姫を生み出した。そして恋をしたんだ。その間に生まれたのが俺だ。ソウルソサエティを救うために月姫は生まれたんだ。」

「．．．．．。」

「そして俺が総学院３年の頃．．．。母さんは湖に囚われた。母さんは運命なのだと言っていた。親父はその時から心を鎖した。」

不意に二人は自分の父を思い出した。心がなかった虚。痛みも悲しみも知っているのにわからなかった虚。

「母さんはソウルソサエティでも強力な力を持ってる。きっと力を貸してくれる．．．。ここだ。」

目の前には一面の美しい湖があった。黒崎は湖の水を汲み少し飲ん

だ。

「お前らも飲んでみる。」

シンは嫌な顔をした。

「貴様．．．心春にこんななにかもわからん水を飲めというのか？」

「違う。この水は癒す力があるんだ。内側の傷も体力や霊力も回復する。」

心春は水をがつと飲んだ。

「す、すごい．．．体がすごい軽くなったよ．．．。」

黒崎は前へ踏み出した。二人は信じられない光景を見た。なんと彼は水の上を歩いているのだ。

黒崎は湖の真ん中で止まり、底を覗き込むような体制をとった。

「母さん。」

黒崎の声は響き渡った。

「一？一なのか？ああ。会いたかった。」

「俺もだよ。母さん。」

「お父さんは？一緒では．．．。友達？．．．死神ではないのか。」

「ああ。母さんの力が借りたい。ここから出たい。現世へ戻りたい．．．誰一人犠牲にならずに．．．。」

月姫は少し考え綺麗な声で言った。

「二人の顔が見たい。」

黒崎は振り返る。二人は水の上を歩いていった。

「ウルキオラの子供か．．．よく似ているな。少年。」

心春は思った。なんて綺麗な人なんだろう。黒髪で肌は雪のように白くて瞳はキラキラ光っている。黒崎は心春を見つめた。やはり他は全然似ていないのに瞳だけは母にそっくりだ。この子の母親も。

「一。ソウルソサエティに出たいのだな？」

「ああ。」

「何も犠牲を出さずに。」

「ああ。」

「それは無理だ。犠牲は戦いにおいてあるべきものだ。これから戦

いが始まる。いいか。―。」

「はい。」

「あなたは囚われている。何かとは言わない。自分でわかる時が来る。そしてあなたは父よりも強い死神だ。だから焦ることはない。あなたがやるべきことをすればいい。そうしたらすべてを護ることができる。だが犠牲はでる。わかったな。」

「．．．はい。」

「そしてシン。」

「．．．．．。」

「あなたはあなたが思っているような人間ではない。あなたの剣もわかつているだろうな。心春。あなたは癒す力がある。あなたの母のように。それをどう使うかよく考えるのだ。」

「はい．．．。」

「光と闇――。あなたたちはどちらにも染まりゆく。善と悪があるならばそれを選ぶときが必ず来る。いいな。力ある故に死すこともある．．．。」

月姫は目を伏せた。

「―．．．。お願いだ。」

「母さん．．．．。」

「一護を．．．助けてやってくれ。あいつはわたくしがここに囚われてから何も見えていない。あなたが無理なら連れてきてくれ．．．頼む。」

「わかった．．．。」

「ここから出るためには総隊長を訪ねろ。あいつはあなたたちを殺しはしない。わたくしはあなたたちの無事を祈る．．．。」

月姫は底へ沈んでいった。

「椿！」

「ああ。龍沙！はは。本当に腕やられたんだね。」

如月椿は笑った。

「笑うなや！今気分悪いねん！」

「ごめん。で。どうしたの？私の隊舎に来るのは珍しいね。」

「……決まっとるやろ。侵入者を殺しに行くんや……。」

「侵入者って……。彼らのこと？」

「そうや。俺の腕のお返し返さなあかん。虚なんやからさつさとやらな……。」

如月は笑いながら千石の背を見送った。

30 囚われた者達（後書き）

如月の外見は茶髪で長くて綺麗な女です。とにかく綺麗です。設定の前に前の総隊長のお孫さんの設定。後々わかりますが・・・もう少しお付き合いください！

31 もう振り返らない

この世は闇と光とで別れている。
交わることはないだろう。

闇は悪であり、光は善。そんなこと誰が決めたのだろうか？
誰がこの世界を生かしているのだろうか。誰がこの世界を殺すのだろうか。

私は支配者を見た。だが彼もただの憐れな死神だった。

皆は彼を悪と呼び憎んだ。憎むことこそが悪とは知らずに。

そして彼を悪にしてしまった世界こそが悪なのだ。
それを正すことを誰もしようとしない。

憐れで哀れで可哀そうな我等。

だから私は望まない。何も望みはしない。

たった一つ。望むのなら私を呪って。

壊してほしい。あなたの手で。

「黒崎くん！」

織姫ははあはあと息をつき彼を必死に呼んだ。

「何だ。」

「ウ．．．ウルキオラは．．．？」

「帰ってないのか？」

「う．．．うん。私．．．。」

「大丈夫だ。近くにいます。」

「え？」

「だから心配すんな。」

彼は遠くで微笑む。

「シンも心春もいないの．．．。みんな行っちゃった．．．。私っ！」

織姫は膝をついて泣いた。

「私っ！不安なの！みんながどこかに行っちゃってしまいそうで．．．ウルキオラだって．．．アランカルだから死神に殺せれそうになる．．．私だって昔は虚を倒した！黒崎くんの力になりたかったから．．．！ごめん！黒崎．．．くん！私が弱いから．．．。私のせいで！」

「井上．．．？」

「私っ！どこかできっと黒崎くんと一緒にいたくなかった！彼が．．．彼が消えてしまってから私は寂しくてたまらなかった！黒崎くんは強くて強くて私は壊れてしまいそうだった！ごめん．．．。」
一護は声が出なかった。彼女は泣き崩れている。そしてしばらく黙って息を吹いた。

「井上．．．。一つ聞きたいんだ。」

「．．．．？」

「俺が憎かったか？俺を殺したかったか．．．？」

「そんなこと！絶対ない！私は黒崎くんが大好きだったもの！いつも護るために闘って．．．。私は自分の無力さを憎んだの！」

「俺は．．．ずっと怖かったんだ。井上に憎まれているんじゃないかって．．．でも今井上が言ってくれたから俺は．．．。」

一護は奥歯を噛んで歩き出した。

「ありがとう。井上。」

「黒崎．．．くん？」

「やっと．．．月^{げつ}に会える。」

一護は振り返らずそのまま去っていった。

「織姫！」

「ウル．．。」

織姫はウルキオラによって抱きしめられていた。屋上なので風が冷たい。

「シンと．．．心春は？」

「心春は．．．ソウルソサエティに行った。心はそれを助けに行つた．．．。」

「ソウルソサエティに．．．？」

「俺が悪いんだ。俺はお前だけでよかった。お前がそばに居てくれるなら何もいらなかった。だが．．。」

「それ以上言わないで！私後悔なんてしてない。心春とシンに出会えて私はとっても幸せ。だって．．．。もう私は天涯孤独だったんだよ？でも家族ができた．．．。私は幸せよ。だからそんな顔しないで。」

ウルキオラはその瞳に悲しさを浮かばせる。

「どうするの．．．？」

「心に．．．斬魄刀をやった。あいつの中に宿っていたものだ．．。」

「そっか．．．。じゃ私たちは待っていていよう。」

「．．．．．。」

織姫は立ち上がって笑った。

「私は信じてる。ずっとずっと信じてる。」

織姫が差し出した手をウルキオラは優しく握った。

彼らは人間に憧れている。彼も．．．彼女も。私は笑いが止まらない。ねえ。クソジジイ？

「椿様。」

「．．．．．。」

如月はいつの間にか畳の上で眠っていた。

「星凜^{せりん}．．．．．寝てたのか。」

童顔の男の子。五月雨^{さみだれ}星凜は如月の一番隊の副長である。若いながらもあの日番谷隊長を超える才をもつ。

「ずっと笑ってましたよ。ケラケラと．．．たく仕事もしないのに。いったいどんな夢を見てたんです？」

「ん？ああ。私はさ。死神もアランカルにもなったことがあるけど人間になったことないんだ。昔はなっただんだけれうけど私の記憶にはない。だから記憶が欲しいな〜って思ってた。」

「．．．．．椿様は意味がわかりません。」

「わからなくていいよ。お前には。さっ。出かけようか。」

「！そうはさせませんよ！仕事が溜まってるんですよ！いっつも僕が．．．椿様がやってください！」

「やだよ。お前のほうが暇だろ？私はやることがあるの。」

「はあ！？いっつもそうやって逃げてるじゃねえか！我慢の限界ですよ！」

「まあまあ．．．。今日はダメだよ。これから楽しいことするんだから。」

「椿様．．．。」

「そんな顔しないでよ。何か買ってきてあげるよ。何がいい？」

「えっ！じゃあ．．．。」

「やっぱやーめた。じゃあね。」

如月は星凜には絶対に見せない笑みを一瞬してから隊舎をでた。

31 もう振り返らない（後書き）

若干短い・・・。なんかダラダラやってすみません><

32 忘れられた魔女（前書き）

更新遅れると思います・・・。

32 忘れられた魔女

如月はソウルソサエティを出て、現世へ向かった。そう。かつての仲間の元へ。

「ここかな？」

如月は空から降り、一つの家を目指し、その窓へ降り立った。ちょうど二人はテーブルでお茶を飲んでいた。

如月が降りたとき彼は気がついたように織姫を後ろにやっていた。

「そんなに警戒しなくてもいいじゃないの。ウルキオラ。」

如月はにやつと笑った。ウルキオラは彼女を睨みつけた。

「貴様．．．何者だ？」

ウルキオラは落ち着き言った。如月は目を見開いて悲しそうに目を細める。

「ひどいなあ。ウルキオラは。私、あなたのこと結構好きだったのに。ねえ。織姫ちゃん覚えてるよね？」

織姫は覚えていた。彼女のことを。はつきりと。

「私．．．覚えてます．．．。」

「織姫？」

「ウルキオラ。一度だけ．．．この人が私が監禁されてた部屋に来たの．．．。名前は．．．。」

それは織姫がウルキオラにこの部屋に連れてこられて少しした時期

だった。

「女。食事は食ったのか。」

「……。お腹が空いてないんです。」

「……貴様。よほど俺にねじ込まれたいようだな。いいだろう。それとも栄養注入がいいか？」

「どちらも嫌です……。お願いですから大丈夫ですから……。」

「ウルキオラは織姫をしばらく見つめ、部屋から出て行った。」

「あら〜ウルキオラ？どうしたの？」

ウルキオラは目の前の女のアランカルを見て目を逸らした。

「何故、貴様がここにいる。エスパードでもないアランカルが。邪魔だ。失せろ。」

「あははは！！」

彼女は大笑いした。彼女の容姿はともアランカルのものではなかった。孔はない。殻もない。アランカルの特徴的なものが一つもないのだ。まるで人間の女。ウルキオラは彼女に霊圧も感じられないでそこないのアランカルだと思っていた。そして藍染からエスパードの称号ももらっていないのだ。自分より下に見て決まっている。なのでウルキオラは彼女が嫌いで名前も覚えていなかった。弱いくせに皆に馴れ馴れしいのが気に入らない。

「君がそんな子だったとはね〜驚いたあ。」

彼女は面白そうに笑った。

「何が言いたい。」

「別にイ。そうだ。惣右介が言ってたけど人間の女の子がいるんでしょう？井上……織姫ちゃんだっけ？」

「それが何だ。貴様には何も関係ないことだろう。」

「いいじゃない。どうしてそんなこと言うの？」

ウルキオラは何も言わずそこから去った。

「……王子様がしつかりしないと、魔女にお姫様とられちゃうよ?」

彼女が放った殺気と呼ぶ霊圧はウェコムンドが揺れるほどの大きさだった。

「あなたが井上織姫ちゃん?」

振り返った織姫は不思議な顔をした。

「……はい。」

彼女はくすつと笑うと部屋に入り込みソファに座った。

「私、退屈だったからさ君がどんな子かなあって思って。安心して。何もしないから。」

織姫はこの女がアランカルとはとても思えなかった。人間で……とても美しい容姿。絵本から出てきたような顔。アランカル独特の霊圧も全く感じられなかった。

「織姫ちゃんは回復ができるんでしょう?」

「はい……。」

「そんな遠くから言わないで。ここに座つてよ。」

織姫は言われるがままに座った。

「い、いんですか……? ウルキオさんは……。」

「ああ。ウルキオラにはちゃんとして許可……いや惣右介にもらったの。」

(惣右介って……藍染さん……)

彼を呼び捨てにする彼女は何者だろう。

「いいね。織姫ちゃんは。」

「え?」

「だって癒すことができるんだもの。私はさ。全て見てみたいんだ。この世つてものを。」

「.....」

「あ。意味わかんないよね。ごめん。つまり私はなんでもしたい。今は殺すことしかできないから.....」

織姫は彼女を見つめた。

「そうそう。今日はね。君にプレゼントを持ってきたの。」

彼女はどこからか花を取り出した。それは椿の花だった。

「知ってる？椿の花は首が落ちるように散るのよ？」

その手渡した指先から伝わる霊圧は藍染よりも濃く強く醜いものだった。

「またね。織姫ちゃん。あ。そうそう。名前言ってなかったね。私は.....」

「エミール・オーヴェット.....」

「覚えててくれたんだね。嬉しいな。」

ウルキオラは目を見開き言った。

「唯一。藍染と互角のアランカル.....」

「ふふん。今頃気がつかれてもなあ。」

「貴様は.....」

「今日来たのはあなたたちの子供のこと。」

「!？」

「あなたたちの子供を殺すことを命じたのは私だよ。」

「!」

「ウルキオラ。あなたが生き延びることで虚が強化されているのは事実だよ。だからあなたにも消えてもらいたい。」

ウルキオラは構えなおす。

「なんだけど。あの方がそれはダメだと言っただ。だからあなたは殺さない。」

「！．．．では何故子供を．．．。」

「ん？二人は脅威だから。二人は力がある。シンには破壊の力が。心春には癒しの力が。それは私にとって邪魔なんだ。だから死んでもらう。」

「貴様っ！ふざけるな！」

「ふざけてないよ。知らないのか？死神は虚を殺す。虚は死神を喰らう。これは初めから変わってない。私たちがわかりあうことなど不可能なんだ。これは宿命だ。仕方ない。」

「！ふざけるな．．．。力がある？あの二人が何かしたのか！？何か傷つけたのか？傷ついたのはこちらのほうだ！」

「そうだね。その通りだ。でも二人は何かを失い、絶望し、破壊し、嘆く。それは確実だよ。」

「何を．．．。」

「今、二人はソウルソサエティで試練を受けているんだ。生きるか死ぬかの。私はもう虚を許すことができないんだ。ごめんね。」

彼女は偽りの悲しさを向けた。

「じゃあね。」

彼女は去って行った。

「ウル．．．。」

「俺は．．．。どうして虚なんだろうな。」

ウルキオラの横顔を織姫は一生忘れなかった。

この世界は矛盾している。混沌でしかない。
こんな世界で私たちは生きている。

誰かが決めた運命を変えるのは誰なのか。

運命というくだらないものに振り回されるのはごめんだ。
私は私のしたいことをするのだ。

君に触れて感じて抱きしめて。もう何でもしたいんだ。

君はこんな私を笑うだろうか。

君の笑顔が見れるならこんな嬉しいことはない。

最後の最後まで笑ってほしい。

涙は流さずに。

でも決して許すな。

君を一人にしてまた泣かせてしまう私を。

32 忘れられた魔女（後書き）

長くなるとだれるよね

33 カイツールシェリダー（前書き）

更新遅れました。いやいつもですが長ったらしくてすみません。

33 カイツールシェリダー

黒崎と心春、シンは瀟霊廷に向かっていた。

「何故、瞬歩を使わない？」

シンは黒崎に聞いた。死神なら使えるはずだ。二人は足は速くとも響転は使えない。

「今は幸い、追手が来てない。瞬歩を使うとお前らもついてこれないだろうし休むことは必要だ。」

「．．．貴様の母親の湖を飲めば回復するというのは嘘か。」

「嘘じゃねえよ。月姫の力は癒しだが完全じゃない。眠ることや、じつとしていることのほうがもっと効果的だ。」

シンは舌打ちをして黒崎を睨みつけた。

「忘れるな。貴様のことは許すつもりもない。いつでも殺せる。」

シンは刀を黒崎の背中に突き付ける。

「やめて！シン！なんで．．．。」

心春はまた叫んだがシンの目を見てすぐにやめた。シンは怒っている。心春はつらかった。今までシンが自分にたいしてこんな態度をとるのは初めてで恐かった。

「黒崎．．．。貴様は弱い。心春や俺を殺せない時点だな。貴様は死神として全然ダメだ。」

「．．．わかってるよ。」

「だが．．．。俺たちを殺しに来た死神が貴様でよかった。」

黒崎は振り返ってシンを見た。シンの目から涙がでていると黒崎は思ったがそんなことは決してなかった。

シンはふっと息をはいて黒崎から目をそらした。

「ここで休めばいいだろう。日は落ちるようだな。心春。来い。」

「あつ。うん。」

心春とシンは森の中へ消えた。

「シン．．．。」

シンは心春に背を向けて何も言わなかった。

「ごめん．．．でも私！」

心春はシンを後ろから抱きしめた。そして心春はゆっくりといった。「ねえ。シン．．．。シンは私が綺麗だと思ったものを同じように見てくれたよね。本当は思ってたことがぐらい知ってるの。橋の下にワンちゃんを見つけたとき一緒に世話したよね。私が男の子にいじめられたとき．．．本気で怒ったよね。そのあと．．．私をずっと守ってくれたよね。勉強も教えてくれた。なんだって私は完璧じゃなかった。シンはいつも．．．自分のこと後回し。ねえ。シン。」

シンは振り返って心春を抱きしめた。とても強く。

「俺は．．．何もできなかった。お前に何もできなかった．．．。俺は自分のために．．．。」

「何言ってるの．．．私。ずっとシンに助けてもらっただから．．．今度は私が。そう思ってここに来た。なのに．．．ごめんね．．．。私シンのことを護ることも何もできない。ごめんね。」

心春はボロボロと泣いていた。シンは細い指で涙をすくった。

「私。ずっとシンといたいの。ずっとずっと．．．でも知ってるの。シンは誰かと結婚してどこかに行っちゃう。ずっと一緒にはいれない。でも矛盾してるの。シンの幸せも願ってる。でも私も好きない。」

人と一緒にいたい。でもそれって．．．」

シンは何も言うなというように心春に口づけた。

「シン．．．。」

「すまない。でも俺は心春が一番大事なんだ。ほかの何もいらない。心春の人生だ。好きなことをすればいい。でも俺は．．．。何もない。心春が大好きだ。俺だって矛盾してる。」

心春は少し微笑みシンの頬をつかんだ。

「今、キスしたよね？」

「す、すまん．．．。」

「うっん。嬉しかったよ。でもこれが最後だからね。」

心春は少し離れてシンに背を向ける。

「どうして．．。兄妹に生まれたのかな．．。」

その言葉はシンに届いたかわからない。そのとき、シンが現れた剣とまじえたからだ。

「見つけたでえ．．．。虚。」

「貴様は．．．。あの時の。」

そう。シンが腕を斬り落とした死神。千石龍沙。

「シン！」

「さがっている！心春！」

「そ．．．。」

「心春！今は俺が．．．。」

「なんや。なんやえらいかつこいいなあ。虚。」

「黙れ！」

シンは千石の刀をはらった。

「千石隊長！」

「はじめえ．．．。お前。何しとんねん。」

「！」

黒崎は千石の霊圧に圧倒された。

「お前のすることはいいつらを殺すことやろ。それやのに何や。お前。斬魄刀もとられて．．．。」

「千石隊長．．．。お願いします！見逃してください！」
「はあ？」

「こいつらのことは総隊長に命じられたことです！だからっ．．。」
「だからなんや。椿姫がこいつらの処分せえへんとでも言うんか？
ちやうやろ。お前はなんもできひんから他人に任せるだけや。お前は最初からなんもできひんかった。聞いて呆れるわ。あの英雄、黒崎一護の息子がとんだ臆病もんや。」

「．．．。」

シンは問答無用に千石に斬りかかった。

「．．．。」

「少し黙れよ。死神。貴様の腕も足もすべて斬り落としてやろっ。」

「餓鬼が。お前なんか腕斬られた自分が情けないわ。」

「ふん。貴様に実力がなかっただけの話だ。」

シンと千石は距離を広げた。

「黒崎。」

「！」

「心春を頼む。」

シンは歯を嚙んでいった。そして刀を構える。

「俺の斬魄刀を見せてやろっ。死神――。」

その先には何があるのだろう。

闇の先には？光の先には？

世界の矛盾に何がある？

考えて考えて沈んでいく。
私の瞼。

34 彼方の閃光（前書き）

お前を讃える栄光のために・・・。

34 彼方の閃光

「讚える。薔薇十字団。」
アディシユス

シンが凜とした声で言った。シンの黒い斬魄刀はみるみる輝き、白くなっていく。シンの姿は変わっていないように見えるが服が少し変わっている。黒いスーツ姿。目の色は不思議な色に変わっていた。色でどう表現したらいいのかさえ、わからない。

「始解ができるんか．．．。なにが殺さなくてもええや。十分危険な奴やろ。」

千石は冷静を装っていたがその声は震えていた。目の前の靈圧はかなりのものだ。きっと隊長格。始解ができた時点で副隊長クラスだが。

「どうだ？死神。恐怖したか？歓喜したか？」

シンの瞳がまた変わる。今度はくつきりとした赤色。

「なんや。まだ闘ってもないのに．．．。見せかけだけか？かかってこいや。」

「貴様はそのよく動く口を塞ぐ必要があるようだな。急かさなくても貴様を殺してやるさ。」

シンが剣を構えると、幻影が見え出した。10人ほどの透明な幻の人の姿。

「な、なんや．．．。」

「俺の斬魄刀の能力は『心なき戦士』幻と思うならそれでもいい。だが．．．。」

その時、幻影の一人が千石の金髪を斬った。サラサラと零れ落ちた。

「肉体は斬れる。だがまだ終わらない。」

「・・・！」

「心なき戦士に『心』を与えれば何倍もの力がでる。」

そついうとシンの胸から光が散り、その光は幻影ひとりひとりに宿った。

「いくぞ。」

いつせいに幻影とシンは斬りかかる。一人は長い剣、一人は槍。鎌・

・・・さまざまな武器を持ち特有の動きをする。

千石は防ぐのがやっとだった。瞬歩で避けることもできぬ速さ・・・

。やがて千石の力はなくなり崩れ落ちた。

千石は血をだし、言った。

「なんで・・・。お前なんかにお前なんかに・・・。」

「・・・。」

「俺は！虚なんか全部殺したる！全部消えればええねん！なんで・

・・・。」

「・・・お前は虚を悪だと信じていたんだろうがそれは違った。憐れな死神だ。」

「俺は・・・哀れでもなんでもない・・・俺は・・・。」

千石は消えていった。

「！龍沙が死んだ。」

如月は空を見ながら言った。星が光る空を。

「シン・・・。君ならきつと・・・。」

彼女は目を伏せて、ニヤニヤと笑った。

「さて。早く彼に会いにいかないかね。ねえ。月姫。」

「月^{げつ}」

一護は湖の中心で愛しい人の名を呼んだ。

「一護．．．？あなたなのか？」

月姫は上を向いてら底から浮き上がった。

「一護．．．。」

「ごめん。月。俺．．．ずっとお前を独りにして．．．。俺はまちが．．．」

「違う！」

月姫は涙を流していた。水と同化していく涙。

「わたくしはあなたを独りにした！あなたは全てを救った。だがわたくしはまたあなたに頼ってしまった。もう死神にはならなくともよかったのに！」

「月．．．。」

「わたくしが悪いのだ。斬魄刀でありながらあなたを愛してしまっただ！あなたを求めてしまったのだ！」

「それは違う。月。俺はお前のことが好きだ。誰よりも。だからお前が俺を好きでいてくれてうれしい。本当に感謝してんだ。ルキアからもらった死神の力を守ってくれて．．．。」

「一護．．．。」

「俺がお前に会えなかったのは．．．恐かったんだ。斬月からお前が生まれたのは俺の弱さだ。お前はずっと自由でいられたんだ．．．。なのに．．．俺が。お前を好きになって．．．。」

「一護。わたくしはこれでいいのだ。運命なのだ。でも何もなかったわたくしにあなたがくれたんだ。わたくしは幸せだ。だからあなたが悲しむことはない。あなたは自由なのだからあなたが思うよう

に生きればいい。わたくしはあなたの幸せを願っているのだから。」

「月．．。」

「なあ。一護。わたくしの願いだ。一を．．。ここから救ってやってくれ。わかつている。あなたに頼ることはもうしてはいけない。だからこれはわたくしの願い。叶えなくてもいい．．。だが一を．．。一は自信がない。偉大な父を超える力をもっていて．．。わたくしに似ているのだ。弱気なところはな。」

「俺はお前を失ってからあいつに何もしてやってないんだ。いつもお前のことしか考えてなかったから。闘うことももう、できなくなつた。でも今なら一になにかしてやれる。」

月姫は笑った。月姫は届かない一護の手を合わせるように水に手を合わす。そして一護に口づけるように水にキスをした。

「もはや。あなたに触れることもできない。それでもわたくしはあなたを思う。」

月姫は微笑んで、目を閉じる。

「少し疲れてしまったな。」

小さく眠ると言って月姫は沈んでいった。

「やっと月姫に会えたんだね。」

「き．．如月。」

森の中で二人は相対した。

「そんなに警戒しなくてもいいじゃないの。イチゴくん。」

一護はこの女が好きになれなかった。そんな差別することはしていないが怖いのだ。あの藍染さえこんな霊圧はしてなかった。

「いいよね。月姫は。だって眠っているだけでいいんだもの。独り
なんかじゃないし。」

「何を……。」

「そんな目で見ないでよ。私は独りなんだよ。ずっとね。」

「……。」

「わかるだろう？ 私が。君なら。」

「！」

「さて。君がやっと元気でたみたいだから。行こうか？」

「……。」

「一くんを捕えている虚を殺しに。」

「如月……！」

彼女は振り返って恐ろしい顔で微笑んだ。悪魔と呼べる最悪の顔で。

彼が言う孤独も。

彼が言う老いも。

彼女が言う犠牲も。

彼が言う虚無も。

彼が言う絶望も。

彼が言う破壊も。

彼が言う陶酔も。

彼が言う狂気も。

彼が言う強欲も。

彼が言う憤怒も。

私には矛盾にしか見えない。

そして等しいものは死だけだ。

34 彼方の閃光（後書き）

千石さんご臨終。薔薇十字団は有名なんですけどまあ幻影がでる斬魄刀でいろんな武器をもてます。心の力が強いほど強くなるみたいな。

35 私を死なせて（前書き）

シンの斬魄刀 アディシユス 薔薇十字団

アディシユスの意味は無感動。読みはこれで。

形状は普通の標準的な刀。日本刀など。黒く輝いているが、始解すると光り輝く。

掛け声は讃えろ（たたえろ）かぶってたらすいませんww

始解すると、透明な幻影が10人ほど現れる。シンが心を与えることによって、動きが速くなり、また槍や長剣、双剣、短剣、鎌．．．など様々な武器を操れる。逆にシンの意思、心が弱いと幻影たちも弱い。

35 私を死なせて

それは私にとって絶対に忘れないことだろうね。いや、私は何度も死んでいるのに覚えているのだから完全に忘れないことだ。まぎらわしい言い方だった。私は故に世界に矛盾を感じているのさ。

次に言うことは私の過去だ。忘れてくれても構わない。だけど私という存在を感じてくれたら嬉しいな。

それは最悪な日だった。私はいつものように……。いやね。私は小さくてね。流魂街の一番最悪なところの山に住んでいたのさ。もちろん。建物なんてないところに寝ていたんだ。私は山を下りて食べ物や水を確保しに行ったんだけど、たまたま見つけた食べ物は死体と共にあってね。いや、あれを食べた自分はどうかしていたんじゃないかな。その時はなんでも食べれば良いと思っていたからね。私は食物を採ったあと、いつもの山に戻ったのさ。すると一人の老人がいてね。いや驚いたよ。私は死体しか見なかったからね。生きた……。そう。死神を見るのは初めてだったんだ（死んだときにソウルソサエティに連れてこられたときは覚えていなかった）彼は私を見つめてきた。私も老人を見た。老人は面白そうに微笑んでこう言った。

「死神になる気はあるかのう？」

私は睨みつけて

「はあ？」

と言った。

彼は私に才能があると言い、無理やり連れ去った。

私は抵抗できなかった。どうしてだろうね？自分でもどうしてあの時そうしなかったのかわからないんだ。

とにかく私は山本元柳斎重國の孫娘になったわけだけど……。

私は死神が嫌いだね。というより感情をもつ者達を恐れていたんだ。私は自分が人間だった頃のことなんて何一つ覚えていないからなんかわからないけどとにかく嫌いだったんだ。

自分で言うのもなんだけど私には本当に才能があつたらしい。

そして私は歴史に名を残すことになる。何故なら今でいう総学院、真央霊術院をたった一日で卒業したのだから。

クソジジイは私を山から連れ帰ったときから私に修行をつけた。それは私は何度死にそうになったことか。本当に……。あのクソジジイは虐待をしていたのではないか。毎日傷だらけでね。私は女の子なのに。まあ。私は全然気にしていなかったからいいのだけれど。私が何故、一日で卒業したのかは想像がつくと思う。そう。私は卍解をしたのさ。卍解は隊長格しかできないからね。そして私は何年かけて鬼道をすべて習得したんだ。それに斬魄刀を3つ持つてる……。

ジジイは本当に驚いていたね。いやあの顔といったら……。私は単純にうれしかったな。

その後、私は浮竹や京楽と同じときに隊長になった。私は二番隊。私が結構見かけ大人になったから大分の月日、修行をしていたんだ。

ね。

私は私が狂う、運命的な出会いをしたんだ。彼の名は鬼風夢雅おにかげゆめまさと言った。彼は私の隊の副隊長でね。可愛い男の子で……。誰にでも優しく、明るく。そして強い。私より背が高くて……。私は彼を好きになった。彼は私に一番よくしてくれたしね。

まあ私は尊敬の目をされていたのかな……。私は嫉妬や、恐怖の目を感じたよ。貴族でもないしね。それにあんな子供だった私がいきなり卍解したならそれは恐怖するんじゃないかな？

そうそう。大事なことを話さないね。そう。藍染惣右介のことだ。彼はたしかにずば抜けた実力の持ち主でイチゴくんが言っていたようにずっと孤独だったんだ。惣右介はきっと私を見て、ああ。この人なら僕と闘ってくれる……。とても思ったんじゃないかな。彼は強い故に何も楽しいことはなかったんだろうね。で、彼は私に近付いてきたんだ。

彼は私に親しくなろうとしていたのかわからない。でも私はこの子に危機感を感じていたんだ。この子は……。そう私と戦いたいのだ。

私はきっぱりと言ったよ。闘うことなんてしない。君は君で生きろと。

彼は絶望した。そして彼は狂っていった。

話を戻すけど、彼、夢雅のことだ。それはあの事件のことを話さなければならぬ。

私と同期だった浮竹たちならもちろん知っていることだ。

それはね。100年くらい一度、ソウルソサエティに虚が入り込むことがあった。私と夢雅は一緒にその虚を殺しに行った。その時、夢雅はびびってた。なのに虚は夢雅ばかり狙ったんだ。私はその日、全然力がなくて……。いや言い訳みたいだがこれは真実だ。私は夢雅を庇ったばかりに命を落とした。

護るために死んだことはいいことだ。けれど私は忘れない。

夢雅のあの笑顔を。あれを見たとき、私は死んでいく中、闇の中、彼を憎んだ。いいや。私は悲しかったんだ。私は彼が大好きだったけれど彼は私を憎んでいて殺してやりたかったんだ。そしてこれは惣右介と一緒にやったことで、私は彼らの最初の実験体になった訳だ。私の体が動かなかったのは夢雅が薬を盛ったことは明らかだ。

私は死んだはずなのに気がつけばあの何もない世界ウェコムンドにいた。そう。私は虚になったんだ。私は本能のまま虚を喰らうしかなかった。もう生きることなどしたくないのにね。私はきつと強い悲しみのせいで死神だった頃のことを覚えていたんだ。やがて私はハリベルのように人の姿となった。私の名は如月椿からエミール・

オーヴェットとなった。

私はその容姿をかわれて……。あのジジイ。バラガンに捕えられた。あの屋根のない城の壁に鎖をうちつけられて。別によかったんだ。私は殺すことしか頭になかったからね。

そして月日がたって私の前に懐かしい顔が現れたんだ。

わかるよね？崩玉を持った藍染惣右介だ。

彼は私に気がついて私を助けた。私は彼のことを何とも思っていなかった。でも彼のことを聞いたんだ。聞けば彼はもう……。それは無様だったらしい。

私は惣右介に従うことに決めた。彼は私の实力を知っているからエスパーダの称号は与えなかった。やがてエスパーダができあがっていくと私は傍観者になった。

私はその中でもウルキオラ・シファアを気に入った。だって感情がない生き物なのだから。でも彼は織姫ちゃんが現れたことによって心に興味を持ち始めた。

いや。私から言えばね。言葉を発すればもう感情を持っている。だってね。惣右介に誓う忠誠心いうものは虚無なの？私はずっと思っていたの。

だから私は……。善も悪も信じない。認めない。

だって……。死神は虚を悪だというけれど私には彼が悪魔に見えた。

虚からすれば死神を悪だというの。でも私は死神たちが完全な悪だとは言えないの。

それにね。スタークは孤独だと言ったけれど本当は全然そんなことないの。強さは抑えればよかったし、今はリリネットもいるしね。バラガンが言う、古いも。彼は最初から老いていたから何も変わっていない。古いとは進むものでしょう？

ハリベルが言う．．．犠牲も。彼女は何故、最初の犠牲者じゃなかったの？どうして犠牲を見てきたの？

ウルキオラが言う虚無。それはずっとずっとなかったんだ。私を嫌っていることも感情があったからこそ。

ノイトラが言う絶望。私は彼が絶望というものを武器にしていたとか、感じていたとか全く見えなかった。ただ信じていた。

グリムジョーが言う破壊。破壊をしていたのにどうして自らを破壊しないんだろう？

ゾマリが言う陶醉．．．。彼はそれを何も感じていなかった。無自覚だった。ように見えた。

ザエロアポロが言う狂気。私には確かに狂っているように見えただと私も狂っていたから真実なんてわかんないね。

アローニローは言う強欲。人間じゃないか。みんな持っていることだよ。もちろん。私もね。

ヤミーが言う．．．憤怒。彼はいつも怒っていたのかな。私にはそんなことしなかったから。

これは私の考えかただから気にしなくてもいいんだよ。私の目は．．
。君たちとは違う。

私は何故、死神に戻ったかというのはあの人に言うなって止められているから話せないんだ。

さて。そろそろ行かないとね。早く彼達を殺さなくては。私の矛盾を。

彼らには罪はないよ。私が罪だ。だから君たちが頑張って私を止めて．．．。

どうか死ぬことができない私を殺して。

35 私を死なせて（後書き）

パソコンのデリートキーは憎い・・・。

36 神々の黄昏（前書き）

最近の題名は音楽の題名からとっています。

36 神々の黄昏

「そんな．．．千石隊長が．．．。やられるなんて．．。」

黒崎は驚き、目を見開く。そんな彼を心春は悲しい目で見た。そしてシンを見る。さっきまでは確かに心春の知っているシンだったが、今何かが変わった。心春はなんとなく思っていた。それは彼が殺したからだ。もう自分とは違う感覚が彼に襲い掛かっている。小説や漫画では簡単な人殺し。死神だって人なのだ。いや人の姿をしているのだ。そんな人を殺すことは．．．。心春にとって涙する以上に悲しいことだった。そしてシンが苦しむ姿も見たくなかった。

「シン．．．。お前の斬魄刀は．．。」

「このことか？」

シンはゆっくりと唇を動かした。その剣はさっきまでの輝きと一転、黒く染まっていた。

「お前はもう隊長格だ．．．。もしかして卍解も．．。」

「そんなもの知らん。俺にはそれは必要ないかもしれん。」

「なんで．．．。」

「この斬魄刀は俺の命を奪っていくからだ。」

「え？」

シンは目をふせた。

「薔薇十字団は強大な力を持ってた。でも俺を主に選んだことによつて小さくなった。俺の心を動力にして動く．．．。そのかわり誰にも負けない能力をだす．．．。それがこいつと俺の交わした契約．．．。俺の命はこいつを使えば使うほどしぼんでいくんだ。」

ついに心春は涙をながしてそんな．．．。とつぶやいた。でもその涙が驚くほど綺麗だったので二人は何も言えなかった。

「じゃあ．．．。卍解したら．．．。シンは．．。」

「ああ。死ぬ。」

「！！」

シンは内心、ものすごく悲しかった。もしかしたら無意識に泣いていたかもしれない。ずっといたいと思った。心春のそばに。

「そんなこと．．．。」

心春はシンを見据えて強く言った。

「絶対にさせない！私がそんなことさせない！私がシンを助ける！」

「心春．．．。」

「何もできないかもしれない。でも．．．。私はこのままじゃいやだ。弱いかもしれない。でも私は変えてみせる。殺されたってなんだって私は．．．。」

心春はぎりつと奥歯を噛んで、また涙を流した。

「行こう。追手がくるかもしれない。」

黒崎は小さく言った。

二人は何も言わず歩き出した。

「何でそんなとろろ行くんだ？」

一護は目の前で歩いている如月に言った。

「ん？だって向こうは全然動いてないんだもの。簡単に追い付いて殺すのも面白くないでしょ？」

「如月．．．。」

「それに君の顔を見るのも面白いしね。イチゴくん。君が彼らを殺すのがみたかったんだ。私はね。でも君はしないみたいだし。それから月姫がああ言えばね．．．。」

「．．．．。」

「つくづく君は運がいいね。ま。運が悪いとも見えるがね。」

「護は寒気がした。一瞬の彼女の霊圧が伝わってきたのだ。彼女はいつも霊圧がないに等しいのだ。感じられる人間はそうはいない。」

「まあいいじゃないか。ゆっくり．．．。」

「如月！」

その声の主は浮竹だった。

「浮竹さん！」

「黒崎．．．。如月。どういうことだ？」

「何がだよ。浮竹。」

「君が．．．。」

「ふふん。私が彼らを殺しに行くこと？君は別に反対していなかったじゃないか。何か問題でも？」

「君は．．．狂ってる。俺には子供を殺すなんてできない。千石が死んだ。殺したのは彼らだ。一も．．．。それはわかってる。だが．．．。」

「．．．。憎しみで仇をうつても何も残らない。か。確かにね。でも私は龍沙の仇をうつつもりも何もないから安心してよ。」

「如月。お前はおかしい。以前のお前はそんな風ではなかった。お前が戻ってきたとき俺はうれしかった。だが．．．。」

「そうだよ。私は狂っているんだよ。浮竹。じゃあ君がしてよ。」
如月は涙を流していった。とても笑顔で。

「私を殺してよ．．．。私はもう子供じゃない。私を殺せるでしょ？」

「．．．．。」

「やっぱり。浮竹は優しいね。できないよね。だから私は彼に殺し

てもらった。もう疲れちゃった。だからこのまま眠りたい。」
それは彼女が唯一望んだことだった。彼女は死ねないのだった。いくら死んでも死ねなかった。だから憎しみの塊……。シンに自ら自分を殺せると彼女は思った。

如月は浮竹の横を通り過ぎた。そつとありがとうとつぶやいて。

「瀨霊廷だ。」

目の前にはソウルソサエティの象徴ともいえる瀨霊廷が見えてきた。
「如月総隊長は……。恐ろしい人だ。だが話がわかってくれる人だ。」

「確か……。俺たちを殺せと命令した人物ではなかったか？」

「ああ……。まあそうだ。だが確かにお前らが脅威になるのは真実だ。だから如月総隊長はそれを潰しにかかった。でも話せば大丈夫だ。」

「……。そいつを信頼しているようだな。」

黒崎が少し顔を赤らめた。

「俺にはそいつが何を考えているのかわからんがな。まあいい。ここから出られるなら何でもいい。」

シンは焦っていた。なんとなく嫌な予感しかしない。

三人は隠れながら進んでいった。隊長格は外にはいないが普通の死神はたくさんいる。だが気配を消せば問題ない。

三人はひたすら中心にむかった。

どうして．．．私を生き返らしたの？

彼はこう言った。

「お前は死ぬことは許されない。お前は俺と同じだ。」

そんな．．．。まだ私は．．．。生きなければならぬの．．．。

「お前は最強の死神だ。虚になったときにも最強だっただろう。お前はすべてが罪だ。」

罪．．．？じゃあ私は永遠に眠れないの？私．．．。もう．．．。殺すことしかできないの？

彼は答えなかった。かわりに私を抱きしめ、私に何かをふきこんだ。そして私は永遠に眠れない死神となった。私は罪という名で私に罪は永遠に消えない。人間がいなくならないかぎり。でも彼は言った。何か強い意志に貫かれれば死ぬと。

でも誰が私を恨んでくれる？私を憎んでくれる？足りない足りないだから．．．。私は彼に目をつけた。彼は氷のような刃を持っていた。私は彼になら殺されるのではと思った。だから彼に命じた。でも彼がやらないのは知っていた。息子にわたることも。息子は彼女に恋をしてしまった。彼の憎しみは増えていく。そして私にぶつけ

ればもう・・・。私は死ねる。

あなたはきつと私を死なせたくないんでしょう。あなたはいつまでも死ねないから。

でも私には関係ない。私はあなたなんて知らない。お願いだから私をどうか許して私を解放して。

わからなくてもいいから理解してほしいんだ。私の気持ちを。

「シンくん。心春ちゃん。私に話があるんでしょう?」

私はあなたにもう会わない。あなたは独りで生きてください。

私は目を閉じて笑顔でいますから。

36 神々の黄昏（後書き）

この小説のテーマは今更ながら矛盾というものかもしれません。
私が日々、何かに感じていることです。

37 悪しき世よ 私に愛を（前書き）

更新遅れて申し訳ありません。考える時間も作業する時間もなくて
・。
・

37 悪しき世よ 私に愛を

「貴様が総隊長か。」

シンは空から見下ろしている如月を見上げた。少したって見知っている顔が現れる。

「親父．．．！」

「は父の姿に声をあげた。」

「黒崎一護か。」

シンは眉間に皺をよせ、二人を睨みつけた。

「ふふ〜ん。どうするー？イチゴくん。私のかわりするー？」

如月は天使のような美しい微笑みを一護にむけた。イチゴは声を出さず、何も言わなかった。闘う準備はできていた。

「．．．．．はじめくん。」

「は、はい．．．。」

「君は何か話があるー？」

「は声を振り絞った。」

「こ、こいつらを殺すのはやめてください．．．。お願いします！」

「は頭を下げる。」

「黒崎君．．．。」

「えー？やだー。私は彼と闘うよ。ねえ。シンくん。」

シンはニヤリと笑んだ。

「ああ。最初から貴様は俺たちをただで返すわけがないからな。貴様ら死神は信用ならん。」

「ふふ。言ってくれるじゃない。ま。事実だけだね。」

「シン！」

二人が声をあげた。シンは心春にだけ微笑んで目をそらした。

「貴様がどんなに強いかは知らんが貴様には負けん。」

「ふーん。わかったわ。あ。心春ちゃん。」

「……?」

「シンくんが死んだら君もはじめくんも殺すから。」

「!!」

「おい！如月！」

「イチゴくんが悪いんだよ。君がやんないから。」

（最初からわかっていたけどね。）

如月はシンと向き合って同時に瞬歩で移動した。

シンと如月が来たのはとある森だった。空は霞んでいて綺麗だった。森は静寂に満ちていた。

「ここなら誰も来ないよ。さあやろうか。」

「ふん。よほど、自分の死にざまを見られたくないようだな。」

「!」

如月の眉がピクリと動いた。

「言ってくれるじゃない……。ホント。そっくりだね。ウルキオラに。」

「親父を知っているのか。」

「知ってるよ。でもどうでもいいでしょ。そんなこと。」

如月は不敵に微笑んだ。その表情にシンはありったけの殺気をぶつける。それを如月は殺気に返す。

「貴様のことは．．昔から知っているような気がする．．。」
「何？私を口説いてるの？」

「．．．．．。」

「かわいいね。ウルキオラにもそんなところあったのかな？」
「そういいながら如月は斬魄刀を抜く。」

「私の刀は折れない。かつこいいでしょ。」

如月の斬魄刀はみるみる槍のような杖になっていく。

「魔法って知ってる？まあ死神の場合、鬼道なんだけど。」

その杖を軽くふると、透明な糸のようなものがとびだす。シンは避けたが森が焼ける。

「．．．．．！」

「まあ気長にいこうよ。ま。君が死ぬことも心春ちゃんが死ぬことも変わらないけど。私が死んだらもうなんでも好きにしていよいよ死神を全部殺すのも。なんでも。」

私がシンくんを殺しても、心春ちゃんを殺しても、はじめくんを殺しても。

イチゴくんは私を殺しに来る。ウルキオラは私を殺しに来る。織姫ちゃんは私を憎む。殺しにも来るよね。

それこそが．．。私が望んだこと。私は必ず死ぬ。

もし私が全て壊してしまったら．．．。貴方は私を抱いてくれますか？

こんな私を愛してくれますか？いいえ。私が望んだことはありません。

私が望むものは．．。

きつと憎しみのこの世がみんなを連れて行ってくれるから。

だからこの世は腐らないんだ。

「シン！シンは！？」

心春は一に抱きついた。

「井上……。」

一は不安を隠すために心春をきつく抱きしめた。

37 悪しき世よ 私に愛を（後書き）

番外編書こうと思ってるので安心してください。

38 夢想の乱舞（前書き）

更新遅くてホンマすんません

38 夢想の乱舞

シンは目の前の死神を恐れていた。自分の父よりも強い死神。かつてこれほど恐怖したことはなかったのではないか。

「讃えろ！薔薇十字団！」

シンは声を張り上げ、斬魄刀を解放した。幻影が出てきても、まだ心を与えていない幻影は如月が杖によつて放っている鬼道によつて消えていく。

「これはただの鬼道じゃないんだよ。雛森ちゃんみたいに組み合わせさせて使ってるの。まあ私には卍解ができないからお遊びにしか使えないけどね。」

（遊びだと・・・？）

シンは距離をとって鬼道をかわす。しかし次第に光のような玉は早くなつていく。

「そろそろ本気だしてよ。心春ちゃんが死んでもいいのー？」

ニヤリと笑う如月にシンは本気でキレそうだった。

シンは我を忘れ斬りかかった。如月は杖でそれを受け止める。火花が散る中、如月は悪魔のような笑いをして一言つぶやく。

「君は弱いね。」

「！」

「もつともつと強くならないと・・・。全て失ってからでは遅いんだ。君には私のような思いはしてほしくはないよ。大好きな二人の子。」

「どういうことだ！貴様・・・。」

「ものわかりがない子だね」。君は弱いから全て失うって言つたの。心春ちゃんも君の大事な友達も、君の家族も・・・。失つてその憎しみが君以外のものを喰らい尽くして・・・。あと残るのは虚無だ

けだ。死ぬこともできない体になって一人生きる。私はそんなことしてほしくないって言ったのさ。」

「!!!!。貴様は.....。」

「私は強さ故に憎まれ、妬まれ、はじめて愛した人に裏切られ、虚になって.....。仲間を喰らい、死神を喰らい、あの暗闇の中で一人生き、また私は存在する。このまま.....。永遠に続くと思うの。」

シンは少し黙ってから精一杯に笑って見せた。かつてこんなに笑みがこぼれたのは初めてだったかもしれない。

「心配するな.....。俺が貴様を終わらしてやる。何も考えなくていいところへ送ってやるさ。」

如月は目を見開き、細く笑んだ。

「ありがとう。」

如月は杖でシンの刀を払い、後ろに距離をとる。

「写せ。村雨.....。」

如月がそう言うときみるうちに杖の斬魄刀は刀になる。その刀は少々大きく、伸びたり縮んだりするようだった。色は彼女の瞳と同じ不思議な色だった。

「それは.....。」

「私の二つ目の斬魄刀だよ。さっきのはお遊び専用だけどこれは攻撃専用。久しぶりだよ。これを使うのはさ。」

如月が縦にふると剣は分解していく。その刃は無数に彼女の周りに散り、こちらに先を向けていた。

「刃の雨を降らそうか。」

そついうと刃は一斉にシンの元へ向かう。

「薔薇十字団！」

シンが叫ぶと精一杯に幻影たちは刃を振り払う。しかしそれだけではたりず、シンに数か所突き刺さる。

「くっ。」

「こんなもんじゃないよ。雨はそう簡単にやまないよ……。」

今度は如月が近づき、剣を振る。シンはあはあと息を荒くし、なんとか避ける。

「なかなかやるよね。君も。」

「黙れ！本気をだしていない貴様に俺が負けるか！」

怒りとそうしようもない焦りでシンの精神はもう不安定だった。

「ふーん。そつか。じゃ君も正解しなよ。できないのか？」

「……。」

「そう。じゃあ、死んでもらおうか。」

（私は死ねたらなんでもいいの。けどわざと死ぬほど落ちぶれてないんだよ。）

如月が刃を放ったその時――――。

パリン！という音と、風の強い音が瞬間にした。

如月は目の前の状況をよく理解した。

「本当に……。話を聞いていなかったのか……。それとも私の力を理解していないのか……。ねえ浮竹。」

目の前にいたのはまぎれもなく浮竹だった。

「どういうことだ？その子が子供だから？こんなところまできてかばったというのか？」

如月はイラつきながら言った。

「子供でもあるし、罪もない人間を殺すことは死神には許されない。」

「はっ！罪？罪がない？？馬鹿言ってんじゃないよ！私の存在は罪なのに何故あんなたちは私を殺さない！？ふざけんじゃないやねえよ！」
如月は目を見開き涙を流していた。しかしその声は枯れることはなかった。

「如月．．．．。」

「浮竹はいつもそうだ！あの時――。空座町の闘いときも私を殺そうとはしなかった！今度もだよ！かばっておいてあんなは何もしない！いつだって．．．。」

「でも俺は彼を殺した。」

「彼．．．．？」

「鬼風夢雅。」

「っ！．．．．。夢雅を．．．．？」

「．．．．。」

「あんたが殺したの．．．．？」

如月はうつむいてから彼を見つめた。

「っ！どいて！あんたの出る幕じゃない！私はシンくんを殺す！彼は私を殺す！私を殺す意思がないやつは私の前にいないで！」

「それはできない。如月。お前は生きればいいんだ。死ななくていい。お前はずっと．．．。」

如月は問答無用に浮竹を斬った。浮竹は下に落ちていく。

「如月．．．．。」

「わかったように．．．．わかったように言わないでよ！私の苦しみなんてわからない！簡単に死ねるあんなにかにっ！」

如月ももう我を忘れていた。再びシンを睨むとその眼は赤く光りはじめた。

「ごめんね．．．．。シンくん。これで．．．。終わらせましょう。」

村雨の刃が再び刀に戻ると、如月は刀に口付けて、その唇を血で溢

れさした。

そしてあたりは異様につつまれる。

全てを―――。

「呑み込め。アルテマ!」

38 夢想の乱舞（後書き）

ぱくっててすんませんw

如月の斬魄刀

第一 アマテラス 杖であり槍のような形をしている。能力は主に鬼道をつかう。縛道、破道、如月は全て習得している。それを組み合わせて使ったりする。

第二 村雨 写せといい、その写せとは一度闘った死神、アランカルの斬魄刀の能力をそっくり使える。しかし攻撃力はその半分なのであまり実戦には向かないかもしれない。主な能力は無数の刃で相手を串刺し。その剣の力は総隊長の名にふさわしい。

第三 アルテマ 呑み込め……。その名の通りすべてを呑み込む。
。。。

浮竹さんは死んでいないので安心してください。

如月が抜いたとき。もうあたりは暗闇だった。空はもう確実に黒雲が包んでしまっている。シンには空の面影など感じず、ただ闇しかないと思った。

傷にたえながら殺気にたえながら霊圧にたえながらシンは目の前の女を睨んだ。如月は前の天使のような顔をしていなかった。目は赤くどすぐろい。歯は牙のように向いている。あろうことが背中には黒い翼が生えていた。もう死神でもなんでもない。

「この姿を．．．君みたいな人間に見せたのは初めてだよ。あの藍染惣右介にも見せてない。」

そう言う彼女はもう死神ではなく虚だったのかもしれない。ただ感じたこともない霊圧と殺気にシンは震えるだけだった。さっきまでは彼女に霊圧など感じられなかったのに。もうそれが空間や世界を支配している。

「さあ。君はどうする？ 闘うか。逃げるか。死ぬか。選べばいい。」
彼女の笑う牙がシンの心臓を突き刺す。

「私がこの剣を一振りすれば瀟霊廷なんてもう終わりさ。この世界も全部消えるさ。でもあえて使わないのは．．．わかるよね？ 私の気持ち。」

（わ、わからない．．．。）
心の中ではいくらでも声にできるのに口にすることは到底できなかった。

「本当は全部いらないけれどそうしてしまったら本当に悲しいから。だから絶対しない。人は戦争するよね。死神も虚も闘う。けど何のために闘うんだろうね？ 護るため？ 違う。欲のため？ 違う。闘うこ

とは憐れなものだ。望まない人まで巻き込むんだ。そして哀れな者たちは最後を知らないんだ。すべて殺せば周りの者も邪魔になって喰らう。そして一人になって．．．一生孤独にすごす。その辛さは．．．わかるよね？誰も会話する人がいなくなつて。生き物がいなくなつたらもうこの世に何も残らない。そんな世界は誰もが望みなから恐怖するのさ。闘うことは自らを孤独にし、悲しむことさ。」

「君はそうだね。君も心春ちゃんのためなら人殺しでもなんでもするよね。簡単に言つたらさ。世界中人間がすべてが心春ちゃんと付き合いたい。結婚したいと言つたら全部殺すでしょ。そうしたらもう．．．。心春ちゃんは君のことを嫌いになつてそれがたえられなくなつて大事な心春ちゃんまで殺しちゃつて．．．。君は地獄に落ちるのさ。」

「はははは！いいね。その顔！最高だよ。．．．だから．．．。君はもう死んだら？楽だよ。」

（もっともつと私を憎んで。お願い．．．。）
シンはもうシンではなかった刀を掲げると幻影は一つになった。シンは異様に包まれる。そして如月のもとにまっすぐにつつこんだ。
「なっ．．．！」

（速い！）

如月はよけることができず、腹に剣がささる。

「くっ．．．。」

如月はすぐにふりはらつて剣を振る。そうすると見たことない竜巻のようなものが作り上げられ空に放たれる。それは見えない刃となつてシンに降り注ぐ。微弱な傷ほど痛いものだ。

しかしシンはもう止められなかった。我を忘れ心春さえも忘れ、如月を殺すことしか考えられなくなった。シンは再び突き刺す。今度は胸にあたる。

（こいつっ！アルテマを解放した私より速い。こんなの．．．クソ

ジジイ以上だ！イチゴくん以上．．．。）

如月は翼を広げ飛んでいった。しかしシンはすぐに追いかけて如月を下へ落とした。

「くっ！！」

如月は湖へと叩きつけられる。この湖は沈まない。ということは．．．。

（月姫の湖！）

触れた傷は水のおかげで回復していく。しかし押さえつけられている腕はどんなにもがこうとも殺気をぶつけてもはずれない。シンの顔を見た。その時如月の思考はもう動かなかった。

そう。その顔は．．．。

シンが如月ののど元に剣をつけた瞬間――。

『シン．．．。』

心春・・・。

心春の顔が見えた。背景は真っ白だ。心春は微笑んでシンを見ている。その顔は変わることなく。ただ見つめるだけ。

『シン・・・。』

彼女は満面笑みを見せてくれた。かつてこれほど笑っている姿は見たことがない。

『無理しないでいいんだよ。もう・・・。私のために頑張らなくていいんだよ。言ったでしょ？』

『私はシンが大好きだから。私は闘うから．．．だからシンは．．．』

その一言は．．．シンを変えたんだろう。

『自分らしく生きて。』

心春は消えていく。

もうシンは闘うことに疲れたのだ。如月の言っていることがあまりにも真実だったから。

「っ．．．？」

如月が目を開けると、黒い瞳に戻ったシン。その顔はどんな時よりも美しく見えた。

「あんたはもう眠れるだろう．．．。あんた．．．。」

如月が気が付くとそれはもう自らの剣で腹を貫いていた。

「どう．．．して．．．。」

「．．．．．。」

「私はこんなじゃ死ねないよ．．．。シンくんみたいな強い心で．．．なのに．．．どうして血が止まらないの．．．？どうしてこんなに苦しいの．．．？教えてよ．．．。」

「あんたは．．．もう死神なんだ。化け物じゃない。あんたは生きているんだよ。あんたは俺に殺されるよりももう自由だったんだよ．．．。」

「そんな．．．だって．．．私はずっと．．．ずっと．．．。生きる．．．。」

如月は涙を隠すことはなかった。

「もう眠れるはずだ。あんたが望んだこと．．．。神様が叶えてくれる。」

「神様．．．？」

「あんたにも聞こえないか？あの唄が。」

「唄．．．。」

シンは如月を抱え、湖の中心に向かう。そしておろしてやる。

「月姫が．．．あんたを迎えてくれている。あんたは永遠に眠れるよ。」

「．．．．．！もう．．．いいんだね．．．。もう．．．。生きなくていい？」

「ああ．．．。あんたの苦しみ．．．俺はわかった。剣をまじえてわかることだ。あんたは闘うことを俺に教えてくれた。だから感謝してる。」

「っ．．．。ありがとう。ごめんね。シンくん．．．。ごめん．．．。」

「もう．．．。いいんだ。だから．．．。」

如月は瞼を閉じる。

「安らかにやすみ．．．」
そして彼女は沈んでいく。誰にももう彼女を目覚めさせることはできない。話すこともできない。彼女は完全に世界から消えたのだ。

ねえ．．．。シオン．．．。言ったよね。お前は死ねないって．．．。

でもね．．．。今もう死ぬんだよ。

シオン．．．。あなたの苦しみはすごいよね．．．。

ずっと独りで．．．。ずっと生き続けて．．．。生命の誕生を待っていたものね．．．。

知ってるよ．．．。私は。あなたの悲しみも涙も。

でも憎んでたよ。愛してたよ。その矛盾も全部。

あなたも眠れたらいいと思う。けどできない。

ごめんなさい。あなたを置いていく。あなたをまた一人にしま
う。

でも私の幸せ願ってくれるなら．．．。

私も。あなたにまた会えることを望みたいと思います。

それまで一度も思っていなかったことを。

夢の中で会えるでしょうか？

私の永遠の空虚の中で。

39 月光（後書き）

びみよくな終わり方ですね。わかってますよ！もうすぐ終わりですよ。

40 ケテルアクゼリユス（前書き）

短いです・・・。忘れた方は闇の王族あたりを読んだほうがいいです

40 ケテルアクゼリユス

同じ赤い瞳の女が死んだ。シオンは揺るがぬ王座に独り座り目を伏せた。横には楽しんでる人間の遊びチェスを転がして遊んでいた。ルールは理解できたのだが遊ぶ相手がいない。

彼女を思い浮かべた。彼女は人間だったところから不幸な女だった。愛されることを知らず愛すことを知らず一人また一人殺して殺して生きて生きて。最後は憎しみによるものに殺される。いつもそうなのだ。死神となってからもやつと愛すること、愛されることがわかっただろうにまだわかっていなかった。そして憐れな虚となる。なんて愚かなんだろう。そんな彼女はほかのものとは昔から違っていた。そこにシオンは目をつけた。彼女に最高の力と容姿を与える代わりに何よりも苦しい不死を与える。

自分と同じ存在をこの世に残したかった。この無念の苦しみは誰にもわからない。けど彼女を作ること自分の苦しみも少しは和らぐと思った。確かに彼女が死ぬまでは和らいだだろう。

しかしもう彼女はいない。自分と同じ存在はいない。シオンは考える。

（俺という存在を作ったのは誰だ？だれが俺に王の座を与えた？この世に神という存在は自分だ。だが．．．人間がいう神とは．．．

．誰が作った？）

シオンはにやつと一人笑った。

シオンはもう何もしなくともよかった。不老不死。この世界が生きるのは永遠。自分は人間が死んだときに生まれた。そうずっと思ってきた。幼少のころなんて自分にはない。生まれた時から自分は王だった。

こんな縛られた運命。けれど唯一の救いがあった。

「君から来るなんてめずらしいじゃないか。」

王座に一本続く階段を純白のドレスを着た美女が歩いてきた。

「お久しぶりですね。シオン様。」

彼女はシオンの前に立つとニコリと微笑み頭を優雅に下げた。

「どうしたんだ？そんな恰好で。」

「似合いませんでしょうか？」

「いや。綺麗だ。」

「お褒めにあずかり光栄でございます。」

彼女は笑った。シオンは彼女を抱き寄せたい衝動にかられた。実行は決してしないが。

「何の用だ。」

「・・・エミールが死んだようですね。」

「・・・ああ。」

「これでシオン様は独りまた生きなければなりませんね。」

「そうだな。だが君がいる。」

「私は貴方とは違います。老いもすれば心臓を貫かれれば死にます。」

「フイーリ。君は死なないよ。俺がさせない。」

「そうですね。私はうれしくありませんね。私には永遠なんていません。いつか誰かがおっしゃいました。愛する者同士の永遠の愛・・・素敵なものだと。しかしそんな不確かなものを信じるほど私はバカではないんです。死んだあとの世界なんてどこかもわかりません。そうでしょう？」

フイーリはそつとシオンの手に触れた。

「今日こそあなたには死んでもらいます。シオン様。」

彼女は一瞬でシオンの喉元に剣を突き付ける。

「何故、止める。やればいいだろう。」

「あなたは死なない。永遠に。この世界を護る礎……。なんて可哀そうでしょうか。私はあなたを殺すために生まれてきた。そう永遠を消すために。この世に永遠なんて存在してはいけない。そういつて私の一族はあなたの命を狙ってきた。しかし貴方は殺した。すべて捨てた。なのに何故貴方は私を殺さないのですか。」

彼女は睨んで淡々と言った。シオンは目を伏せた。

「君を愛しているからだ。」

「理由になっていません。私と貴方が結ばれないことなど初めからわかっているでしょう。」

「わかってるさ。けど君を殺せるほど俺は落ちぶれてなんかいない。」

「どうしてですか。私は貴方を殺す。それが私の使命。なのに……貴方はそれも奪うつもりですか。」

「そうだな。君に殺されたいと心から願うよ。けど君といたいんだ。永遠に。だから君を縛ってしまえば楽だとも思う。けれど君は俺を憎むだろう。それも怖いんだ。」

「……………」

「君は俺を愛さなくていい。いつ殺したって構わない。けど俺のそばにいてほしい。」

おかしな人。私を赤ん坊のころから知っていて、父と母を殺して。それでも私を殺さなかった。私に微笑みかけた。私を愛していると。いった。何もかもが理解できない。私はどうすればいい？

フィーリは泣いてシオンの足にしがみついた。

「この世界で……。存在しているのは私たちだけで……。何が楽しいの？私……。もう死にたいよ。」

シオンは今、確信した。自分と同じ存在はここにもいた。

簡単に殺せる彼女を殺さなければ二人は永遠になれる。

41 無念と休息（前書き）

もう少し続くよ・・・。

41 無念と休息

「！如月の霊圧が消えた．．．。」

「く、黒崎さん！じゃ、じゃあシンが．．．。」

心春は震えながら言った。

「親父！場所わかるか！？」

「．．．月の湖だ．．．．。」

三人が月姫の湖につくとシンが倒れている姿が見えた。

「シン！！」

心春は夢中で駆けた。シンを抱き寄せて泣いた。

「シン．．．．。ごめん．．．．。ごめん．．．．。」

「一護。」

月姫は湖の向こうで愛しい人の名を呼んだ。

「月！」

月姫はいつものように美しい顔だったが悲しみに歪んでいた。

「如月が死んだ。どうやらこの湖は死んだ死神は沈めるようだ。それに．．．その子。」

一護はシンに目を向けた。

「そいつは総隊長を超える力を持っている。たしかに強い力を感じたがこれほどとは思わなかった。強い生への執着。護るもののために命を捨てる覚悟．．．。あの男が目をつめなければいいがな。まあこの子の父がなんとかするだろう。」

「．．．．．月。如月が死んでもお前はここから．．．．．。」

「椿が死んだこととわたくしは関係がない。一護、また頼みだ。」
「何だ？」

「星凜を呼んでやれ。五月雨星凜だ。あいつは如月を慕っていたかな。別れくらいさせてやれねば。それとな。わたくしはまだあなたと話せるが如月はもう出てこない。」

「・・・！そうか・・・。わかった。」

一護は目を伏せてうなずいた。

「一護。悲しむな。あなたは笑えばいいのだ。わたくしはそれで幸せだからな。如月のかわりにあなたが総隊長になったらどうだ？」

「お、俺が・・・。」

「浮竹隊長は京楽隊長がひろってくれて四番隊にいる。あとで挨拶にいけよ。一護。あなたはわたくしが囚われて悲しんでくれたな。でももういい。あなたは何かのために力をつかってくれ。」

「月・・・。」

「千石隊長も亡くなった。わたくしが弔うでしょう。」

月姫は心春に目を向けた。

「心春。」

「・・・！！」

心春は目に涙をあふれさせながら月姫を見た。

「シンはあなたを護るために闘ったのだ。だからあなたは悲しむな。泣くな。シンの前では笑ってやれ。確かにあなたは悔しいだろう。

無力な自分が。だがなシンはあなたが傷つくほうが自分が傷つくより何倍も悲しいのだ。一緒に闘えるようにこれから強くなればいい。」

「

「・・・はい・・・。」

「一。」

「母さん・・・。」

「あなたはやはりわたくしの子だ。よかった。」

月姫は嬉しそうに笑った。一は訳がわからなかった。

「あなたのその優しい心がわたくしの誇りだ。だれが何と言おうと

もな。一。それを亡くすな。」

一はゆつくりうなずいた。

「・・・・・・・・。みんな・・・・。死ぬことが怖いだろう。わたくしも怖い。いつあなたたちの顔が見れないかと思うと涙が止まらない。だがな。永遠も怖いのだ。永遠にこの中で・・・・。だからいつか死ねたらいいと思うよ。」

「月・・・・。」

「ではな。如月を・・・・千石隊長を弔うことにする。」

月姫は歌い始めた。その歌は美しく悲しく癒しの唄だった。

「雨・・・・？」

七色の雨が大地へ降り注いだ。

「月姫の涙だ。」

一護は切なそうにつぶやいたのだった。

数日後。如月と千石が死んだことは全死神に伝えられた。一護は必死に隊長を説得したが意見はそれぞれ分かれた。シンと心春を殺すべきだというもの・・・・。如月をそこまで追い詰めてまで守ろうとしたのだから報われるというもの・・・・。

「黒崎さん。本当に死んだんですか。」

星凜はうつむいて一護に言った。

「ああ。」

「あの人が死ぬはずないです。いつも笑って．．．。仕事はしなくて．．．フラフラしてて．．．。あんな人だけど強くて．．．憧れだったんです．．．。」

「星凜．．．。」

「あの少年が．．．虚が殺したんですか。」

星凜はシンを睨んでいった。ここは浮竹の部屋。浮竹と並んでシンは眠っていた。シンはあれから一度も目覚めていない。心春は星凜の視線におびえていた。

「虚じゃねえ。人間だ。それにシンは殺してない。」

「僕もそう思いますよ。椿様を殺せるのは椿様だけなんだから。だけど．．．。」

星凜はなおもシンを睨む。

「僕は椿様に．．．。どうしたら．．．。」

星凜は崩れた。一護と一は彼を見つめたが何も言えなかった。

「心春。」

「？．．．シン？」

シンはゆっくりと目を開けた。その時、星凜と目があった。

42 希望の光

シンは起き上がった。肩などに痛みがあるようでピクリと肩を揺らす。

「シン！」

心春はシンを支え叫ぶ。

「大丈夫だ。心春。」

シンは優しく言ったが遠く、星凜を見つめた。

「貴様・・・俺に話があるんじゃないのか。」

「・・・！」

星凜は近づき、シンの胸倉をつかんだ。

「貴様ツ！虚が・・・。」

「虚が？・・・なんだ？」

シンは星凜の腕を掴んだ。

「言いたいことがあるなら言え。如月椿のことだろう？」

「！」

星凜はぐつと黙ったやれきれない顔をした。なおもシンは星凜の腕を掴む。

「つ、椿様は最後・・・・・・・・し・・・・。」

「・・・・・・・・。」

「幸せそうだったか？」

星凜の目から涙が溢れはじめ零れ落ちた。

シンはゆつくりと頷いた。

「ああ。お前の名も言っていた。」

「！・・・本当か？」

「ああ。信じてやれなかったと言っていた。恐れていたんだと。誰かを信じることをな。裏切られることが怖かったんだろう。」

星凜はシンを掴む力を弱め、シンに抱き着いて声をあげ、泣いた。

「すみませんでした。浮竹さん。」

「君が誤ることはない。シン。」

回復した浮竹はシンと心春に微笑んだ。

「いえ。俺が・・・ありがとうございました。」

シンはあの時浮竹が来たことに感謝していた。シンはまだこの男なら信用できると思った。

「さて。今、黒崎が試験を受けている。」

「試験？」

「総隊長になれる試験だよ。そうしたら君たちを元通り現世に返せる。」

「本当ですか！」

心春は嬉しそうにシンの腕を掴んでいった。

「ああ。」

シンは横目で外を見ながら浮竹に聞いた。

「黒崎一は？」

「さあ・・・。けどそのへんにいると思うよ。」

浮竹のその声は優しくかった。

シンは外の庭に一を見つけた。シンは一の横に座った。

「シン……。」

「何落ち込んでいる。」

「……別に……。」

「如月椿が死んだことを悲しんでいるのか。」

「……まあな。あの人は強くて優しくて俺の憧れでもあったんだ。五月雨副隊長だってそうだし……このソウルソサエティであの人を知らない人はいない。だからシンが責められるんだよ。如月隊長が死ぬわけないって……。」

「ふっ。それなら俺がやったことにはなれない。俺がそんなに力があるわけないからな。」

「そうだな……。」

「俺は知ったんだ。護ることを……考えて全て破壊したら全部失ってしまうとな……。あの日……。俺は。」

シンは切なさうに瞳を細くする。気のせいかな。シンからは何かが消えた。あの恐ろしいものが。

「斬魄刀はもうつかえないな。俺はもう完全な人間だ。」

「そっか……。」

「俺はこれからも心春を護りたいと思う。けど彼女が傷つくことが悲しい。そして幸せなことに。」

シンは一に見せたことのない笑みを見せる。

「俺が傷つくことが心春にとって一番悲しいことだと言ってくれたんだ。」

「……。」

「は信じられない顔をした。」

「何だ。その顔は。」

「い、いや・・・よかったな。シン。」

「貴様に言われるのは気に入らんがああ。」

シンは立ち上がって去って行こうとした。

「シン！」

「お前・・・ちゃんと生きろよ。死んでいいなんて思っな。」

シンは頷いた。笑顔で。

そして黒崎一護は全死神に認められ総隊長となった。誰も反対する者はいず皆喜んでいた。

「というわけで二人とも帰れるぞ。」

「はい！ありがとうございます！あ。おめでとっございますー！」

「ありがとう。心春ちゃん。」

一護は心春を優しくなでる。

「おめでとっ・・・ございます。」

シンは目を逸らし、言った。

「ありがとう。シン。」

「・・・。」

「おい。一。送ってやれ。それとしばらくソウルソサエティには帰ってくんな。」

「お、親父！？」

「月がな。俺と同じ高校を卒業してほしいってな。月の願いだ。いいだろ。」

「はうなずくしかなかった。」

「じゃあな。一。虚から守ってやれよ。」

「わかってる。」

「元気でな。」

一護は手を振って三人を送った。シンは無言で頭を下げた。昔のシンなら絶対やっていないだろうことをシンはした。心春も一緒になつて頭を下げた。

そしてシンと心春は元通り暮らせることになった。光の世界で。

私は何もできなかった。シンにすがって泣いてばかりで……。

でも月姫さんが言ったこと……。あれも確かなことだと思つから私はできるだけシンの前では笑っていたと思う。

これから悲しいことも困難が待ち構えているはず。けど私は知っている。

あの日……。シンは私を護ってくれた。シンは強くなった。

私は笑うことを知っている。これが力になることも。

無理なときは泣けばいい。楽しいときは笑えばいい。

私は私であるために生きる。だからシンにも生きてほしい。ずっと笑って……。。

あの日まで。誰かが望まない永遠を私は今望みます。
悲しくない未来を知っているから。

42 希望の光（後書き）

もう微妙で・・・疲れてます。番外編はまたします。

長い間ありがとうございました！！！！

お気に入りに入れてくれた方。読んでくださった方本当にありがとうございます！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6115m/>

あの日

2010年11月17日20時29分発行